福江市文化財調査報告書第５集

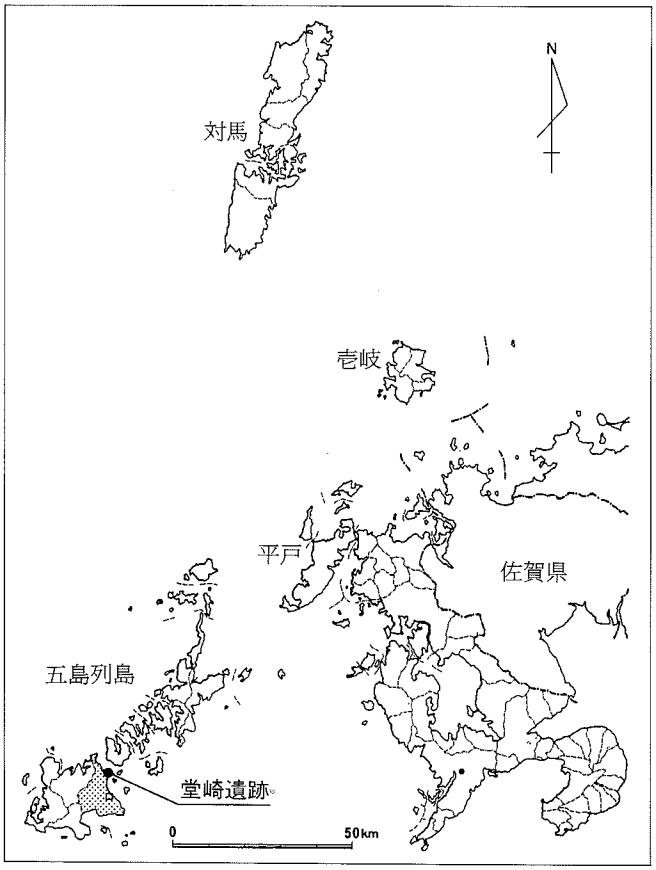
福江・堂崎遺跡

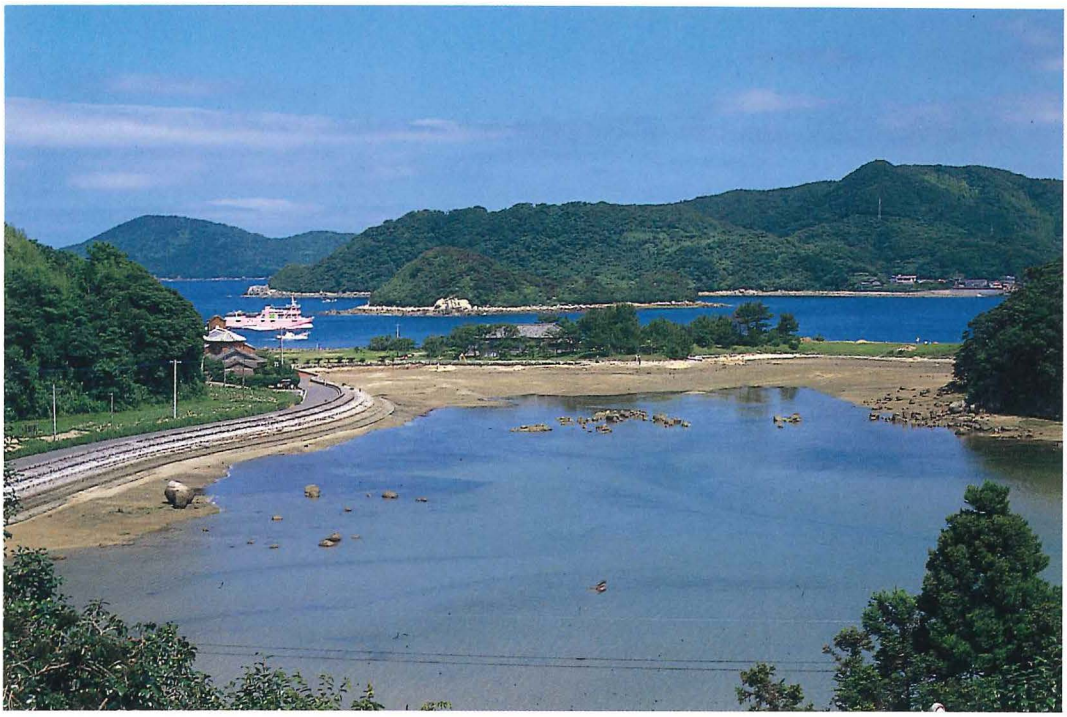
１９９２

長崎県福江市教育委員会

福江市文化財調査報告書第５集

福江・堂崎遺跡





遺跡遠景

調査風景

発刊にあたって

堂崎遺跡は，縄文時代から弥生時代に至る土器や石器，貝殻や獣・魚骨などが，広い範囲にわたり確認されています。昨年の試掘調査結果を受けて，本年も7月17日から16日間にわたり消滅寸前の潮間帯部分の記録保存を目的に，発掘調査を行いました。

これは，県文化課のご協力により実施できた訳でありまして，関係者一同衷心より感謝申し上げます。

今，さまざまな場所で「生涯学習」という言葉に出会いますが，その学習資源は私たちの回りにも豊富にあります。あの遣唐使船時代に，厖大な情報と文化を求めて中国大陸を目指した日本最後の寄港地が，ここ五島でありました。いわば五島は，大陸と日本を結ぶ情報のアクセス・ノードであった訳です。その後の「明」との交易，キリシタン信徒の移住，幕末の外国船防禦を目的とした福江城の築城など，あげれば切りがありません。

私たちの住む五島の先人たちが，ここを生活の場として「黒曜石」も求め，西九州へ出かける。そこはまた，東シナ海を囲む「環・東シナ海文化圏」があったと仮説される広範なエリアでもあります。夢は，益々膨らみます。

このような新たな観点から眺めますと，学習資源は豊富です。これを「生涯学習」の素材として活かす工夫をしなければなりません。そのような意味から，本書が文化財の保護および郷土を知る上で，学問研究・学習の一助になれば幸いです。

調査にあたって，大変多忙ななか県文化課の安楽勉主任文化保護主事，町田利幸文化財保護主事に多大なご指導とご協力をいただきました。また，地元関係者の皆様にも感謝申し上げ発刊のごあいさつといたします。

平成4年3月

福江市教育委員会
教育長　市　川　義　久

例　　言

1．本書は，平成２年６月25日～７月８日まで実施した範囲確認調査と，平成３年７月17日～８月１日まで実施した緊急発掘調査報告書である。

2．発掘調査費用は国費と県費の補助金を受け，平成２年度1,700,000円，平成３年度1,760,000円で実施した。

3．調査は，範囲確認調査を県教育庁文化課安楽勉主任文化財保護主事と小野ゆかり文化財調査員が，本調査を同安楽勉主任文化財保護主事と町田利幸文化財保護主事が担当した。

4．自然遺物の中で貝類の同定および個体数については元県立北高等学校教諭山本愛三先生にお願いし，玉稿をいただいた。
　また縄文時代出土人骨については長崎大学医学部解剖学第二教室助教授松下孝幸先生ほかに玉稿をいただいた。

5．本書の執筆は石器の項を町田が担当し，それ以外の項は安楽が担当した。なお編集は安楽が行い町田の協力を得た。

6．本書の写真については，調査中の写真を安楽が，遺物写真を町田が撮影した。

7．出土遺物は福江市教育委員会が保管の任にあたっている。

8．本書の表題が「福江・堂崎遺跡」となっていることについては，本県には長与町に堂崎遺跡と有家町に堂崎遺跡があり，まぎらわしいため，あえて「福江」を冠した。

9．調査に直接かかわった福江市教育委員会関係者は次のとおりである。
教育長・市川義久，社会教育課長・末永文隆，課長補佐兼管理係長・久保博信，
主査・中島栄士，五島観光歴史資料館館長・松本昌，社会教育指導員・松園周光，
現環境衛生課長補佐・月川敬身

10．現地では遺物の整理，機械の収納等については，堂崎教会監視人の白浜実氏の自宅を提供していただいた記して感謝したい。

本文目次

I　調査に至る経緯……1

II　遺跡の立地と環境……2

III　調　　査

(1)　調査の概要……5

(2)　層　　序……6

IV　遺　　物

(1)　外海部出土の轟式土器……9

(2)　外海部出土の曽畑式土器……18

(3)　試掘調査Ⅰ—13—Ⅲ層出土の曽畑式土器……20

(4)　南側砂丘出土の阿高式土器……22

(5)　その他の土器……22

(6)　石　　器……24

V　総　　括……41

VI　長崎県福江市堂崎遺跡出土の縄文時代人骨（松下孝幸・佐伯和信・分部哲秋）……61

VII　長崎県福江市堂崎遺跡の貝類より見た考察（山本愛三）……75

挿図目次

第１図　地形分類図……2
第２図　福江市遺跡分布図……3
第３図　堂崎遺跡調査区配置図……5
第４図　Ｍ－１・Ｍ－３東側土層実測図……7
第５図　Ｅ－13・Ｉ－13東側土層実測図……7
第６図　堂海２北壁土層実測図……7
第７図　２Ａ－１・２Ａ－２土層実測図……7
第８図　２Ａ－２出土遺物ドットマップ図……8
第９図　出土土器実測図①……10
第10図　〃　②……11
第11図　〃　③……13
第12図　〃　④……14
第13図　〃　⑤……15
第14図　〃　⑥……17
第15図　〃　⑦……19
第16図　〃　⑧……20
第17図　〃　⑨……21
第18図　その他の土器実測図⑩……23
第19図　出土石器実測図①……25
第20図　〃　②（剝片①類）……26
第21図　〃　③（剝片②類）……27
第22図　〃　④（鋸状石器・掻器・削器類）……29
第23図　〃　⑤（石鋸・掻器・石核類）……30
第24図　〃　⑥（掻器類）……31
第25図　〃　⑦（石斧類）……32
第26図　〃　⑧（礫器類①）……33
第27図　〃　⑨（　〃　②）……35
第28図　〃　⑩（　〃　③）……36
第29図　〃　⑪（石錘類）……37
第30図　〃　⑫（石錘類）……38
第31図　表採石器実測図⑬（石皿・石錘類）……39

図版目次

図版1　遺跡遠景……45
図版2　遺跡近景……46
図版3　土　　層……47
図版4　遺物出土状況……48
図版5　〃　……49
図版6　Ⅰ—13区遺物出土状況……50
図版7　土層および調査風景……51
図版8　昭和36年撮影の堂崎教会……52
図版9　出土土器①……53
図版10　〃　②……54
図版11　〃　③……55
図版12　出土石器①……56
図版13　〃　②……57
図版14　〃　③……58
図版15　〃　④……59
図版16　出土自然遺物……60

表目次

表1　堂崎遺跡石器計測表……40

Ⅰ　調査に至る経緯

堂崎遺跡は，昭和51年堂崎教会を訪れ，海岸を散策されていた海保幸晴氏によって発見された。同氏は西側内湾部の礫が堆積していた表面より１個の礫器を採集され，県文化課へ持ち込まれたのである。その後遺跡発見届を行い，長崎県遺跡台帳には34―６として周知されている。

昭和52年，当時県文化財保護指導員であった地元の松崎久麿治氏は，遺跡範囲が東側の礫で覆われた外海部にも及んでいることを確認されている。その後昭和62年，九州北西部を通過した台風12号は，五島列島各地で大きな被害をもたらした。堂崎遺跡においても海岸線が浸食され，遺物が散乱した状態となっていた。満潮時には海中に没する遺跡の性格上，日々浸食が進行するなかで，このような現状に対して何らかの記録措置を講ずるべきではないかという意見が出された。

福江市教育委員会では遺跡の保護対策を検討する必要から，昭和63年５月県文化課に対して現地指導の要請があった。現地踏査には県文化課から安楽・町田が，市教育委員会からは林・渡辺が参加して，次の協議を行った。

① 東側の海岸部には貝塚がむき出しになったと思われる貝殻類に混って土器や石器片が表面に認められるが，保護策については有効な手段が無く，浸食については潮間帯に位置する海底遺跡の宿命であること。

② 現時点では，これ以上浸食する前に記録保存を行った方がよいこと。

③ 遺跡の範囲は外海部，内海部それに砂丘全体にも及んでいる可能性があることなどから範囲確認調査を実施し，遺跡の拡がりと性格を把握した後に対策を考える。

以上の協議事項をふまえ，福江市教育委員会では平成２年度国庫補助事業による埋蔵文化財包蔵地範囲確認調査を目的として平成２年６月25日～７月８日までの14日間実施した。調査の結果，半島状を呈する平坦部のほぼ全域と，内外の潮間帯の一部から縄文時代を主体とする遺物が認められた。特に外海部では貝層がうすく残存しており，このままでは波の浸食により遠からず消滅することが予想された。

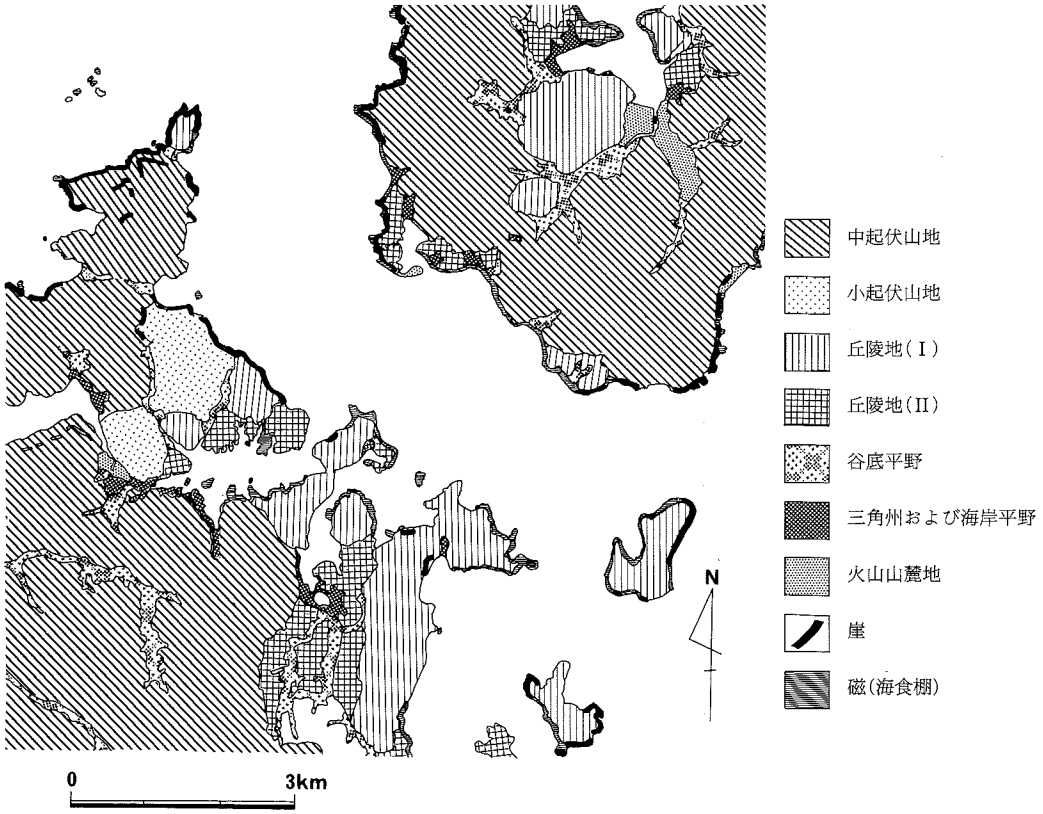
そこで福江市教育委員会では，潮間帯に位置する遺物出土の範囲について本調査を実施することになり平成３年度国庫・県費補助事業として平成３年７月17日～８月１日の16日間実施した。

II　遺跡の立地と環境

五島列島は，長崎の西方約100kmに位置し，宇久島から南西に小値賀島，中通島，若松島，奈留島，久賀島，福江島の７島が続き，それらを中心に250余の小島から成り立ち，その距離は100kmにも及んでいる。

気候は対馬暖流の影響を受け温暖である。地形的には断層と沈降による一連の地塁山地を形成し，そのため南では複雑なリアス式海岸が見られるのに対し，北では海蝕崖などの海蝕地形の発達が著しく，海岸までせり出した険阻な山が多い。また五島列島は火山の種類と数の多いことでも知られ，臼状火山や楯状火山などが各所に見られる。なかでも福江島南島部は比較的新しい鬼岳火山群で構成され，流れ出した溶岩流は緩い傾斜地を形成し，埋没した岩礁地形をなしている。

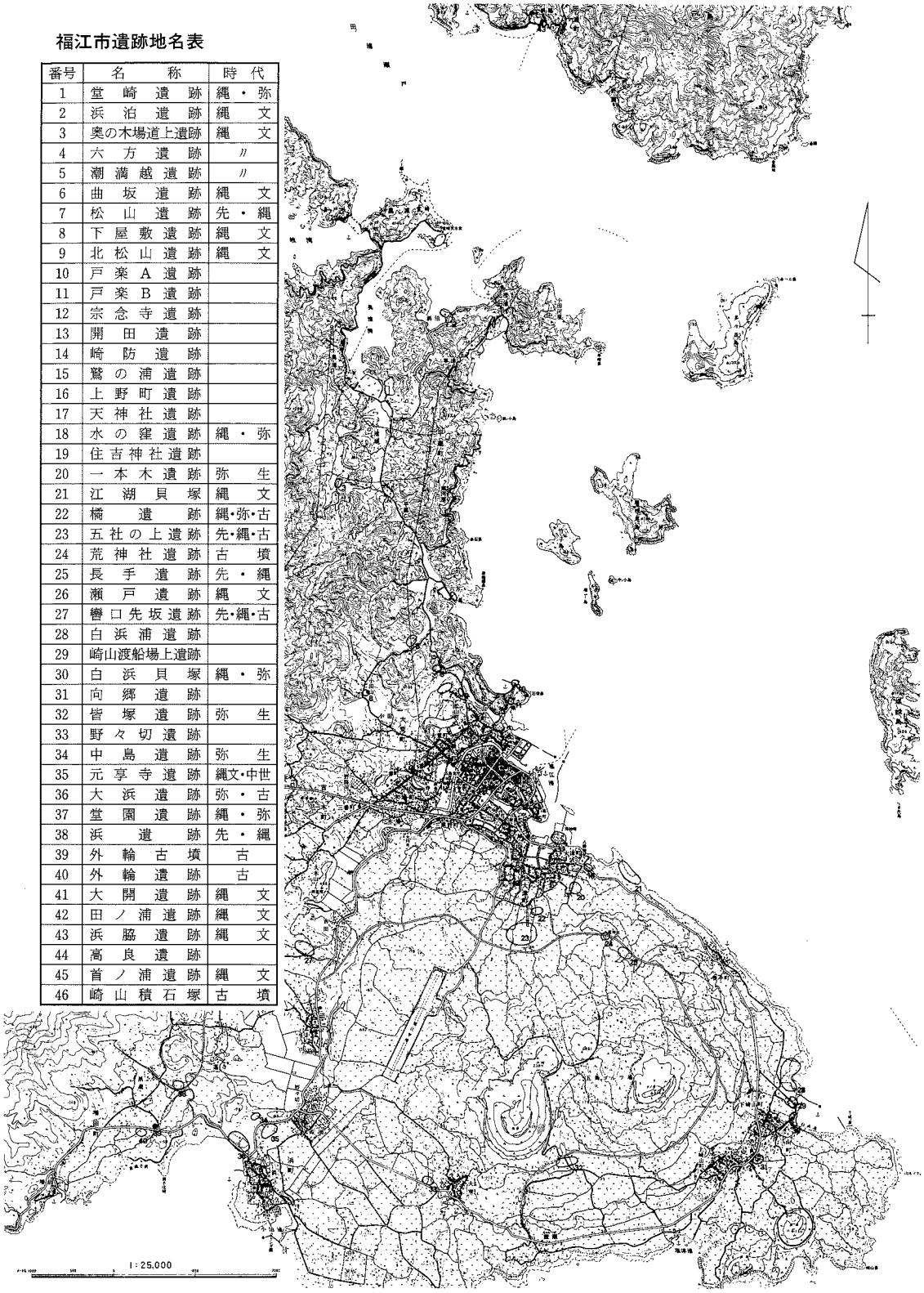
遺跡周辺の地形では，中起伏山地が大部分で占められいるが，東側は起伏量100mからそれ以下の丘陵地で占められている。低地は極めて少なく浦頭あたりにわずかに見られるだけである。地質は砂岩および泥岩から成る五島層群と，浜泊から堂崎の半島の部分は花崗斑岩の組成となっている。遺跡は本来堂崎教会の位置する半島先端と南側の小島が繋って形成されたものであり，海浜礫および砂を主体とした砂丘上に営まれたものである。



第１図　福江市北部地形分類図(土地分類基本調査 長崎県 1979)

福江市遺跡地名表

番号	名称	時代
1	堂崎遺跡	縄・弥
2	浜泊遺跡	縄文
3	奥の木場道上遺跡	縄文
4	六方遺跡	〃
5	潮満越遺跡	〃
6	曲坂遺跡	縄文
7	松山遺跡	先・縄
8	下屋敷遺跡	縄文
9	北松山遺跡	縄文
10	戸楽A遺跡	
11	戸楽B遺跡	
12	宗念寺遺跡	
13	開田遺跡	
14	崎防遺跡	
15	鷲の浦遺跡	
16	上野町遺跡	
17	天神社遺跡	
18	水の窪遺跡	縄・弥
19	住吉神社遺跡	
20	一本木遺跡	弥生
21	江湖貝塚	縄文
22	橋遺跡	縄・弥・古
23	五社の上遺跡	先・縄・古
24	荒神社遺跡	古墳
25	長手遺跡	先・縄
26	瀬戸遺跡	縄文
27	轡口先坂遺跡	先・縄・古
28	白浜浦遺跡	
29	崎山渡船場上遺跡	
30	白浜貝塚	縄・弥
31	向郷遺跡	
32	皆塚遺跡	弥生
33	野々切遺跡	
34	中島遺跡	弥生
35	元享寺遺跡	縄文・中世
36	大浜遺跡	弥・古
37	堂園遺跡	縄・弥
38	浜遺跡	先・縄
39	外輪古墳	古
40	外輪遺跡	古
41	大開遺跡	縄文
42	田ノ浦遺跡	縄文
43	浜脇遺跡	縄文
44	高良遺跡	
45	首ノ浦遺跡	縄文
46	崎山積石塚	古墳



第2図　福江市遺跡分布図

五島列島は古くは松浦郡値嘉島と呼ばれ「肥前風土記」には八十余の島と記されている。福江島はその中でも一番大きく，行政的には１市４町で構成され，総面積324㎢である。その中で福江市の面積は約158㎢で半分を占める。

今日の福江の基盤を築いたのは中世に遡る。近世五島を支配したのは最北端の宇久島を本貫とする宇久氏で12世紀頃のことである。その後８代宇久覚は永徳３年（1383）宇久島から福江島の岐宿城岳に移り，その子９代勝が嘉慶２年（1388）岐宿より福江深江に移り辰の口城を築く。さらに江川城が６代80年にわたって居城とされているが，藩政時代になると，現在の地に居を構え五島家の城下町として整備拡充されていった。現在の石田城は，幕末異国船に対する防衛を主なねらいとして15年の歳月を要し，文久３年（1863）完成した，近世における最も遅い時期の，最も新しい，三方を海に面した海城である。

現在でも町の中心部に城郭は残り往時の面影をとどめる。市内には各種の施設や機関が集中し，五島における行政・文化・経済・交通の中心的役割を果たしている。

福江市における遺跡を概観すると，現在遺跡台帳に収録されている遺跡は46箇所を数える。内陸部では遺跡の立地は少なく海岸線に多い。これまでに調査された縄文時代の遺跡では昭和44年に実施された江湖貝塚がある。市内東南部の江湖浜にあり，堂崎遺跡と同じ潮間帯に位置しており，曽畑式土器を主体に碇石と考えられる大形の石錘や人骨が出土している。崎山地区向町の白浜貝塚は昭和54年に一部調査され，縄文前期から弥生前期に至る良好な資料が出土している。特に縄文晩期終末から弥生に至る資料中には大陸系の石器も含まれ，稲作農耕を考える上で重要な遺跡である。また，鬼岳南西の大浜町には水田中から発見された中島遺跡がある。縄文後期から古墳時代までの遺物が多く出土し，縄文後期に属する貯蔵穴の出土が注目される。さらにこの遺跡からは多くの須恵器も出土あるいは採集されているが，松崎久麿治氏採集品の中に「八山」の銘ある墨書土器があり，これまで古墳が発見されていない福江島にあっては大きな意味をもつものである。弥生時代の遺跡は，浜町の大浜遺跡がある。昭和37年の調査では弥生土器や石器の他に砂丘上に12体の人骨が出土，抜歯やベンケイ貝製貝輪を装着したのもあり南方との交易が考えられる。五社神社に伝わる弥生後期の甕棺の出土地は，神社の南東に広がる丘陵地で一本木遺跡からと考えられている。ここに近接する橘遺跡は昭和48年小田富士雄氏が調査され住居跡なども確認されている。古墳時代以降については未解決な部分も多い。五島列島における古墳の築造は小値賀島に円墳の水の下古墳と神方古墳が確認されているのみで，以下は空白区である。須恵器や土師器の出土例は各所で見られているのでいずれ発見されると思われる。

中世以降の遺跡の所在については不明な点が多いが，辰の口城と推定されている周辺においても中世の遺物が発見されており類例の増加が期待される。

以上主な遺跡を概観したが，開発その他で調査される遺跡も多くなると思われ，空白部分の解明に期待したい。

Ⅲ 調　　査

(1) 調査の概要

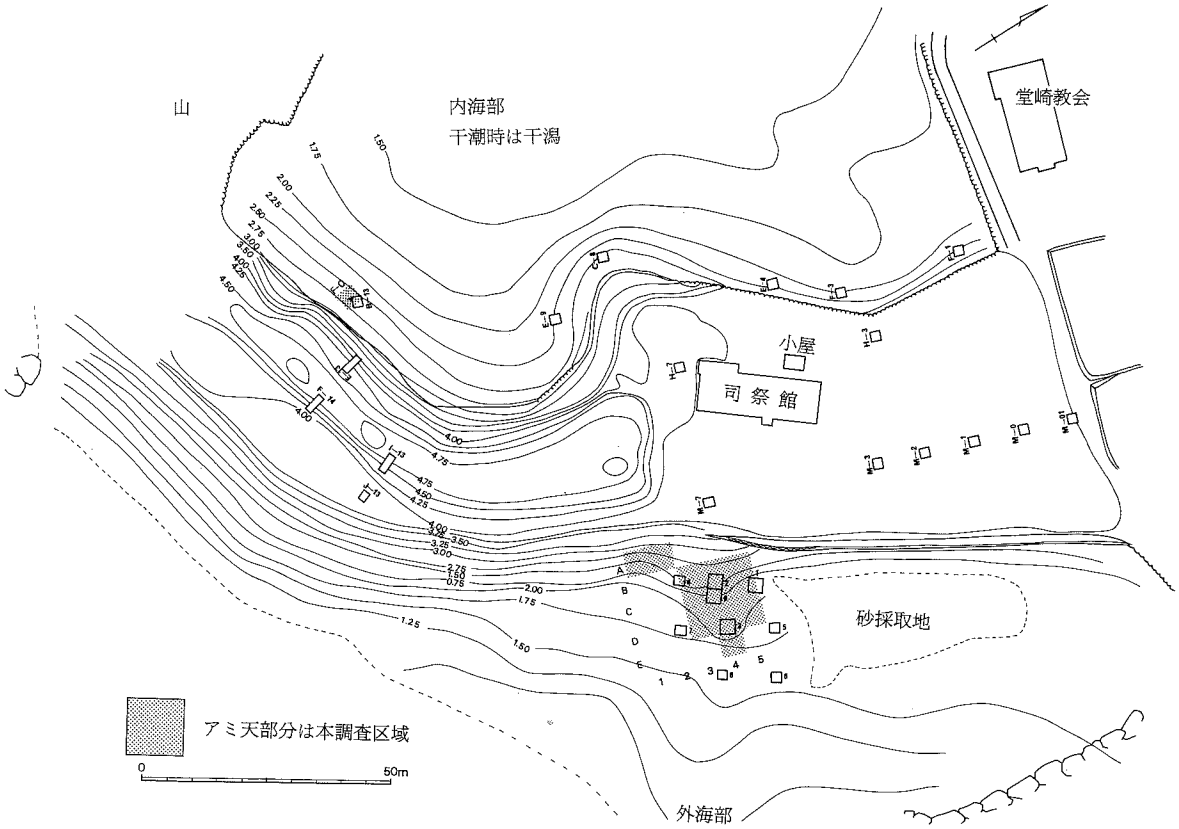
範囲確認調査

第１次の調査範囲は，堂崎教会東側の広場から，南西に位置する島状の山地をほぼ南北に弧を描いて繋ぐ砂丘と，それを挟む内海部と，外海部の海岸線約14,000m²について対象とした。海岸部については潮間帯に位置していたため干潮時を利用した調査となった。砂丘は最高点が標高５ｍに達し，平均満潮位面は標高３ｍである。

試掘壙は西から東へＡ・Ｂ・Ｃ……北から南へ０・１・２……の記号を付け５ｍメッシュに区切った地点に設定したが，外海部については任意の地点，南側の砂丘部分については砂丘の地形に沿って設定したため，方向に同一性をもたない。

本調査

第１次調査で貝層が確認され，波の浸食を受ける潮間帯約316m²を対象とした。東海岸部に５ｍ×５ｍのメッシュに区切り12箇所，西側内湾部に４ｍ×４ｍのグリッド１箇所である。本調査



第３図　堂崎遺跡調査区配置図

では貝層は司祭館南側の前から舌状に張り出しが確認されていたが，張り出し部のほぼ全域についての貝層範囲は完掘することが出来た。ただ潮間帯から西側の砂丘が高くなる部分については，貝層は残っている。

(2) 層　　序

堂崎遺跡の層序は三地区に分けて考えることができる。

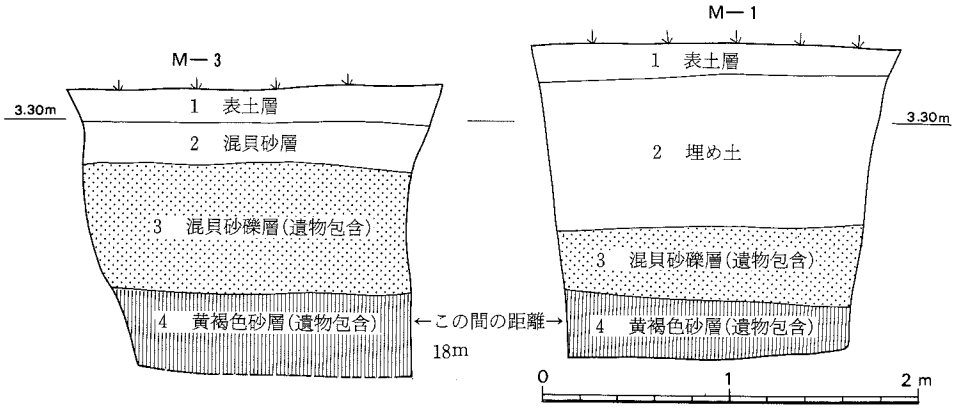
第一は砂丘北側の，平坦に造成された広場と司祭館が建てられている地区である。試掘壙は砂丘を縦断するM列に設定した。その結果，M－0からM－1までは埋め土が厚く堆積している。地元の人の話では，以前は小さな舟が往来できる程の外海と内海が流じる流路があったと言われていたところでその裏付けがされたが，遺物はほとんど出土しない。M－2・M－3からは遺物が良好な状態で出土した。層位は基本的には砂層であり，次の4層に区別される。1層は黒色砂層で表土。2層は混貝砂層，砂よりも破砕貝を中心とした新しい堆積層である。3層は混貝砂礫層，拳大の礫を多く含み，下部になると縄文前期の土器とともに貝殻なども出土し，層の中程で平均満潮位面に達する。4層は黄褐色砂層，礫の混じらない砂質層で縄文前期の遺物とともに，貝殻獣骨が含まれ，貝塚に近い状態である。M－7も基本的には同様の層位を示すが，遺物の量は少ない。H－3およびF－3の下層はほとんど細かい砂層が堆積し遺物は確認できなかった。

第二には南側に東西に形成された砂丘である。この砂丘は明らかに司祭館の南西側から一段高くなるもので最高点が5mを測る。この砂丘には5個所の試掘壙を配した。遺物はすべての試掘壙から認められた。基本的に土層は4層に区別される。1層は表土で腐植物とわずかの礫が混在する黒色砂層，須恵器，土師質土器がわずかに認められた。2層は混礫砂層，小礫が多く，須恵器，土師質土器がわずか含まれる。3層は混砂礫層，拳大から人頭大に至る礫が主体で，縄文中期阿高式土器や黒曜石，石器を含む。4層は純砂層，きめ細かい砂質で縄文前期曽畑式土器や石器を含む。この砂丘の外海に面した所に設定したJ－13からは，表面から1.5m下部までは砂礫層で統一され，轟式系統の土器と思われるものが小破片で出土している。また北側のE－0区では1層の表面には礫がほとんどを占めるが，2層になると混貝砂礫層になり貝殻が目立つようになり特にカキ殻が多い。遺物は中期阿高式土器が出土する。3層は混貝砂層で，砂が占める割合が多くなる。遺物は阿高式土器が出土するが，貝はアワビが多い。アワビ貝は内湾の砂地には生息しないので，別の場所で捕獲したものと思われる。4層は砂質の層で無遺物の層である。

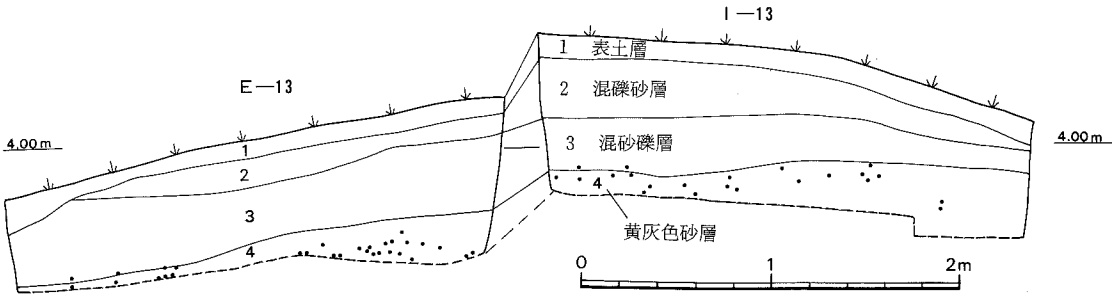
第三の地区は，今回本調査した地域である。試掘調査と重複したが，波の浸食を受け貝層が露出している部分で，満潮時には海面下に没する地点にあたる。

層位は基本的には次の4層に区別される。

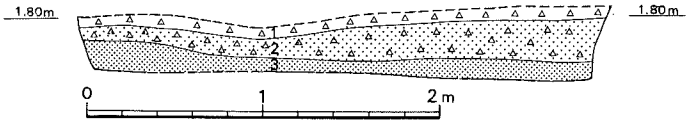
1層は表土で砂礫が中心，遺物も採集できる。2層は破砕貝に黄褐色砂が混じる破砕貝層で



第4図　M I，M 3 東側土層実測図

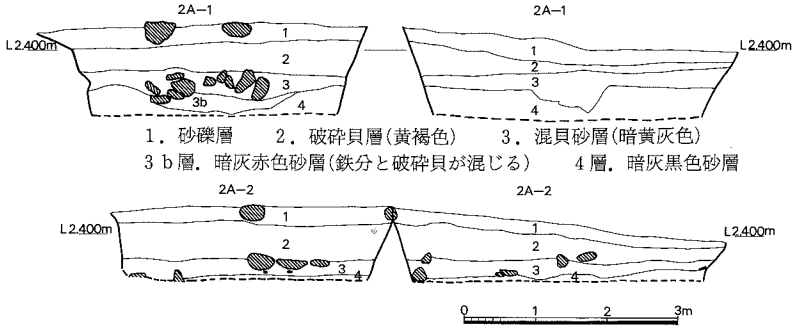


第5図　E—13，I—13土層実測図



1層　混貝礫層（表面は波により侵食，遺物包含）
2層　貝層（破砕貝が多く遺物包含）
3層　純砂層（無遺物）

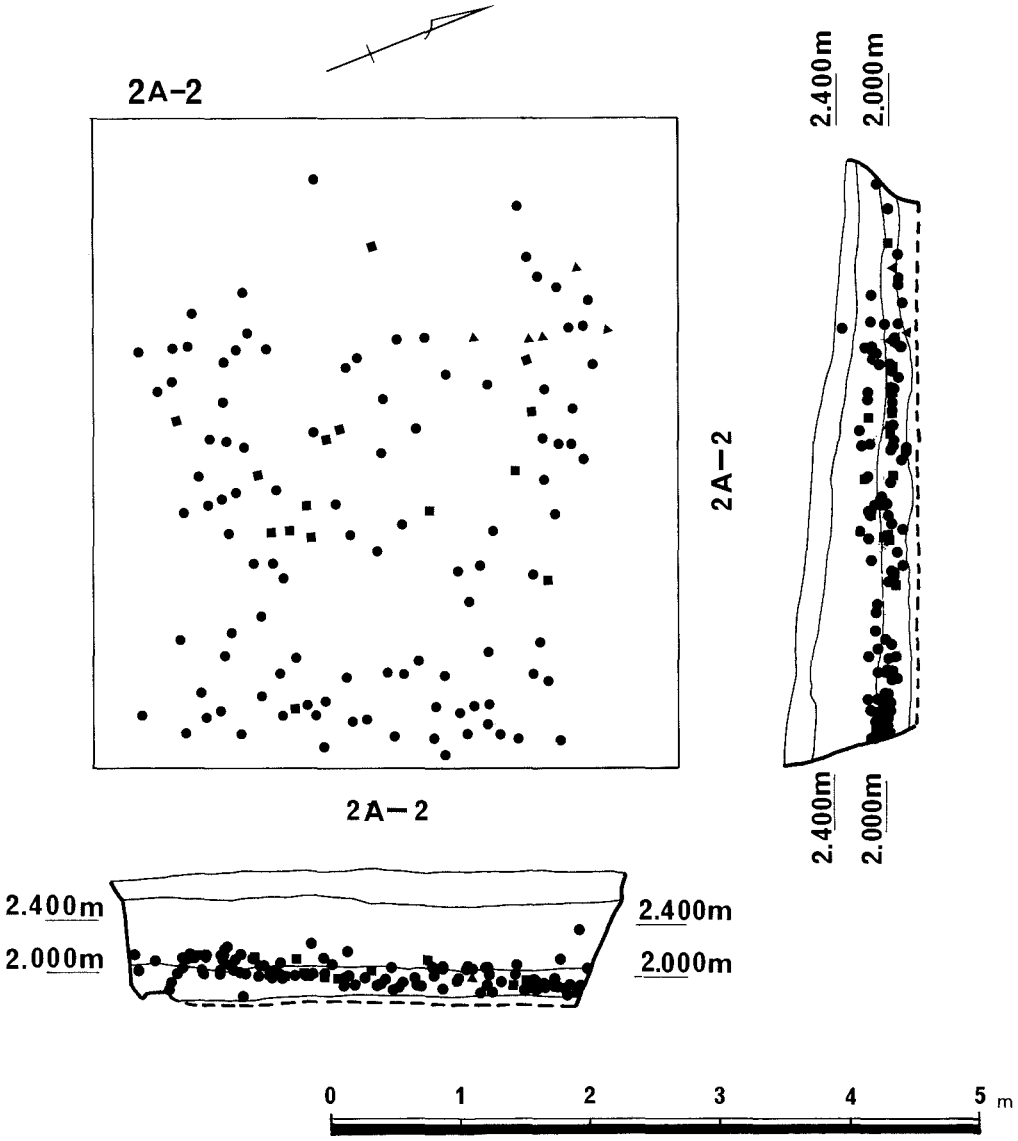
第6図　堂海2北壁土層実測図



第7図　2 A—I，2 A—2 土層実測図

新しい堆積層だが，遺物も混じる。３層は混貝砂層，拳大の礫を多く含み，下部になると縄文前期の土器とともに貝殻なども出土。３ｂ層は暗灰赤色砂層，鉄分質を含み遺物はここまで出土が認められる。４層は暗灰黒色砂層，きめ細かい純砂層でくずれ易く，遺物は含まれない。

層序は以上のとおりであるが，潮間帯においては陸地化していた部分が海水等の浸食を受け貝層がむき出しになった状態である。２Ａ－１・２の地点になると砂丘の裾部にあたっており砂が堆積しており遺物包含層は割合い残っている。さらにその西側の砂丘上でも遺物包含層は見られるが，貝層は一部分を除いて検出されない。なお遺構については全く確認できなかった。



第８図　２Ａ－２遺物出土ドットマップ図

Ⅳ 遺　　物

試掘調査と本調査では遺構の検出は見られなかったが，遺物はかなりの量に達している。時期的には縄文前期から中期を中心としており，弥生から古墳時代さらに中世に至る資料がわずかながら出土している。縄文時代の遺物は，土器・石器が主体であるが，貝塚の性格上，貝殻類，獣・魚骨類などの自然遺物が豊富に出土している。

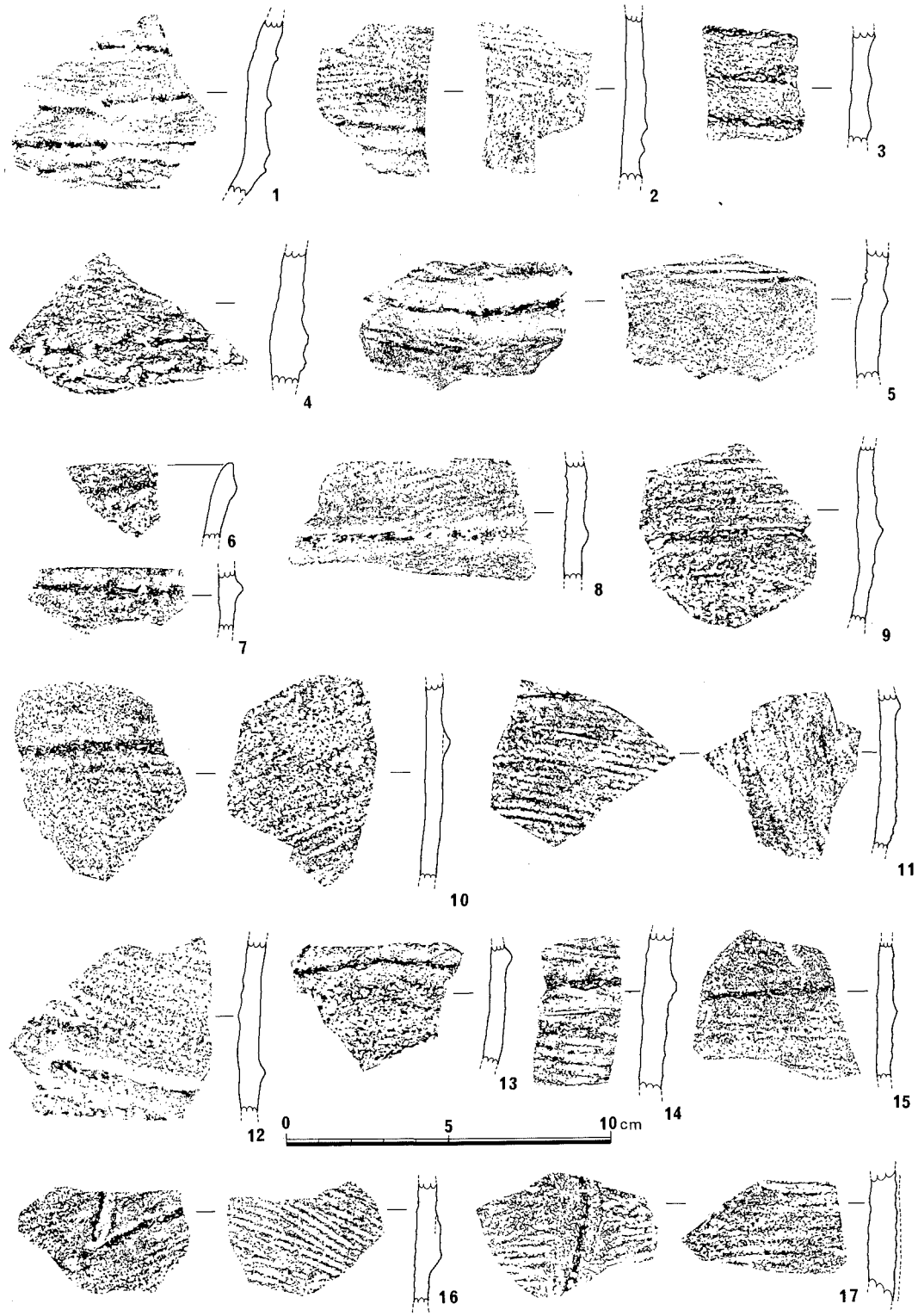
本報告書では遺物の取扱いは，外海部の貝塚を形成している地区と，南側砂丘のE—13・F—14を中心とする地区に分けた。

(1) 外海部出土の轟式土器　第9図～第14図

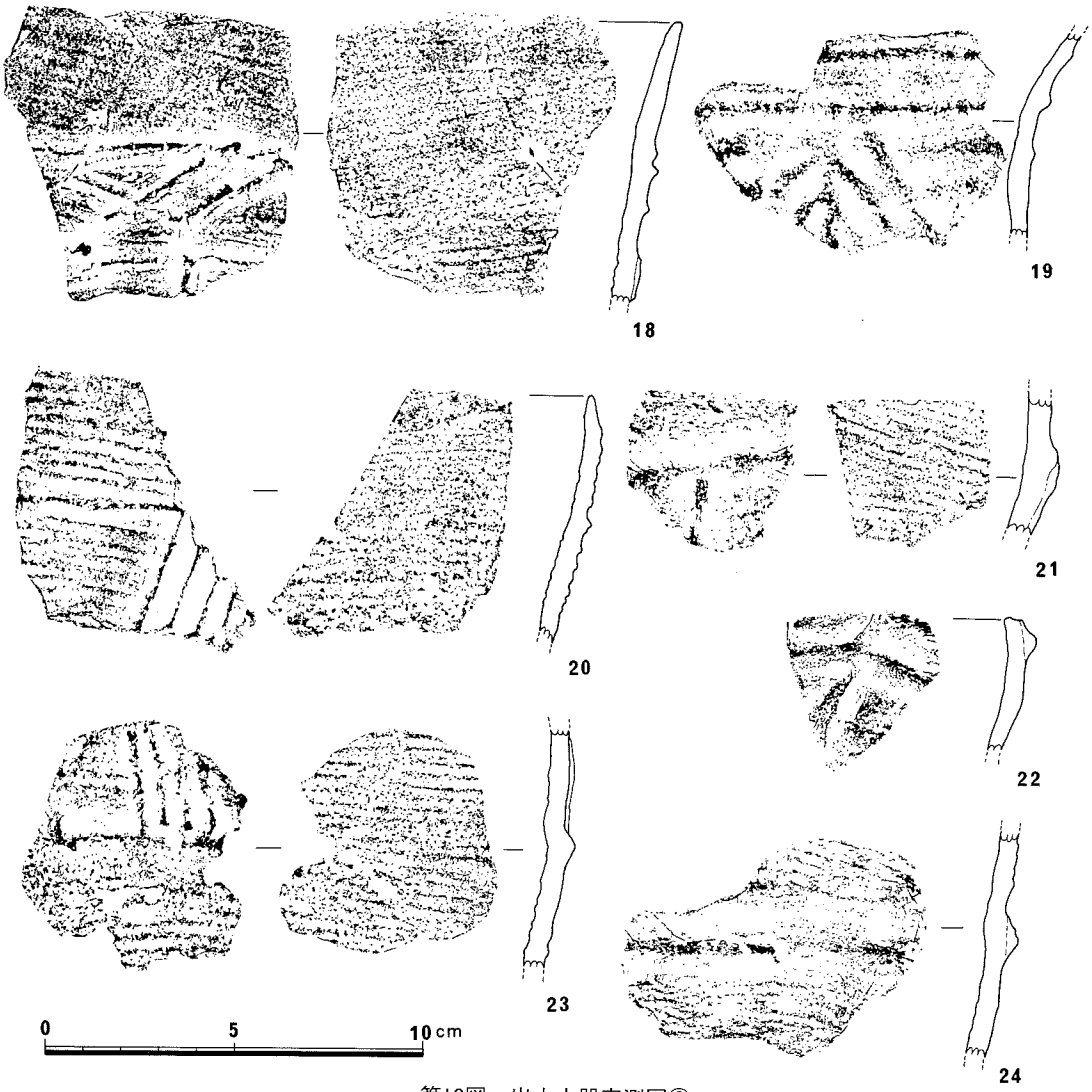
試掘調査時の外海部出土の土器は，試掘壙記号堂海—2・3・4・6・9から得られており，本調査では貝層の残っている範囲全体を対象とし，2堂A—1・2，B—3・4，C—3・4の貝層を中心とした層からの出土である。土器は轟式土器が主体をなし，曽畑式土器やその他の土器がわずかながら出土している。海中に没する遺跡という性格上，厳密な層位の把握はむずかしく，従って轟式土器と曽畑式土器を層序の中で新旧関係を捉えることには無理があり，ここでは一般的な分類に従って観察する。

第Ⅰ類土器　第9図1～17

隆帯文を横に貼り付けるのを基本としたものである。1は口縁を欠くが頸部が若干しまり，胴部がふくらみ数条の貼り付け隆帯を持つ。隆帯はやや乱れている。胎土には長石や白い砂粒を含み焼成は良好。2は口縁部の破片であるが口唇部を欠く。内外面とも条痕調整を施し，外面には細い隆帯が付されている。胎土には長石と白い砂粒が多く含まれ，焼成は良好。3はやや間隔をもった3本の隆帯をも3破片で胎土には石英粒や長石が含まれている。4は口縁が外反し，胴部がゆるく張るもので，この部分に貼り付け隆帯が2本残る。隆帯には指で押さえた調整痕が残る。内外とも条痕調整が施されている。胎土焼成ともに良好。5は内外面に条痕を施し，外面には貼り付け隆帯を付す。隆帯上部は外反する傾向にある。胎土には石英粒や片岩の荒い粒子が含まれよくしまり，焼成は良い。6・7は同一個体と思われる。6は口縁で端部は外に尖り気味に丸くおさめられ，直下に隆帯を巡る。胎土には石英や長石，片岩粒が含まれる。条痕は認められない。8～11は外面は丁寧な条痕調整を行い，その上に貼り付け隆帯を付しており，内面は外面程の条痕調整を行っていない。胴部以下の器形は丸くすぼまる底になるものと思われ，共通性を有している。胎土は長石・白い砂粒などを含み焼成も良好である。12は外面に貼り付け隆帯をもちやや外反した形になる。この破片は粗く砕いた滑石粉を多く含み他と胎土が異なる。条痕は施されているが，摩耗を受けている。14は条痕を施した上に隆帯を付している。胎土焼成は良好である。15はうすい器壁で内外に条痕を付している。隆帯は細く



第９図　出土土器実測図①



第10図　出土土器実測図②

摩耗している。胎土には石英・金雲母・片岩の微粒子を含み焼成は良好。16・17は内外面に条痕を有し外面には曲線的な貼り付け隆帯を配している。胎土には長石や石英・片岩粒を含む。

以上の土器は胴部にやや丸味をもち口縁が内湾あるいはゆるく外反するもので，16・17のように隆帯が波状帯になるのではないかというものも含まれる。

II類土器

直線による横と縦の貼り付け隆帯を組み合わせた一群の土器である。

18は器壁うすく，内外とも条痕で調整されているが，外面は細い隆帯貼り付け後ナデが行われている。隆帯は上下2本の間に斜行する2本の隆帯と，その下に垂下する隆帯が認められる。器形はわずかに外反する口縁で胴部は若干のふくらみを持ち底がすぼまると思われる。胎土は

長石や白い砂粒が混じり，精選され焼成も良好である。19は頸部から胴部にかけてのくびれた部分の破片である。屈曲した上には２本の隆帯が巡り，下方には稜杉状の隆帯と横位の隆帯の組み合わせから成っている。隆帯ははれぼったい感じの隆帯である。胎土には長石や白い砂粒の他に褐色の粒子が含まれるのが特徴である。表面はやや摩耗を受けている。20は外に開きながら内湾する口縁で端部は尖り気味に丸くおさめられている。貼り付け隆帯の横位と斜行の組み合わせで，条痕調整のあとに付されている。器壁はうすく仕上げられ，胎土にはやや粗い石英や長石粒を含むが，片岩粉末を混ぜているのでしまった胎土になっている。21・22は太目の隆帯をもつ口縁部で内湾している。21は片岩粉末を多く含みよくしまっているが22は含まない。内面には条痕調整が見られ焼成は良好である。23はややふくらんだ胴部で，内外に条痕調整を行い外面にはその上から横位と縦位の隆帯を貼り付けている。胎土には長石・雲母・片岩をわずかに含むが，褐色の粒子を含むのが特徴的である。24は直線的な胴部に太目の隆帯を貼り付けたもので，条痕調整のあとナデている。胎には滑石粉末を多く含み焼きしまっている。

以上の土器は細い隆帯文あるいは太形の隆帯を幾何学的に配した点から見ると，朝鮮半島における隆起文あるいは隆起帯文土器と称される一群に類似する要素をもつものである。

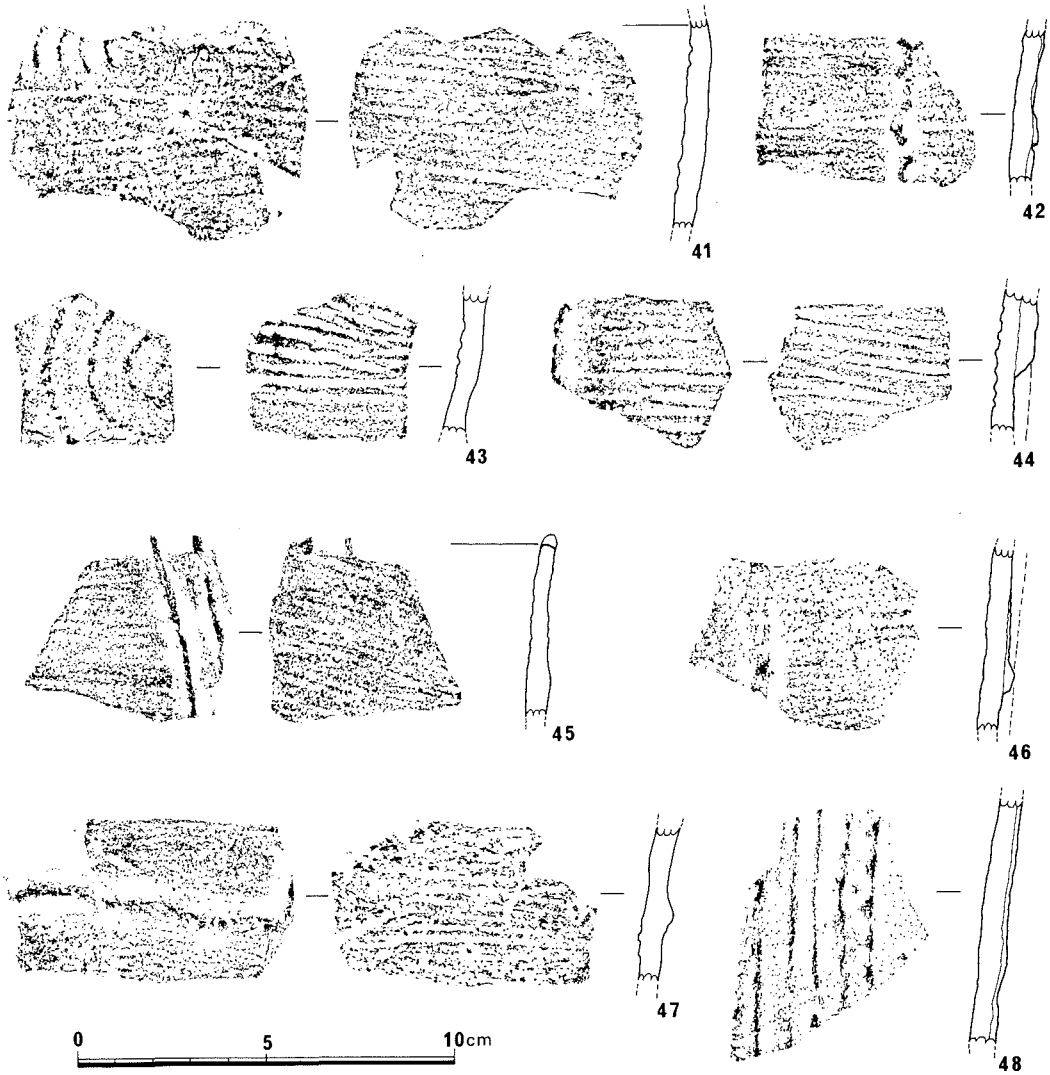
第Ⅲ類土器

頸部から胴部にかけて張り出し，貼り付け突帯部分に刻目を入れていることを特徴とする一群である。25は胴部で，貼り付け隆帯に弱い刻目を入れている。底部に近い部分で丸くすぼまる形である。内外とも条痕調整を行い胎土焼成は良好である。26は内面は丁寧な条痕調整を行い外面の条痕はナデ消している。胴屈曲部に隆帯をつまみ出し，刻目を施している。その下は細い沈線を斜行させている。胎土焼成は良好である。27も胴部でわずかな屈曲部に隆帯を貼りつけ刻目を施しているが摩耗でほとんど消えている。胎土には石英や長石を多く含みやや粗い。28は外反する口縁で頸部の屈曲部に断面三角形の貼り付け突帯を巡らし，刻目というより指先でつまみ，爪形が付いた感じの文様となっている。胎土には長石，わずかな片岩粒，褐色の粒子を含み焼成は良好。29～33はほぼ同様の土器であるが，31については浅い刻目となっている。34は小破片ながら小さい刻目が多く施され，その上には細い沈線が横位に付されている。胎土焼成は良好。35は器形は胴部がゆるく張り出し口縁は外反するが，胎土に石英を多く含み微量の片岩を含んでいる。36は内外を条痕調整し，外面は二重張り出しをもつ器形になる。胎土焼成は良好である。37は口縁に近いと思われる部分で内面は若干内側に段がつく形で湾曲する。内外とも条痕調整が施されているが，外面は条痕と境を接する部分に刺突が付されている。胎土には石英粒が目立つ。38～40は外面に２段の刺突文を有するところに共通性があるが，刺突の方法は若干異なっている。38は内面に丁寧な条痕を有するが，他にはない。胎土は粗い石英粒を多く含むことで一致している。

第Ⅳ類土器

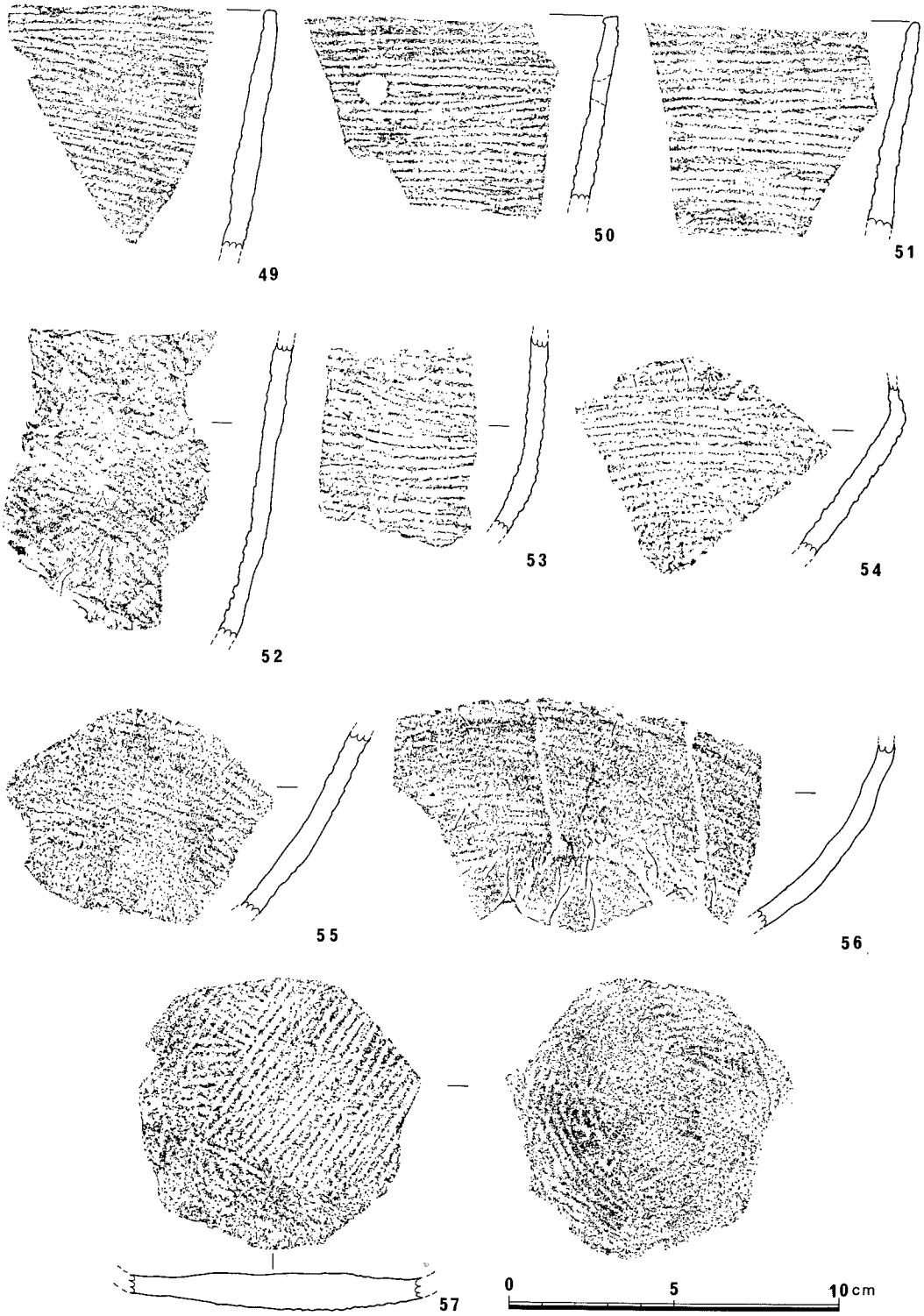
胴部に同心円状の隆帯を付す文様帯をもつものと，横位および縦位の隆帯の組合わせからな

第11図　出土土器実測図③



第12図　出土土器実測図④

る一群の土器で，前者と後者の文様帯の組合わせも十分考えられるものである。41は胴部でわずかに脹らんでいる外面に同心円状の隆帯を付しているが，貼り付けではなくつまみ出された感がある。文様の組合わせについては不明であるが，内外面とも条痕を付し，胎土には片岩や褐色の粒子を含んでいる。42は縦に隆帯をミミズバレ状につまみ出して文様としている。胎土にはやはり片岩と褐色の粒子が含まれている。55は同心円状の文様帯だけの破片で41の文様より大きい。内面は条痕が丁寧に付されている。胎土焼成とも良好。44は内外を丁寧な条痕調整のあと，縦の隆帯貼り付けが見られる。45はほぼ直行する口縁の口唇部から下に斜行する貼り付け隆帯を付している。内外とも条痕調整は行っており器壁はうすい。胎土には片岩を多く含んでいる。46は縦位の貼り付け隆帯をもつ破片，47は貼り付け隆帯の縦と横の組合わせで，変



第13図　出土土器実測図⑤

岩を割合に多く含んでいる。48は縦に数条の貼り付け隆帯が施されている。口縁部に近いと思われるがほぼ直線的である。胎土には片岩と褐色の粒子を多く含んでいる。

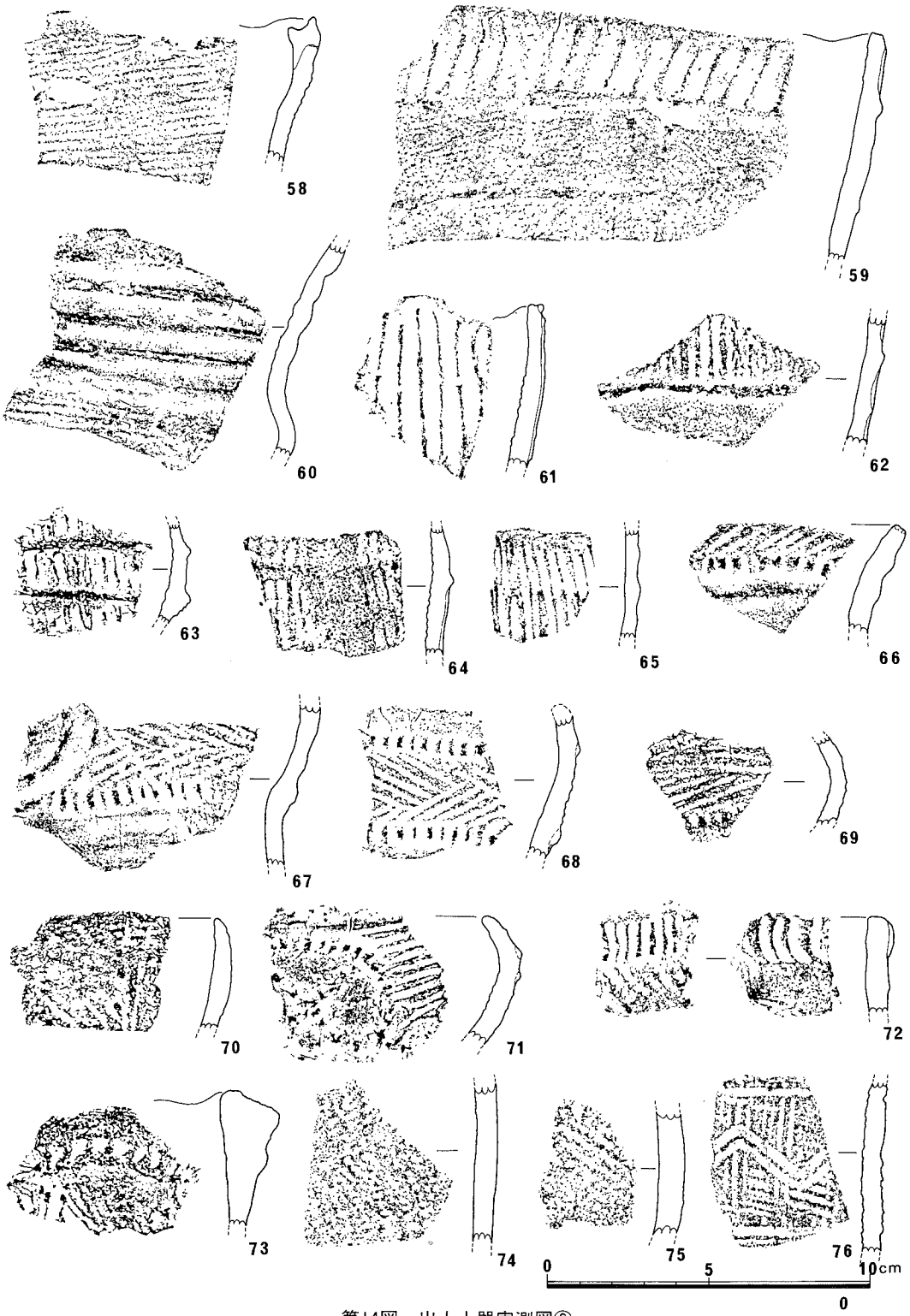
第Ⅴ類土器

実際に個体数から見るとこのⅤ類とした条痕文を主体とした土器群が一番多い。器形はほとんど胴すぼまり形になるようである。49～51は同じ条痕調整の口縁であるが，胎土や器形に変化がある。49は器壁がやや厚くて石英粒を含むが，50は胎土が精選され口唇部はやや内行している。片面穿孔の補修孔を１個有する。51は胎土に片岩を含み焼成もしっかりしている。外面は条痕調整しているが，わずかな隆起が意識的に設けられている。52は胎土に滑石を多く含み灰暗褐色を呈している。片岩を含んだ胎土とは明瞭に区別される。53は底部に近い部分で54は張り胴の部分で大きく屈曲している。胎土には片岩を多く含んでいる。55・56も張胴から下の底に近い部分で条痕は摩耗している。57は平底の部分である。わずかに丸味をおび円盤状に残されている。条痕は外面より内面の方が摩耗を受けている。底部の土器は片岩の粒子が含まれ焼成も良好である。

第Ⅵ類土器

Ⅰ～Ⅴ類までの土器と違って出土数が少なく形式が不明確な土器の一群である。

58は口縁端部に突起を貼り付け，突起部は凹せている。口縁部はやや外反し，胴部から下は内行する器形と思われる。内外とも条痕調整を受け，胎土には滑石・雲母粒を含み焼成は良好である。59はゆるやかな波状を呈する口縁部である。口縁直下には貼り付け隆帯を巡したあとその間には斜行する短い隆帯を狭い間隔で入れている。さらに胴部には横位の貼り付け隆帯と，縦位の隆帯２本を１組で入れているが，縦には３～４個の単位で入れていると思われる。内外とも条痕調整が施されているが，摩耗が進んでいる。胎土には滑石が目立ち褐色の粒子も含まれている。この土器はⅠ類およびⅡ類に共通したものを持っておりその範疇で捉えられてもよいと考えられる。60は頸部がしまる張胴形を呈する。頸部には５段の隆起が認められるが，貼り付けではなく，ヘラ状の工具で削り出されたようになっている。内面と外面胴部には条痕が見られる。胎土には褐色の粒子を含み色調は褐色で焼成やや甘い。61は波状を呈する口縁の一部であるがその頂点は凹んでいる。縦に密度の濃いはっきりした貼り付け隆帯が付けられ，内湾している。内面には条痕調整が見られ，胎土には滑石を含んでいる。62～64は隆帯文の間に沈線が間断なく入れられた土器である。63は隆帯を付した後に短沈線が付されている。器形は湾曲しており口縁に近い部分か。内面には条痕調整が見られる，胎土には長石・雲母粒子が含まれる。64の胎土には滑石が含まれている。65は沈線を短く繋ぎ，その部分がわずかに隆起している。66～69は横位稜杉状沈線と刻目の組合わせという点で共通した一群でおそらく同一個体かも知れない。稜杉状の沈線は５本を単位として交互に施されているため羽状的な対称文様となっていない。また刻目は隆帯の上から切断するように刻まれ，68のように２本の刻目を有している。また67のように曲線の貼り付け隆帯も見られるところから，この種の土器は口縁が



第14図　出土土器実測図⑥

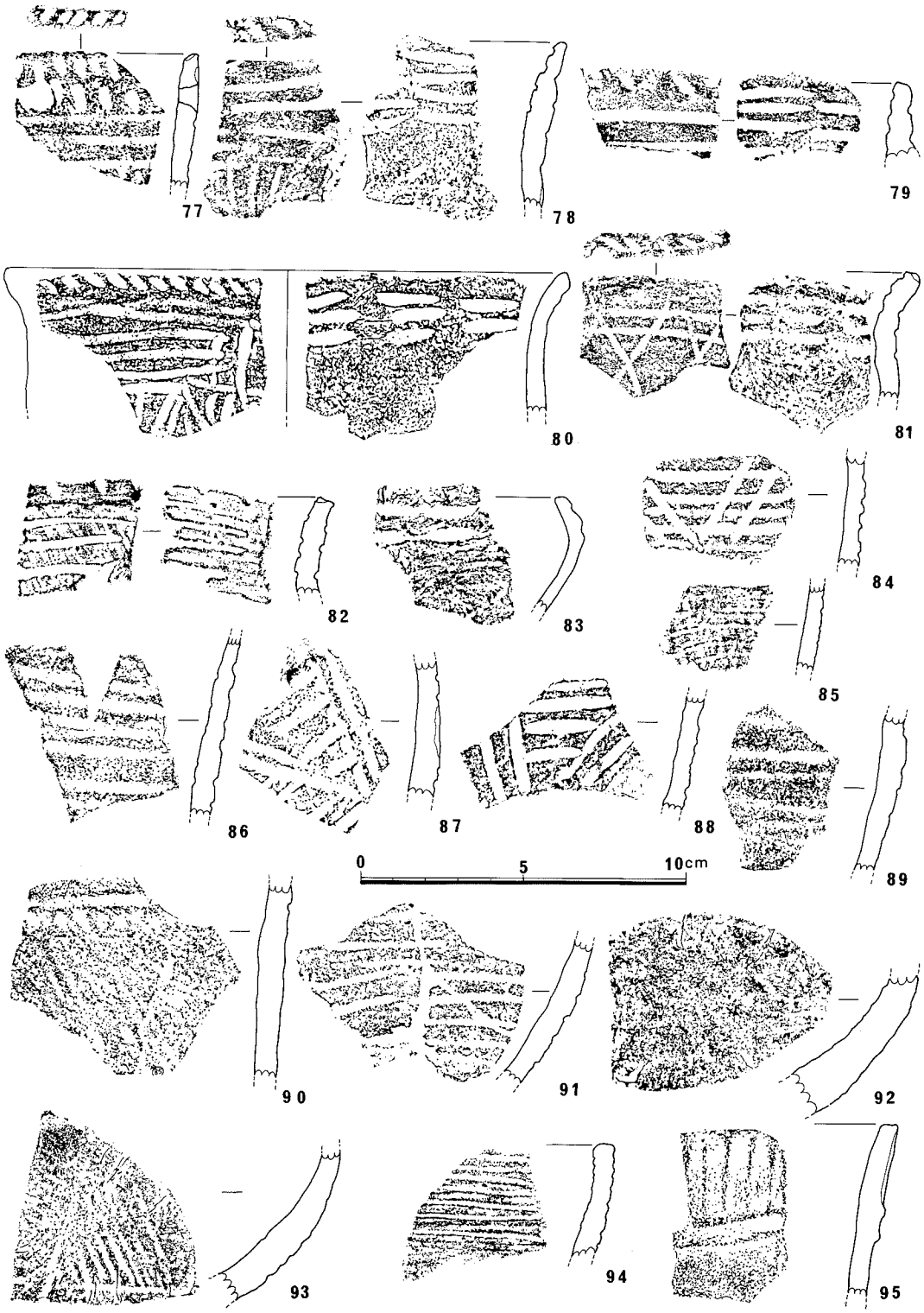
キャリパー状に湾曲しながら開いていると考えられ，頸部のくびれた部分は弱い隆起が見られる。胎土には雲母・褐色および白い砂粒を含み，焼成も良好でしっかりしている。70はわずかに湾曲しながら外に開く口縁で，外面には下から上に向かって細い沈線が放射状に刻まれている。71はやや屈曲した口縁で，外面には貼り付け隆帯を楕円状に付し，さらにその中をクロスさせ，刻目を施している。刻目の手法は66などと一緒である。この文様の外側はさらに浅い沈線が多く付けられ一見条痕様に見える。内面は条痕調整，胎土は石英粒などを含む。72は外面には幅広の隆帯に爪形を付け内面には口唇部に直接爪形を付している。小破片で詳細な観察は出来ないが，南九州の春日町式に類似する要素をもつ。73～75は縄文を有する土器である。73は山形状の口縁の内外に縄文を付している。外面は口縁直下に隆帯を付し，その上面に刺突文を配している。さらにその下には縄文と沈線が組合わされている。胎土には粗い石英粒などを含んでいる。74・75は直線的な面に縄文を付しているが，74は羽状に付している。これらの土器は船元式土器に類似の土器と思われる。76はやや外反する胴部である。内面には丁寧な条痕調整が行われ，外面には浅い沈線が上下に横に引かれ，その中に2本の沈線が山形に付されている。これらの沈線はやや幅広のものであるが，さらにこの中を縦横に狭い沈線が入れられている。胎土には滑石が入りよくしまっている。轟D式の要素をもつものであろう。

(2) 外海部出土の曽畑式土器

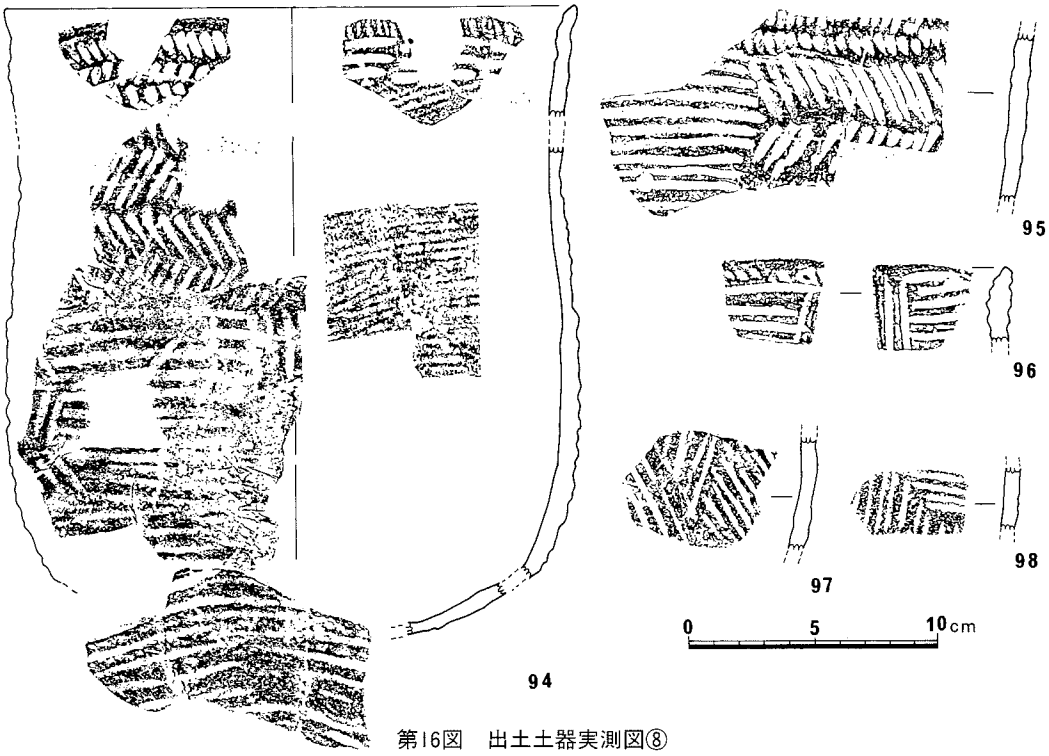
ここにあげた曽畑式土器は，外海部の貝層を伴う部分から出土したものである。

77は直線的な口縁の口唇部内側と外面に2段の刺突を施し2本の横沈線を巡らしている。その下には縦の沈線がわずかに見える。外面から穿孔の補修孔が残る。胎土には滑石を含む。78・79は同一個体と思われる口縁はわずかに外反し胴部はふくらむものである。口唇には刻目を付け，波状の短沈線を4段に，外面にも同じ文様を付け下段には縦に沈線を入れ表面は磨かれている。胎土には石英粒を含み滑石は含まない。80・81は文様・器形とも同形態であるが，81の方が断面が厚い。器形は口縁が外反し，頸部がしまり胴部がふくらむ形態のもので外に斜行する口唇部に刻目を入れ，内面には短沈線を間隔を置き3段に入れている。外面の沈線は浅く乱れているが，横位沈線を入れたあと縦の沈線を入れている。胎土には滑石を多く含みしっかりしている。82はわずかに外反する口縁で，口唇に間隔のある刻目を入れている。内面は条痕調整のあと細い沈線を入れ，外面は縦に条痕を入れたあと横の沈線を描いている。小破片で胎土には滑石を含まない。轟D式の系統か。83は口縁が内湾した浅鉢状になるもので口縁の外面に短沈線を2段に配列している。白い砂粒や雲母を含み滑石は含まない。84～90は胴部である。87・88は幾何学文で構成される文様である。86・89・90などは滑石は含まないが焼成はしっかりしている。92・93は底部である。胎土には滑石は含まないが焼成は良好。93はくもの巣状に沈線が付されているのがよくわかるが，92は無文で胎土に石英粒を多く含む。

94は内湾した口縁で内面は条痕調整を行い，外面は極細の沈線を付している。95も口縁で，



第15図　出土土器実測図⑦



第16図　出土土器実測図⑧

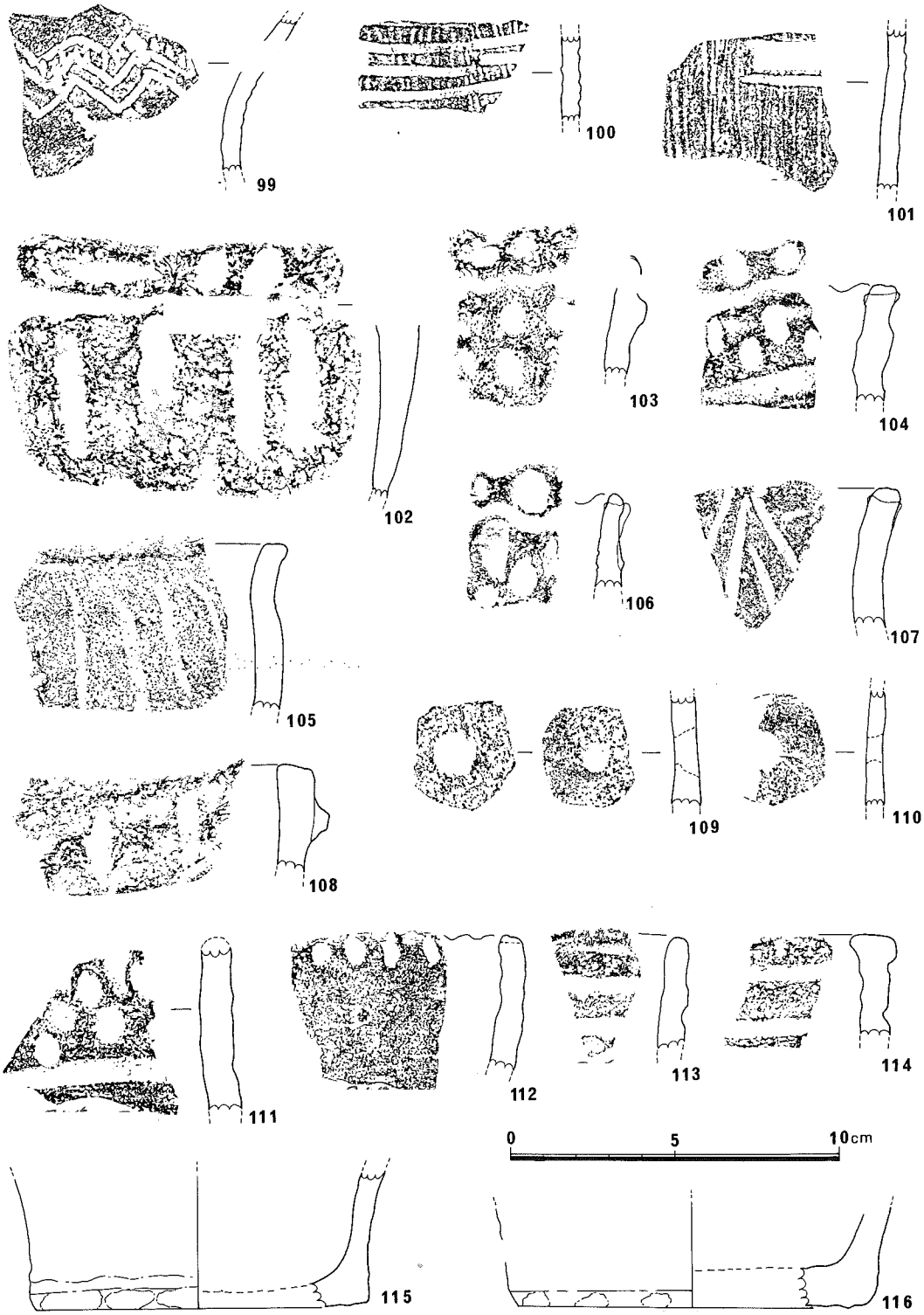
縦の隆帯と横の隆帯から成る。胎土には白い砂粒を多く含み色調は黄褐色を呈する。轟式の系統に属すると思われる。

外海部出土の曽畑式土器は，口縁部はくびれて外反しており，また文様も整然としたものは見られず，くずれた格好の文様が目立ち，曽畑式土器の中でも新しい方に属するものである。

(3)　試掘調査Ⅰ—13—Ⅲ層出土の曽畑式土器　第16図96～98

試掘調査では南側の砂丘に試掘壙を設定したが，その中のⅠ—13グリッドⅢ層より曽畑式土器がまとまって出土した。Ⅱ層からは阿高式土器も出土しており砂丘の形成が土器の新旧関係から観察された地点である。

96・97は同一個体である。胎土には多くの滑石粉末を混入し，茶褐色を呈し，表面は非常になめからである。口縁部はゆるく外反し，頸部がわずかにすぼまる。内面には全体に条痕調整が施され，口唇部に押し引き列点文とその下に横方向に短沈線文が施されている。外面には棒状工具による短斜沈線文が，弱いふくらみをもつ胴部には横位や縦位の短沈線文が羽状に施されている。底部は横位の沈線文だけになり，平底気味の平坦部まで全体におよんでいる。この土器には胴上部と底部に近い方にそれぞれ1個の孔が両面より穿たれている。図上による復原口径は約22.5cm，高さ約25cmである。98は口縁部で，内外面に横位と縦位の沈線の組合わせが



第17図　出土土器実測図⑨

見られ，外には刺突文が巡る。胎土には滑石を含まないが，焼成良好。99・100は胴部で，綾杉状の細い沈線が施文されている。胎土にはいずれも滑石を含み焼成は良好。103は棒状工具で沈線を山形に3段にいれている。さらにその上段には刺突を施している。文様帯は頸部がくびれる部分に集中している。器は外反する口縁になると思われる。胎土は緻密で雲母がわずかに認められる。102・103は同一個体と思われる。最初に縦に条痕状の文様を縦に入れ，そのあと横に浅い沈線を波状に入れている。胎土には長石や白い砂粒などを精選しており焼成も良好である。以上の3点は轟D式土器の特徴をもつものである。

(4) 南側砂丘出土の阿高式系土器 第17図102～116

南側砂丘上に設定した試掘壙および本調査時に設定したE－0区出土の阿高式系統の土器群である。ほとんどの土器が滑石粉末を混入し，胎土焼成もしっかりしている。特にE－0では潮間帯に出土地が位置するので固く焼き締めたようになっている。文様構成は104に代表される太型沈線文と109や107に見られる細型の沈線文，さらに105・106などの太型凹文と沈線文の組合わせなどがある。また114は口縁が波状になるよう凹文が入れられ，さらに外面に太型の刺突文が配せられているものもある。底部も117・118の外にも数点出土しているが，いずれも厚手の平底で胎土には滑石粉末を多量に混入している。底部には阿高式土器の特徴である鯨の脊椎骨の痕が残るものも見られる。中期の土器を利用してメンコ状のものに穿孔を施した土製品と思われるものが108・109の2点出土している。108は片面から穿孔し，周囲の面取り加工はしていない。109は両面穿孔であるが，円状になるように割っているものの，面取りはしていない。未製品というべきものであろうか。

(5) その他の土器 第18図 119～129

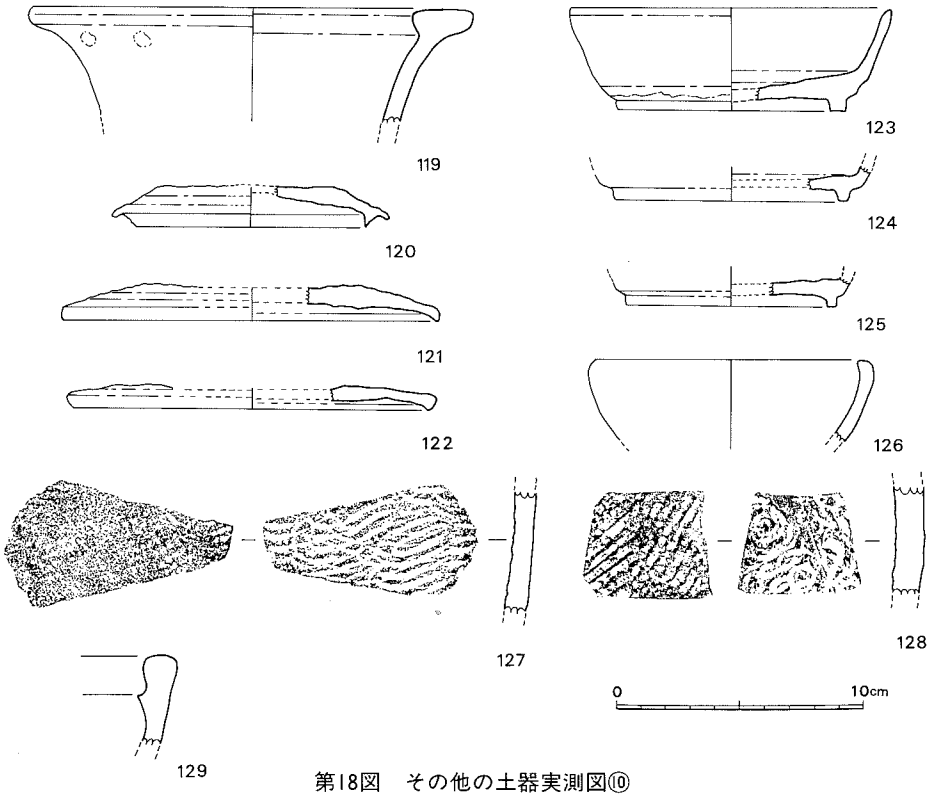
その他の土器としたのは試掘調査時に出土したもので，弥生・古墳・中世に至る土器群である。ここに図示した以外に須恵器と土師器の小破片が内海部と南側砂丘から若干出土している。

1は壷形土器口縁部で弱い鋤先状を呈する。口縁平坦部および内面は横ナデされ胎土焼成も良好である。弥生中期後葉に比定されよう。M－7試掘壙出土であるが，この他にも胴部などの小破片の弥生土器が出土している。120～128は須恵器である。いずれも小破片が多い。120～122は坏蓋，123～125は高台付碗である。126は小形の鉢である。127・128は格子目および木目による叩き文様を有する甕形土器胴部である。時期的には8世紀頃の所産である。129は中国輸入陶磁器の捏鉢である。この他にも青磁片が少量採集されている。

堂崎遺跡では予想を上回る遺物の出土が見られたが，中でも土器の出土は時期を決定づける上で有効な手段となった。外海部で得られた土器は轟B式土器を古段階に曽畑式土器の新段階の時期的差が認められる。轟B式土器は客観的にⅠ～Ⅴ類に分類したが，文様帯の基本は貼り

付け隆帯と，貝殻条痕による調整が主体である。小破片が多く原形に復しえず統一性を欠く面もあるが，各地域出土の土器と比較すると，五島地域では類例が少ないことに気づく。Ⅰ類として取扱った土器は横位の隆帯を中心としたものであるが，轟貝塚出土の京大資料の分類ではⅠおよびⅢ類に該当すると考えられる。またⅡ類とした隆起文の組合わせの土器は京大資料分類のⅡ類とされた「胴部下半にまで縦方向の多条の隆帯を垂して，縦長の複合鋸歯状のモチーフをつくるもの」にあたるものである。そして特徴的な土器はⅢ類土器の刺突文と隆帯の組合わせによる胴部が張る土器で，Ⅳ類とされているものである。今のところこの類の土器は県下では佐世保市岩下洞穴や下本山岩陰遺跡があげられる。Ⅳ類とした同心円状の隆帯は轟貝塚，荘，阿多貝塚等で出土しているが，本県では飯盛町築崎遺跡から出土している。Ⅴ類土器は条痕を主体とし，胴部が屈曲しながら丸底につながるものであるが，多良見町伊木力遺跡に類似を求めることが出来る。その他の土器では66～68の隆帯と櫛目状の文様を有する土器に，朝鮮半島の短斜線文を綾杉状に施した土器との類似を見るが，器形的に相違がある。ともあれ，この土器は類例の少ない一群である。

曽畑式土器は海外部から出土した器形は頸のくびれたものが見られ，文様構成は乱れたものが多い。砂丘上からの土器は海外部と比較すると文様構成上若干の整然性は見られ，一時期旧い傾向を示す。市内下大津町に位置する江湖貝塚も曽畑単純の遺跡であるが，こちらの方が時期的には古段階に位置づけられる。



第18図　その他の土器実測図⑩

石器（第19図～第31図）（表１）

平成２年度の発掘調査概報において，石斧・敲石・磨製石斧・石鏃・石匙・剝片石器・石錘等（第19図）が出土している。報告において遺物の出土傾向をみると石斧（８点）と石錘（３点）が調査区のなかでは大きく占めている。今回の調査においても同様の傾向を示しているが，これに礫器がセットとして加わっている。

以下遺物の形状及び調整剝離の状況を付け加えたい。

剝片①類（第20図）

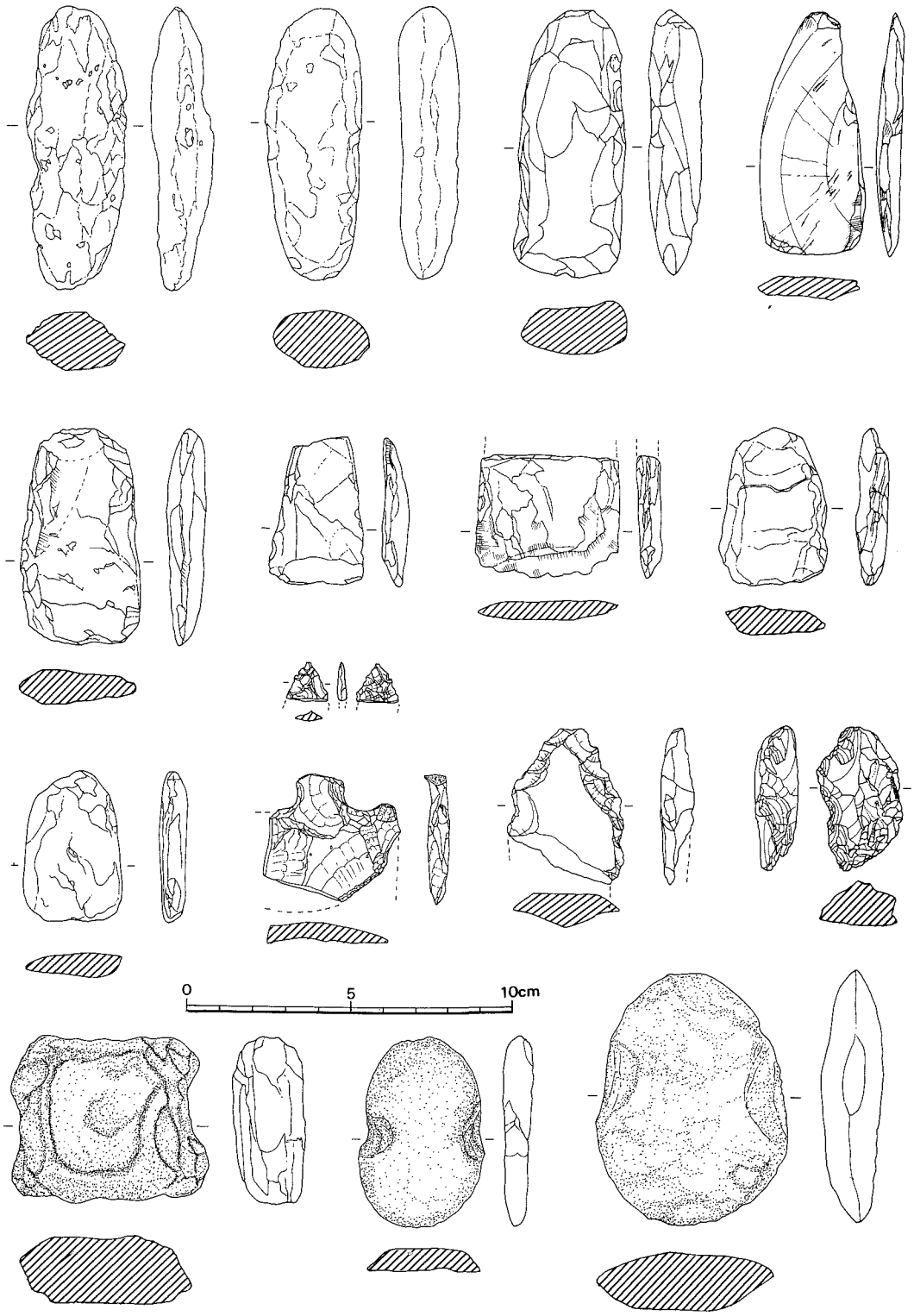
１～11は，縦長剝片の素材を利用した石器で，作出方法に正面の剝離を数回繰り返し主要剝離面を基本的には残す形態が認められる。石材の種別では黒曜石をいずれも用いている。１は，正面左下端部に一次剝離を施し，上部左を剝離した後に右側辺を上部より加撃する。さらに上部より加撃が加えられている。裏面は主要剝離を残した状態である。黒曜石の色調は黒色を呈する。２は，上部と左側縁部は自然面を正面右側より剝離した後，上部より縦長の剝離を施している。裏面は，主要剝離面を残す。暗灰黒色を呈する黒曜石。３は，頂部を剝離後，正面右側を剝離し左側を上部より剝離している。左側縁部には微細なリタッチが認められる。右側縁部は，自然面のままである。４は，灰黒色の黒曜石を用いた剝片である。５も灰黒色を呈した黒曜石剝片で頂部を調整後，正面を三片剝離する。６は，縦長剝片の下端部に細かな調整を施し，やや抉れた刃部を形成する。正面右側縁に自然面を残す。７は，淡灰色の黒曜石で両側縁に二次調整を施すが，上下端部は自然の状態である。８は，２と同様の石質をなし，左側縁部に微細なリタッチを施し刃部をなす。９は，出土遺物中もっとも長い黒曜石剝片で，上下端部及び正面の右側縁は自然面を残す。剝離は上部より正裏面ともに行っている。10は，裏面両側縁に調整剝離を施す。正面は，自然面除去のための調整を側縁からと上部より行っているが，½程は自然面を残している。11も10と同様のサイドスクレイパーであるが，裏面には，自然面除去作業は行っていない。

剝片②類（第21図）

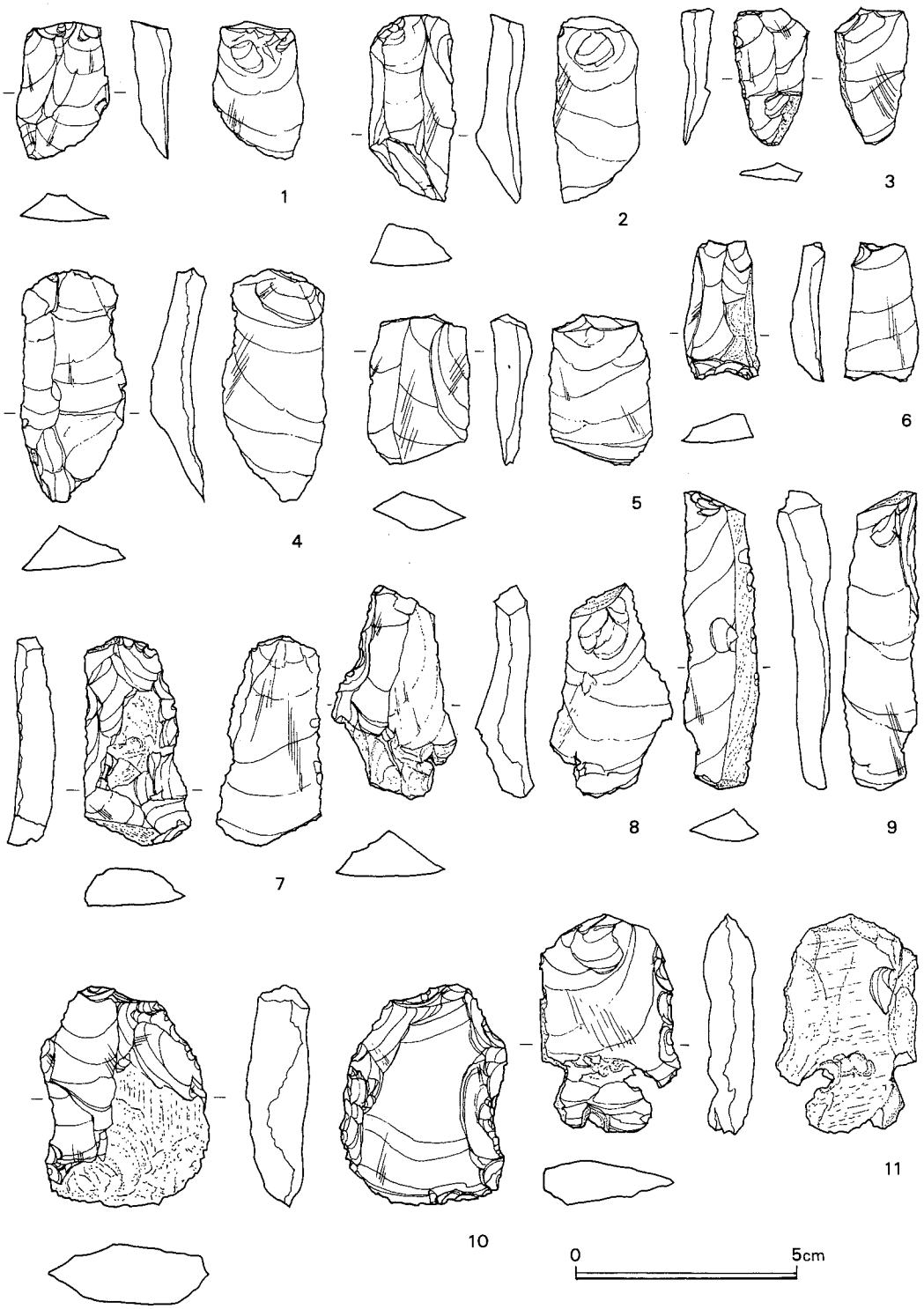
これには，横長剝片を素材に石器を形成するものや剝片等をあてる。石材では，黒曜石が少なくサヌカイトの石材が多くなる。

12は，正面を剝離した後さらに上部より２箇所剝離を行う。上部は打面調整等の痕跡はなく自然面のままである。裏面は主要剝離を残す。13は，表面に露出していたため海水によるローリングを受け剝離面がまるみを持つ。裏面左側縁と上部に調整が認められる。14は，黒曜石を素材とし上部を剝離後にさらに剝離作業を行っている。右側縁部に細かなリタッチを施し刃部をなす。下端部は自然面を残している。15は，サヌカイトの石材を使用し，下端部に細かい刃こぼれを生じている。16も，サヌカイトを原料として下部に刃部を作出している。17は，16と同様に下部に刃部を有する。18は，正面と裏面に二次調整一個所を施す剝片である。

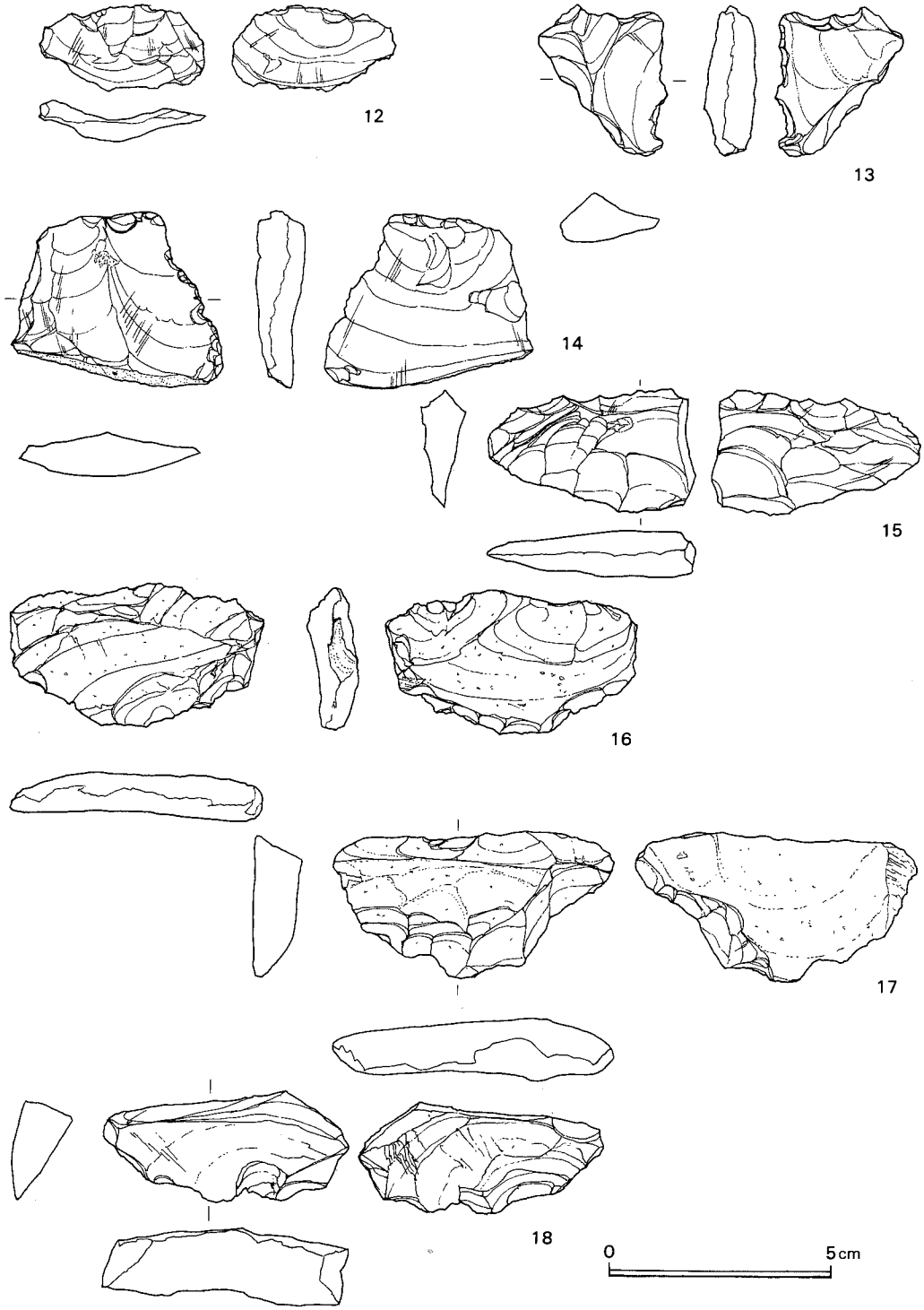
銛状石器類（第22図）



第19図　山土石器実測図①（平成２年度報告）



第20図　出土石器②（剝片①類）



第21図　出土石器③（剝片②類）

19～22は，断面三角形状を呈し，先端を鋭角に作出し，基部を有する。19は，ハリ質安山岩系の石材を使用し，横長剝片の左側縁に調整剝離を施している。基部は大きく剝離を行っている。裏面は，主要剝離面を残す。20は，正面左側縁部に調整剝離を施す。基部は両側縁より加撃し作出している。石材は，サヌカイトを使用している。21は，裏面基部端に調整剝離を行い中央部は両側縁よりの剝離でくびれ部を生じている。22は，母岩より剝離した剝片に二次調整し，比較的幅広い剝離整形によって突起部を形成する。基部は，バルブを除去し基部調整を行っている。正面は自然面残す。

掻器・削器類（第22～24図）

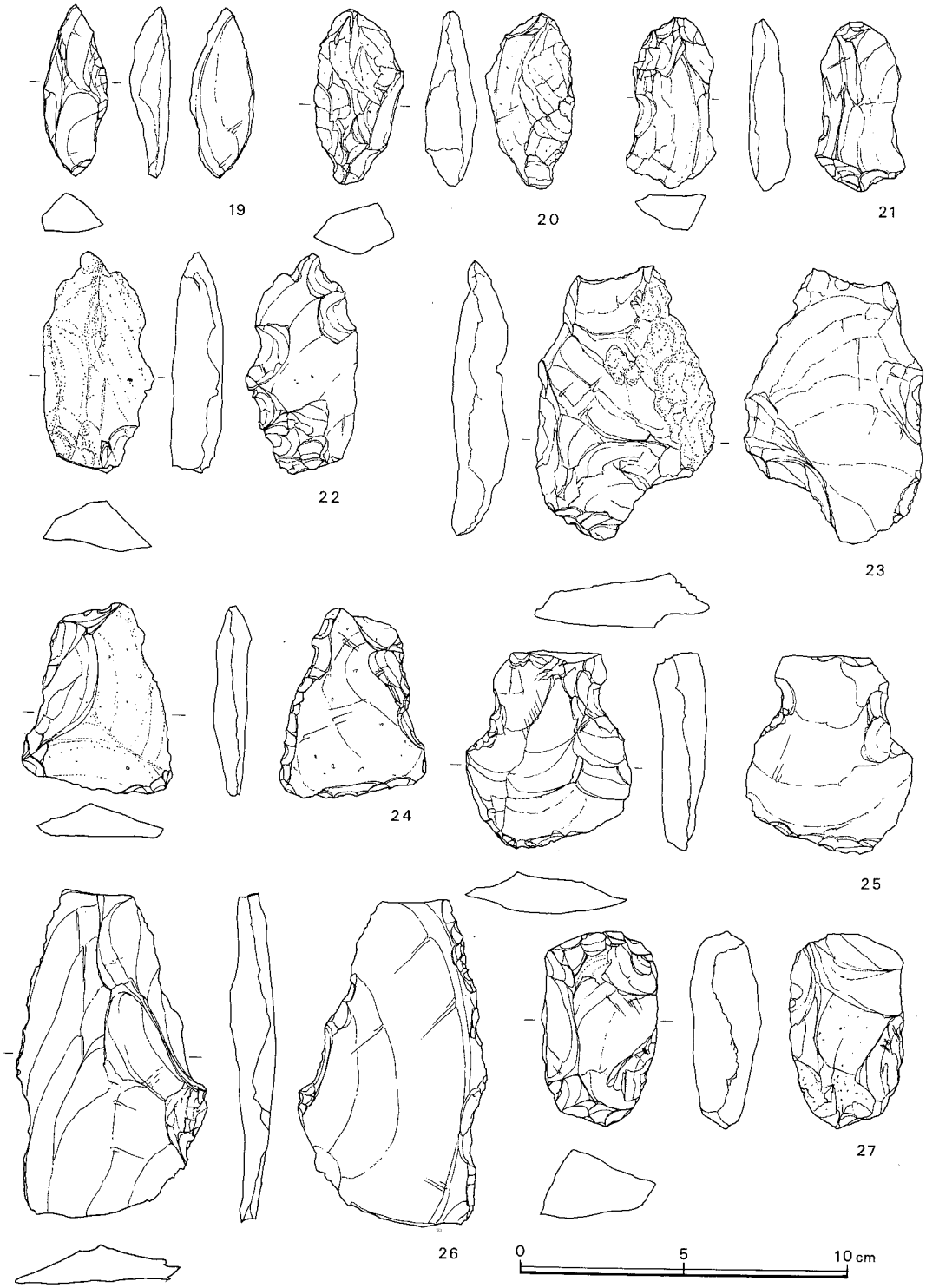
23～29・31～36で，23は，比較的偏平なサヌカイトの剝片で正面の自然面を除去調整後に剝離を行う。24は，台形状の剝片を剝取し，裏面左側縁からと下部から二次調整を施し直線的な刃部を作出する。25，中位部から上部に両側縁からの剝離によって抉りをつけ上部に幅広いつまみ部がつく。刃部は，まるみをもった石匙である。26は，偏平な横長剝片を利用し，裏面右側から細かな調整剝離を施している。27は，表面採集品で，剝離面がローリングしている。上部と下部に剝離調整を施している。28は，Ⅰａ形態の石鋸[註1]である。長さ約2.2cmの縦長剝片に鋸の歯状の刃部を4箇所作出している。刃部の調整は下部より行っており角張った状態を呈している。正面上部には，細かな調整剝離が認められる。29は，刃部を半円形状に作出した掻器である。裏面は，主要剝離面を残す。31は，上部を欠失しているため，形状不明であるが，粗い剝離を正面と裏面に施す。断面に厚みを持つ。32は，正面の右側縁部に刃部を形成し自然面除去の剝離を繰り返している。裏面には，調整剝離等はみられず，上部より一撃により母岩から剝離されている。33は，サヌカイト製で，周縁より粗い剝離を表裏面に行っている。断面は最厚で2.3cmを測る。石銛の形態を有する。34も33と同様に粗い階段状剝離を施し，厚みの断面を有する。上部は欠損している。35は，比較的偏平なサヌカイトを素材に交互剝離を行っている。石斧の可能性も考えられるが，上下端部を欠くためスクレイパー類に入れている。36は，上部を欠く資料で正面右側からと裏面左側縁からの二次調整を施し刃部を形成している。

石核類（第23図）

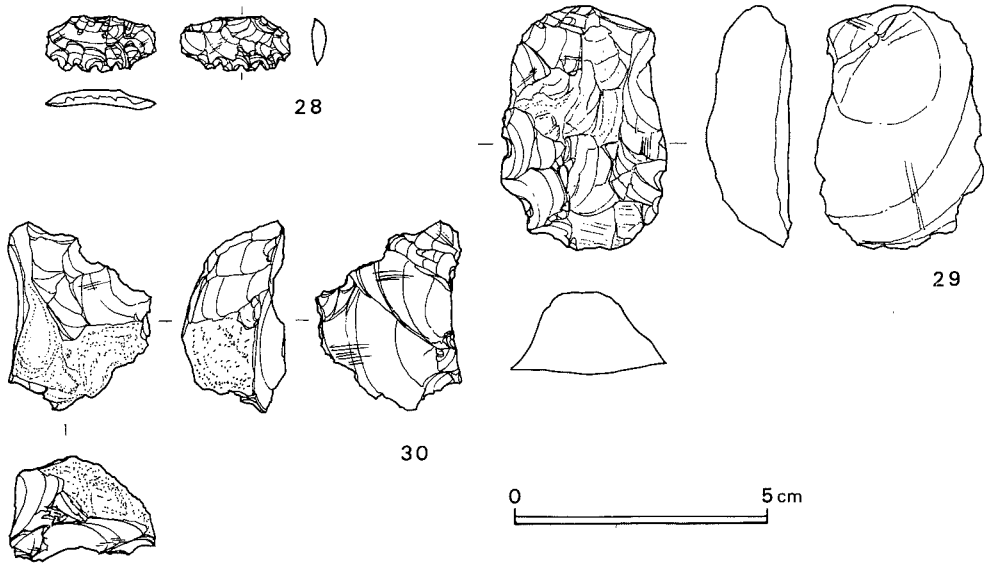
30の黒曜石の石核で，幅が1cm前後の剝片を3箇所より剝離している。

石斧類（第25図）

37～45をあげている。比較的偏平な断面を呈し，45がもっとも断面に厚みをもつ。37は小型の石斧で刃面及び基部左側縁に磨研の痕が残る。基部右側縁と刃部裏面は欠失している。38は，打製石斧で安山岩質の石材を使用，正裏面ともに周縁より調整剝離を施す。裏面の基面は平坦をなしている。刃部は偏刃となっている。39は，風化のため剝離整形が明瞭でない。刃部は，まるみをもつ。40は，正面の刃面は，まるみをなすが裏面は刃面が平面な状態にしあげている。41は，基部両側縁と裏面の凸面に磨研の状況が観察される。刃部と基部上端を欠失する。42は整形剝離の後石斧全面を磨研し，その調整剝離によって生じた凹み部分は現状のままとなって



第22図　出土石器④（鋸状石器・掻器・削器類）

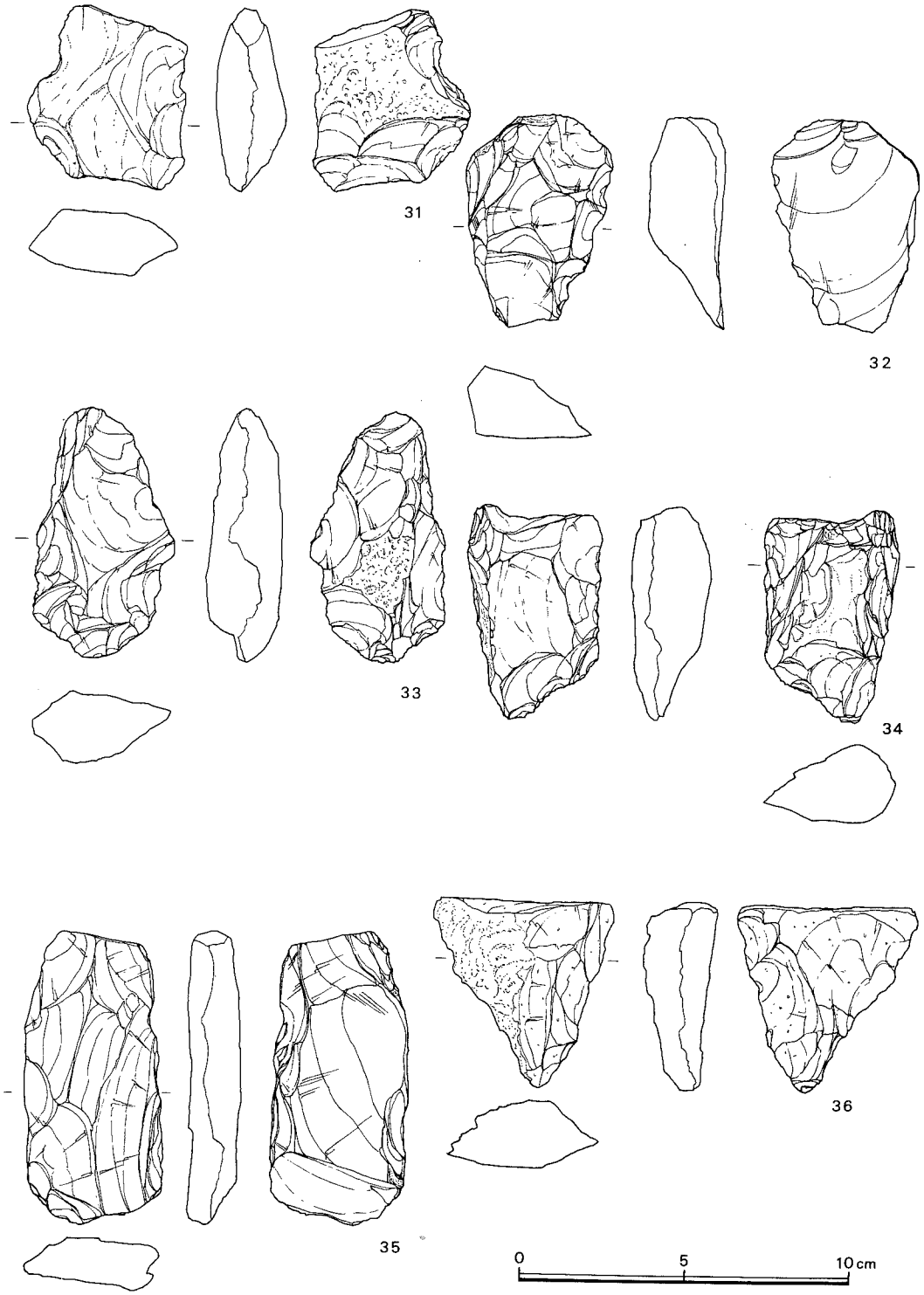


第23図　出土石器⑤（石鋸・掻器・石核類）

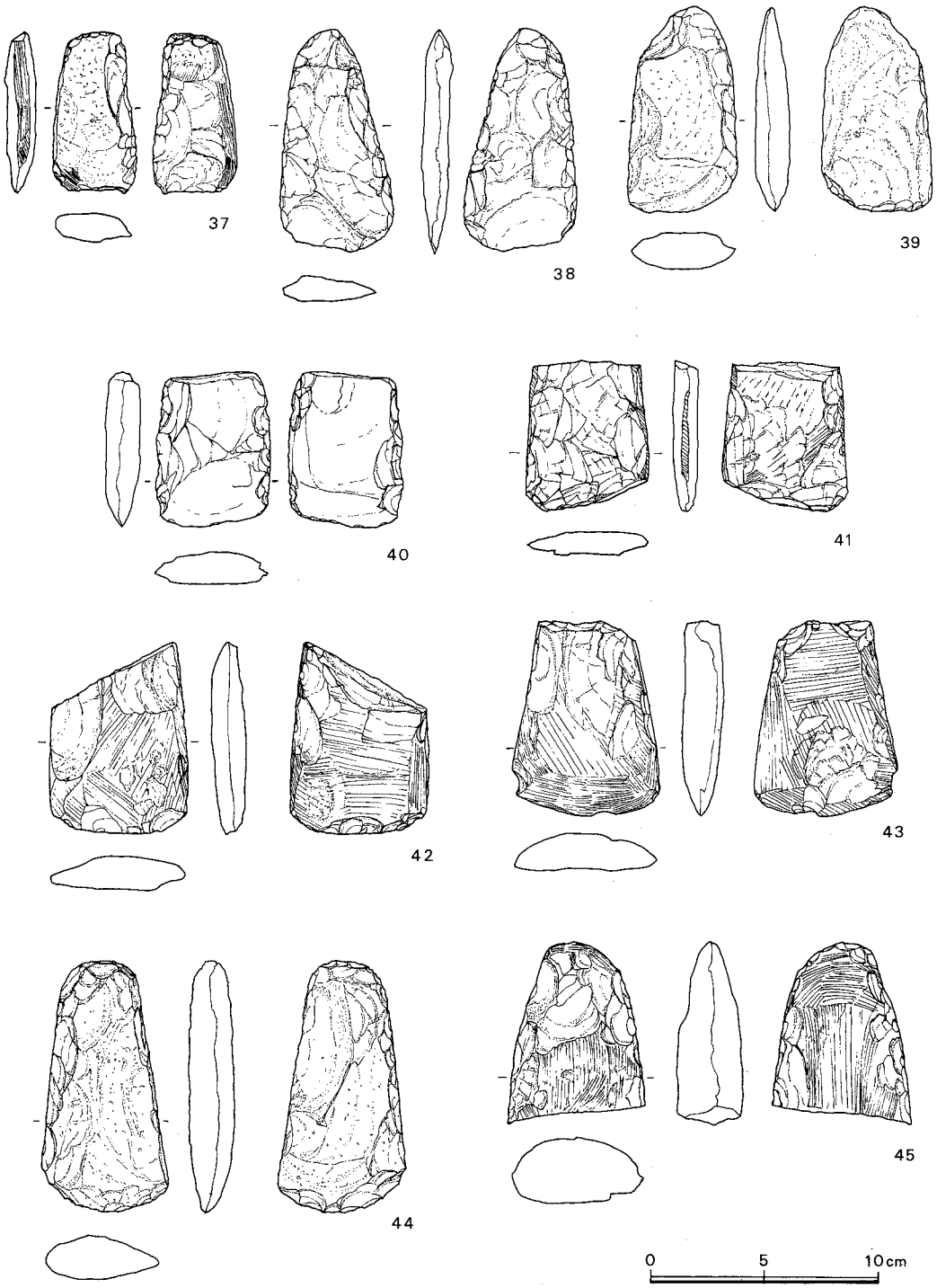
いる。43は，暗緑青色を呈した石材で，正面の刃面はまるみをもち裏面は平刃をなす。剝離整形後に磨研を施す。44は，敲打による剝離整形を加えて石斧を形成している。45は，基部上端部の石斧片で剝離調整の後に磨研を施している。

礫器類（第26～28図）

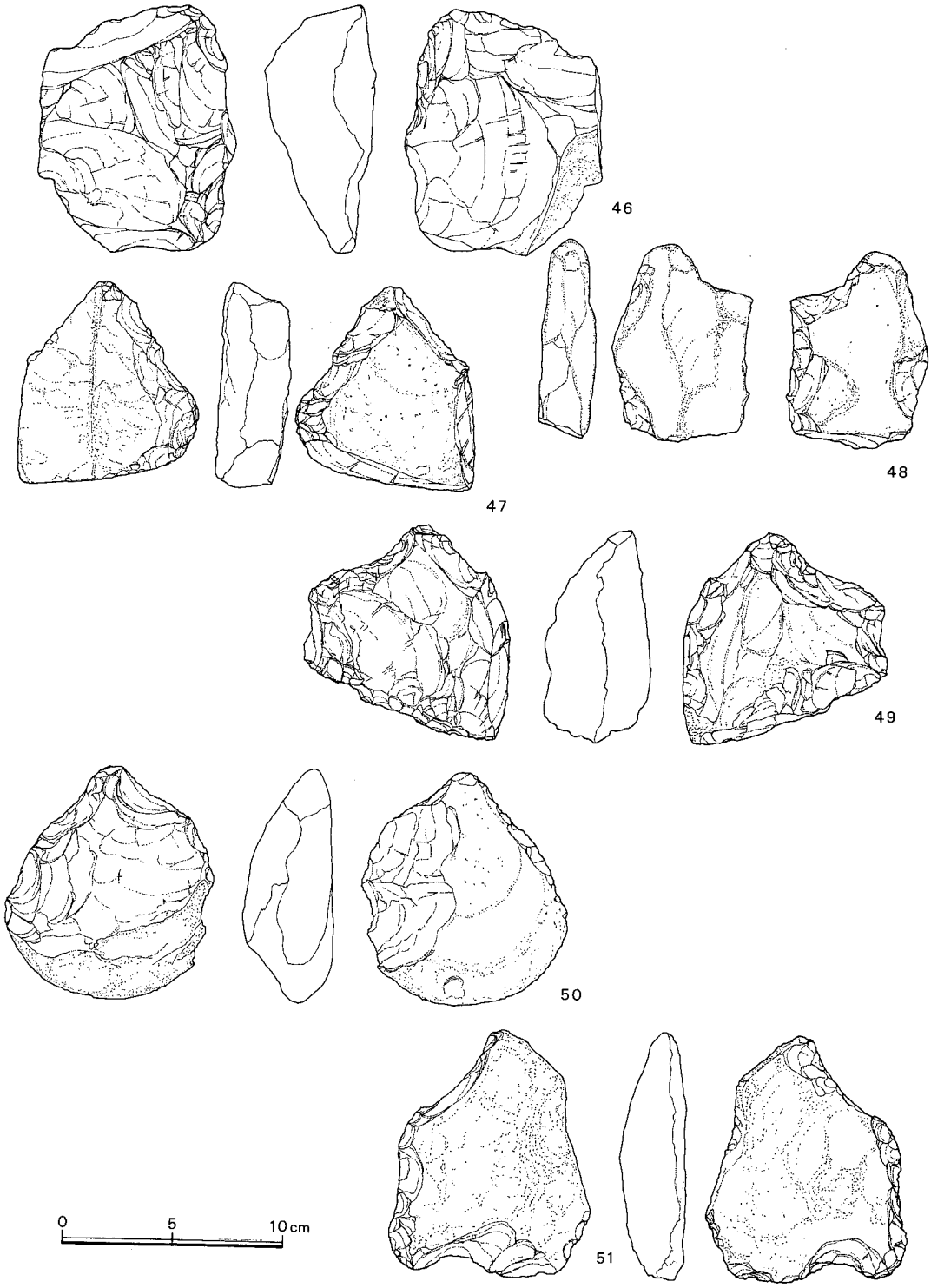
46～63にあげている石器で本県の場合海岸部に立地する遺跡においては，縄文時代の土器・石器等の遺物とともにセット関係をもって出土するものである。46は，縦長の刃部を正面右側縁部に形成し，正裏面とも階段状剝離によって表皮を除去している。47は，刃部の作出を主にし，表皮は正裏面とも自然面を残す。刃部下端部がまるみを持つ。48も47と同様に自然面を残し裏面上端に刃部を作出し，右側縁部端部がまるみを持つ。49は，上端部にまるみを持った突起を作出し，その両縁を抉るように調整剝離している。50も上端部にまるみをもった突起を作出している。両縁ともに突起周縁に調整剝離を施している。51は，正面左側縁を下端部に刃部を作出し，左下端部にまるみを持つ突起がある。表皮は自然面を残す。52は，上下端部にまるみを持った突起を作出し，正面右側縁部には調整剝離を施している。53は，粗い剝離によって，石器を形成する下端部左側に敲打による潰れの痕跡が認められる。54は，正面欠失しているが，裏面上端から右側に調整剝離を行っている。裏面上面は，自然面を残す。55は，正面を大きく剝離し，裏面の右側縁に細かな剝離を加える。左側縁⅓程を欠失する。56は，まるみを帯びた縦長の礫に下端部より剝離し刃部を形成する。その他上端部に一回の剝離を施す他は自然面を残している。57は，円形に近い礫を正裏面側縁から剝離する。上面はいずれも自然面を残す。58は，正面左側に剝離と裏面左側縁部に剝離がみられる。漆黒色のサヌカイト製である。59は，



第24図　出土石器⑥（掻器類）



第25図　出土石器⑦（石斧類）



第26図　出土石器⑧（礫器類①）

湾曲部作出のための剝離と背面からの剝離による自然面除去作業を施している。上部は欠失している。60は，58と同様の石質で，裏面中央に粗い階段状剝離を施し湾曲した刃部を形成している。正面上面の表皮除去を行っていない。61は，円礫の上部の右側縁より打撃を加え，湾曲した刃部を形成する。62も61と同様に粗い剝離を右側縁より加えて刃部を形成する。63は，両側縁より粗い剝離調整を施し，三角形状を形成する。上面と下部の自然面除去は，行っていない。

石錘類（第29・31図）

64～73・84がある。特徴は，縦長の円礫を用いて，短軸部に打撃を加えてⅠ型[註2]と長軸に打撃を加えるⅢ型とがある。目の粗い砂質の礫を（64～72）を用いたものと，安山岩質の円礫（73）を用いたものがある。84の石錘は，紐ずれの痕跡が新しく最近使用されたものであろう。

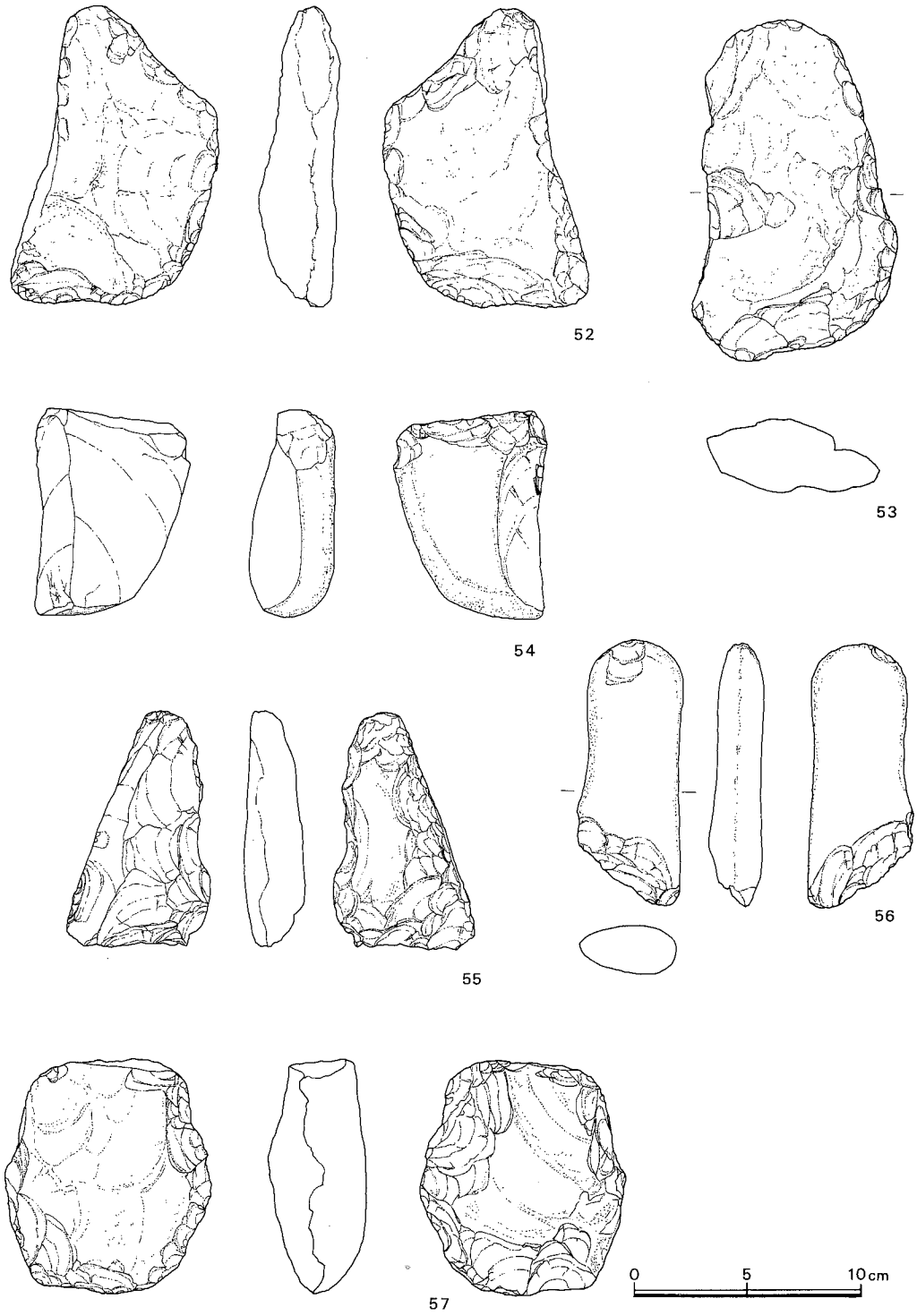
敲石・スリ石・凹石・石皿類（第30・31図）

74は，上下端部に敲打痕が残る。周縁は自然面の状態である。75も同様に上下端部に敲打による使用痕が残る。76は，上下端と左側縁部に敲打の痕跡が認められる。その他は自然面の礫である。77は，細長い礫の上下端部に敲打の痕跡がある。78は握槌状の敲石で，中央部が凹み持ちやすい。下端部に顕著な敲打痕が認められる。79は，中央部に浅い凹みを形成している。80は，長円礫の中央部に顕著な凹みを作る。81も，凹石で表裏面の中央部に凹部を形成している。82は，砂岩質の石皿で中央部が大きく凹む。83は，目の粗い安山岩質の石皿で，縁辺部より中央部に向かって凹む。¼程が残る。

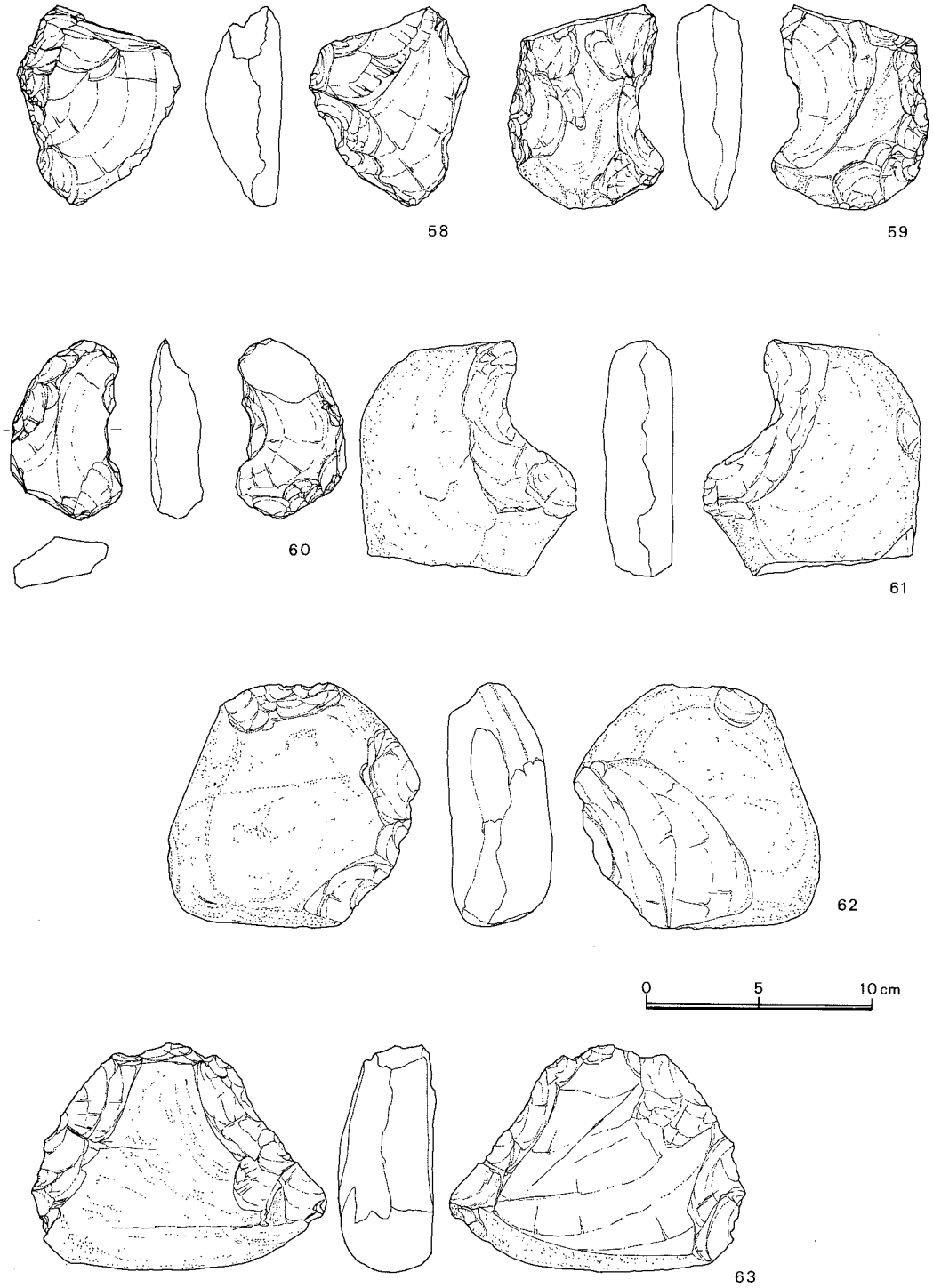
小結

堂崎遺跡での出土石器の特色は，礫器・石錘・石鋸・石鋲等にあり，これは外海に面した立地を背景に石器の器種が規定されているといえる。同様の性格をもった遺物が海と面した県内各遺跡においても出土している。また，これに加えて木材伐採を加工のための石斧と二次的加工用具と考えられている敲石・凹石・石皿等が出土している。

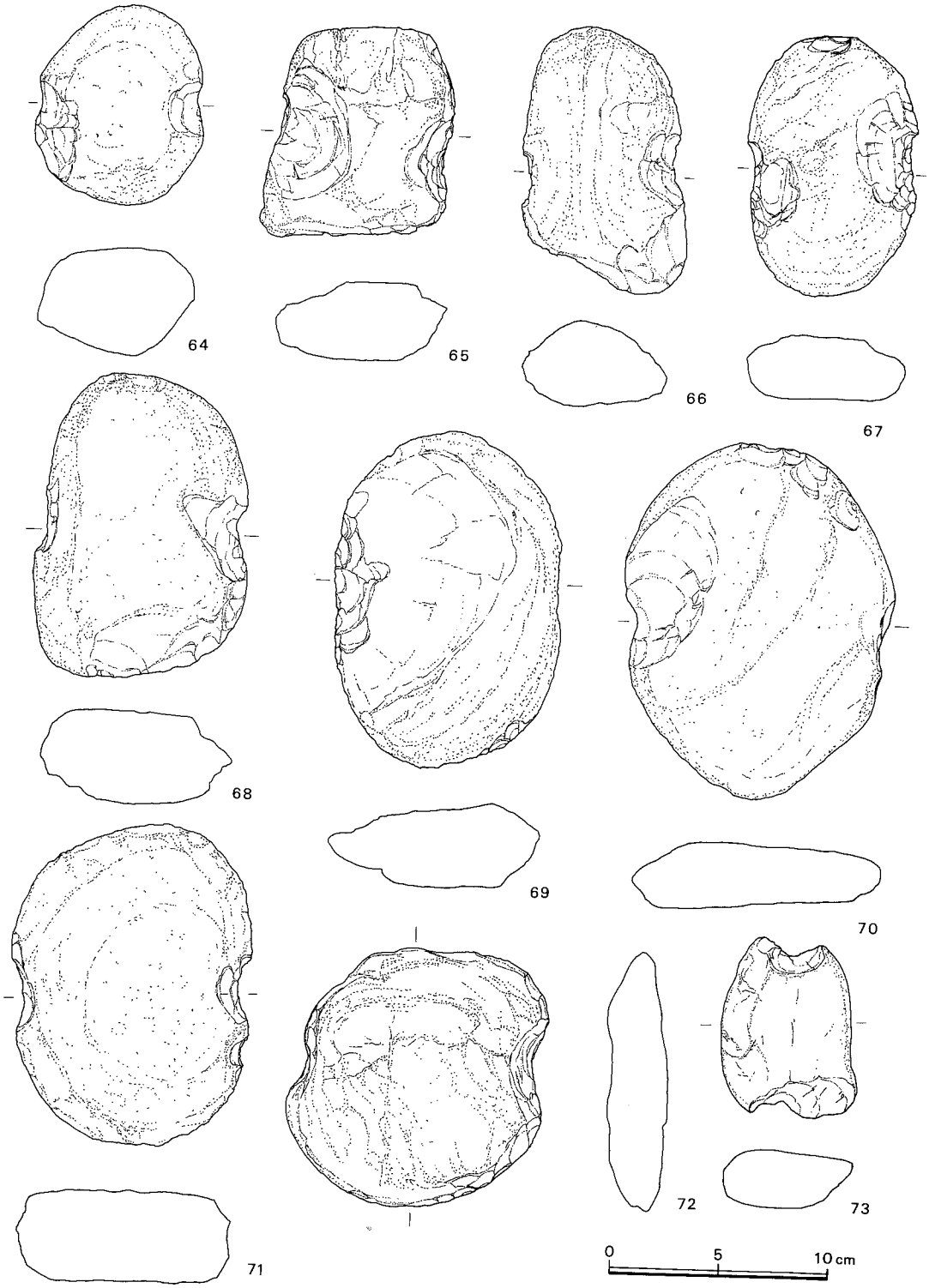
遺物の構成から概観していくと，剝片類では石核の資料が１点しかなく基本資料に欠失があるものの，石核打面調整後に剝離されたものと，自然面をそのままに剝離した剝片とがみうけられる。剝片を素材とした石器では，組合わせによって一つの形態をなす石鋸（28）が出土している。また，この種の石器は県内に多く分布しているものであるが，特に五島列島では分布が濃密である。福江市内では，中島遺跡[参1]・白浜貝塚[参2]よりの出土報告がある。石鋲状石器は，江湖貝塚でも三形態に分類された石器があるが堂崎遺跡の場合は，５cm程度のサヌカイト剝片に基部調整と先端調整を施した（19～22）ものの出土がある。出土類例としては，つぐめのはな遺跡[参3]・築崎遺跡[参4]等での報告がある。石斧類では，基部が刃部幅と平行なものと，基部端が尖りぎみの尖基部のものとがある。礫器類[註3]には，江湖貝塚において礫器の分類がおこなわれており，これによるとⅠ型が47・48・49・50・51・52・53・54・59・60・61・63にあたり，Ⅱ型に46・56・57・58・62をⅢ型では，55があたるものである。石錘では，縦長の円礫に短軸部中央の側



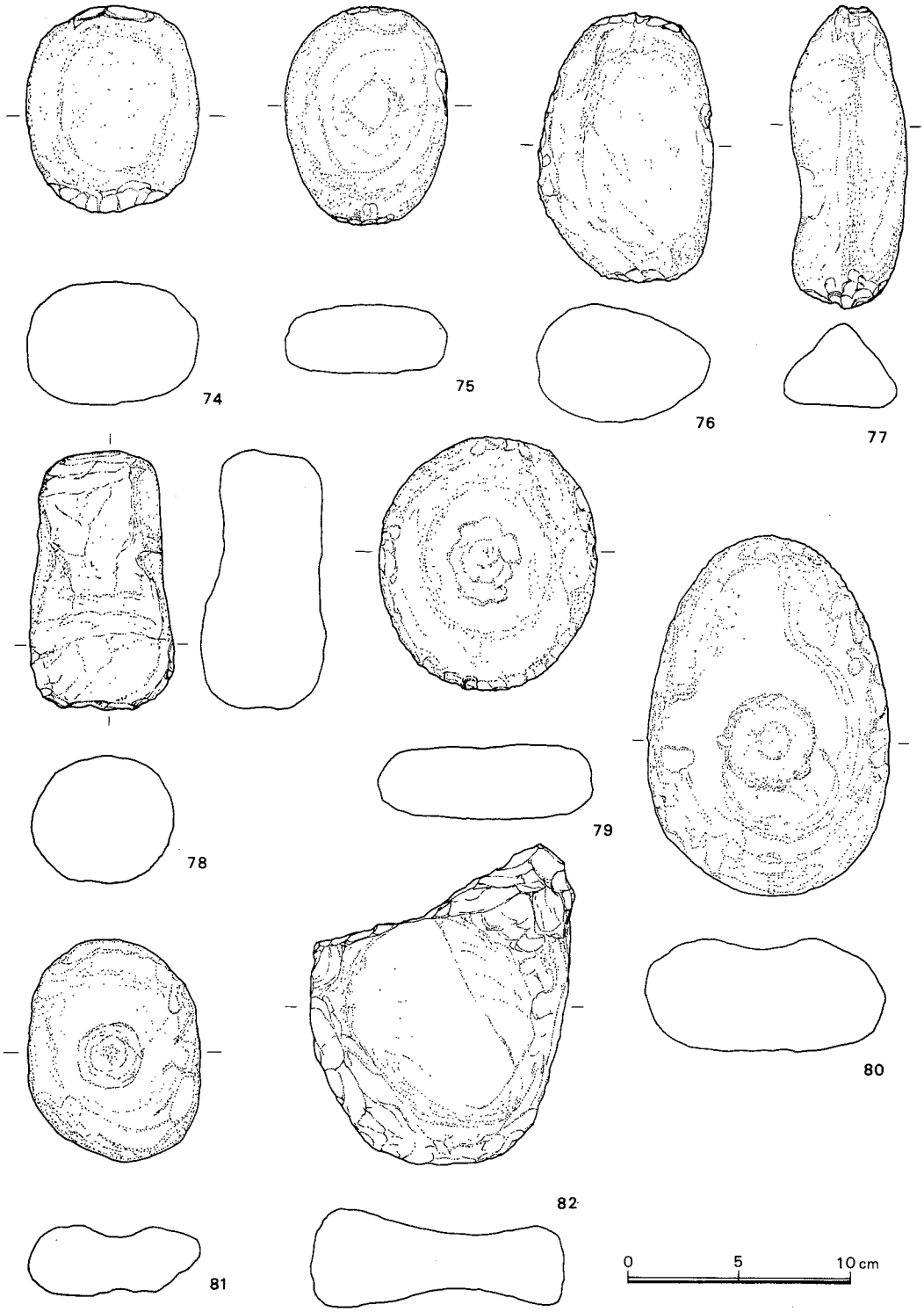
第27図　出土石器⑨（礫器類②）



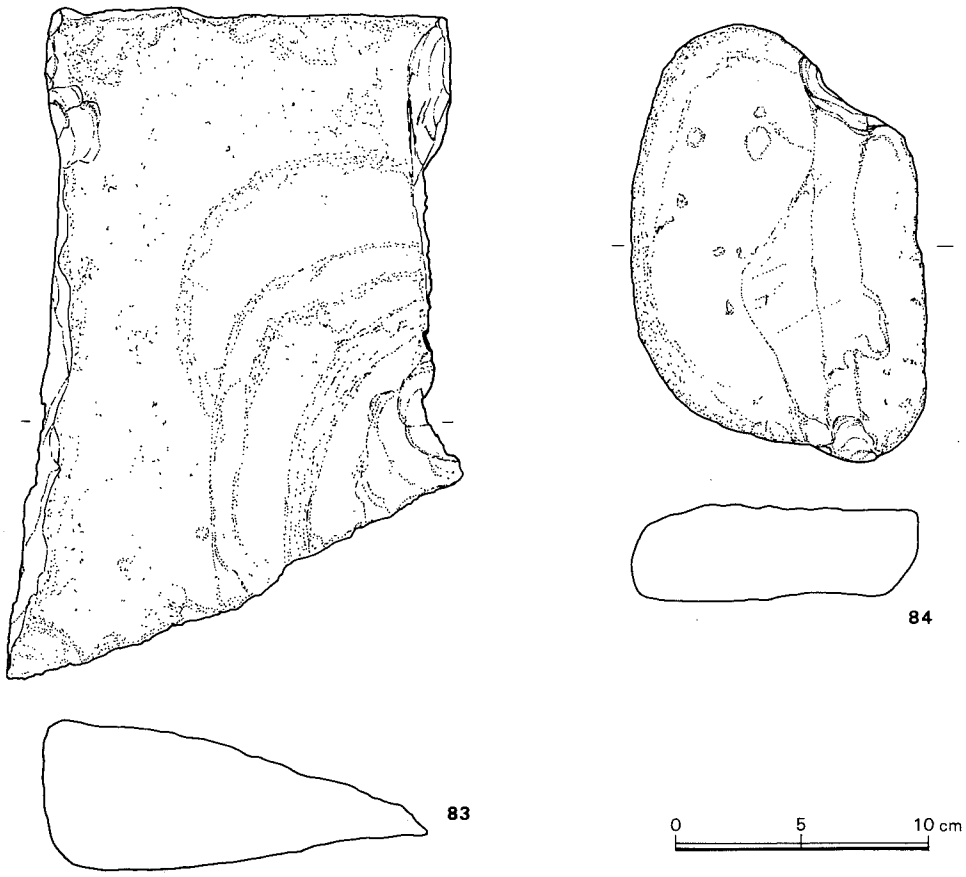
第28図　出土石器⑩（礫器類③）



第29図　出土石器⑪（石錘類）



第30図　出土石器⑫（敲石・スリ石・凹石・石皿類）



第31図　表採石器⑬（石皿・石錘類）

縁より簡単な打撃を加え，抉りをつけるものが多く，73だけが，礫の長軸部中央より打撃を加えている。敲石は，楕円形の円礫を使用するものと，縦長の礫を使用するものとがある。使用痕は，いずれも両長軸端部を敲打している。凹石では，安山岩質の中央に浅い凹みを持ったものが3点出土している。石皿は，82・83の2点があり両面ともに中央部が凹んでいる。以上が石器の概略である。

註1；芹沢長介「周辺文化との関連―石鋸―」『日本の考古学』II　1965

2；町田利幸「礫石錘」『堂崎遺跡』長崎県教育委員会1982

3；坂田邦洋「石器」『曽畑式土器に関する研究―江湖貝塚―』縄文文化研究会1973

参考文献1；『中島遺跡』福江市文化財調査報告書第3集福江市教育委員会1987

2；『白浜貝塚』福江市文化財調査報告書第2集福江市教育委員会1980

参考文献３；「つぐめのはな遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報IX』長崎県教育委員会1986
４；『築崎遺跡』飯盛町文化財調査報告書第１集飯盛町教育委員会1990
５；佐原　真「石斧論」『考古論集慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集別冊』1977

表１　堂崎遺跡石器計測表（２次調査）

番号	出土区	最長(cm)	最幅(cm)	最厚(cm)	重量(g)	備考	番号	出土区	最長(cm)	最幅(cm)	最厚(cm)	重量(g)	備考
1	2堂A-1・Ⅳ上	3	2	0.8	3.90		43	2堂C-3・S-1	8.3	6.3	1.7	130.40	L.1.78m
2	2堂A-2・Ⅱ貝層	4.2	1.9	0.9	6.40		44	2堂A-2・北壁	11	5.5	2	150.01	
3	2堂A-1・Ⅲ上	3	1.7	0.7	2.37		45	2堂B-5・Ⅲ	7.4	6	2.9	166.74	
4	2堂A-1・Ⅲ上	5.2	2.3	1	7.40		46	2堂・H	11.1	8.9	5	499	
5	2堂・H	3.3	2.2	0.8	4.74		47	2堂A-2・S-14	9	8.1	3.1	280	L.1.971m
6	2堂A-1・Ⅱ	3	1.6	0.7	3.38		48	2堂F-0・排	8.9	6.1	2.5	186.43	
7	2堂D-5・H	4.6	2.4	0.8	9.35		49	2堂・H	9.2	9.1	4.8	456	
8	2堂D-5・H	4.6	2.6	1.1	8.82		50	2堂A-2・S-11	10.5	8.9	4.1	430	L.1.975m
9	2堂A-2・S-2	6.1	1.6	1.1	7.95	L.2.116m	51	2堂B-5・Ⅲ	11.2	8.8	2.9	234	
10	2堂C-5・Ⅲ中	4.9	3.6	1.9	23.04		52	2堂・H	13	7.7	3.4	437	
11	2堂C-4・Ⅱ中	4.9	3	1.2	13.81		53	2堂・H	14.5	8.3	3.2	504	
12	2堂C-4・Ⅱ下	3.7	1.8	0.5	2.61		54	2堂A-1・Ⅲ砂	9.1	6.7	3.7	250	
13	2堂・H	3.2	2.8	1.1	6.92		55	2堂A-2・S-15	10.3	6	2.6	162	L.1.913m
14	2堂・H	4.2	3.8	1.1	13.71		56	2堂D-5・Ⅲ	11.3	4.5	2.3	165	
15	2堂F-0・排	4.5	2.7	1	11.45		57	2堂・E-4排	10.2	9	4.3	535	
16	2堂・H	5.6	3.2	1	17.08		58	2堂・H	8.5	7	3.3	190	
17	2堂F-0・排	6.3	3.1	1.4	25.98		59	2堂D-5・Ⅳ	8.3	6.4	2.9	190	
18	2堂・H	5.2	2.4	1.5	19.10		60	2堂・H	7.9	4.8	2.2	100	
19	2堂A-2・Ⅱ貝層	5.2	1.9	1.2	8.67		61	2堂F-0・排	10.3	9.5	3	425	
20	2堂・H	5.3	2.7	1.5	17.74		62	2堂A-2・S-11	10.9	10.3	4.5	660	L.1.975m
21	2堂・H	5.2	2.6	1.2	15.00		63	2堂A-2・S-7	13	10.1	4.2	680	L.1.999m
22	2堂B-5・Ⅲ	6.5	3.3	1.5	34.18		64	2堂A-2・S-12	9.1	7.7	4.9	480	L.1.987m
23	2堂D-5・H	8	5.3	1.6	67.52		65	2堂・H	9.6	8.3	3.6	480	
24	2堂・H	5.8	4.5	1	26.23		66	2堂A-2・S-5	11.4	7.5	3.9	475	L.1.995m
25	2堂A-2・S-11	5.9	5	1.5	43.12	L.1.975m	67	2堂A-2・S-6	12	7.8	2.8	390	L.1.989m
26	2堂F-0・排	9.9	5.5	1.4	69.57		68	2堂・H	14	9.9	4.3	890	
27	2堂・H	6	3.5	2.1	47.12		69	2堂・H	15.3	10.3	3.8	795	
28	2堂F-0・S-1	2.1	1	0.3	0.67	L.2.319m	70	2堂C-4・S-2	16.2	12.3	3	915	L.1.924m
29	2堂B-5・Ⅲ	4.8	3.3	1.6	26.07		71	堂・H	14.7	11	4.2	1010	
30	2堂C-4・Ⅱ中	3.3	2.6	2	14.96		72	堂・H	11.9	11.8	2.8	590	
31	2堂・H	5.2	4.7	2.1	53.65		73	2堂E-4・H	7.8	5.9	2.8	180	
32	2堂C-3・Ⅲ	6.3	4.4	2.2	62.01		74	堂・H	9.1	7.8	5.6	665	
33	2堂・H	7.6	4.1	2.3	65.56		75	2堂A-2・Ⅱ貝	9.7	7.2	3.1	320	
34	2堂A-2・S-9	6.3	4	2.4	71.64	L.1.929m	76	2堂A-2・Ⅰ貝	12.1	7.9	5.2	685	
35	2堂B-5・Ⅱ	8.8	4.1	1.6	83.14		77	2堂A-2・S-8	13.4	5.2	3.6	345	L.2.025m
36	2堂・H	5.6	5.4	2.1	55.27		78	2堂B-3・S-1	11.6	6.5	5.7	600	L.1.89m
37	2堂D-9・S-1	6.9	3.7	1.3	46.47	L・1.585m	79	2堂A-2・Ⅰ貝	11.3	9.7	3.3	550	
38	2堂D-5・H	9.6	4.9	1.3	66.51		80	2堂D-5・H	16	10.8	5	1360	
39	2堂A-2・S-1	8.8	4.8	1.5	88.93	L.2.142m	81	2堂C-3・Ⅲ	9.9	7.6	3.4	370	
40	2堂C-4・S-1	6.6	5	1.5	81.77	L.1.872m	82	2堂A-2・S-10	13	11.5	4.4	720	L.2.04m
41	2堂A-2・S-13	5.3	5.3	1.1	59.26	L.1.925m	83	2堂・H	16.3	11.4	3.9	1160	
42	2堂A-2・S-4	8.1	5.9	1.5	102.52	L.2.116m	84	2堂・H	26.2	16.7	5.7	4115	

V 総　括

平成2年度における範囲確認調査の成果の一端は，調査の概要として昨年報じた[註1]ところであるが，本年度調査は東側外海部が中心となった。2か年に渡った調査で得られた結果は，当初予想していたよりも遺跡の規模が大きく，自然遺物を含め，遺物の量も多く，しかも縄文前期を主体に中期まで出土する良好な遺跡であるということである。

遺跡は砂丘が南北に伸びて形成されている全面に展開しているが，この地は，昭和20年代は陸地と切り離された状態で，狭隘な水路をはさんで島状に孤立していた地形である。また外海部に面した遺物の出土する地点は，縄文前期の頃は砂丘が広く張り出していたと考えられ，昭和30年代の写真では松の大木が生い茂り美しい景観を醸し出している。

出土遺物は，土器・石器・貝製品・自然遺物などが得られている。しかしながら貝層を伴う遺跡として骨角器の発見はなかった。

土器については，外海部において隆帯文を基調とした轟B式系統の土器がまとまりを見せ出土している。轟B式土器は熊本県宇土市の轟貝塚出土の土器を基準として松本雅明・富樫卯三郎[註2]によって説定された前期前半の土器である。これまで文様のみで考えられがちだった分類については近年，京都大学と熊本大学の出土資料を検討した宮本一夫の論考[註3]や，山口信義の検証[註4]がある。これによると前者は轟B式Ⅰa・Ⅰbの隆帯をもつ底が丸くすぼまる型，BⅡを屈曲した隆帯と胴部が屈曲する特徴をもつものに区分している。さらに後者はⅠ類からⅦ類に分類したなかで胴張型から底すぼまり型に大別し，新旧関係も同様に導き出している。また水ノ江和同[註5]は轟B式土器について両者の見解を堅持しつつ，西本九州から以南にかけては張胴型が見られず，下本山岩陰遺跡や伊木力遺跡等で出土している屈曲型が多いことを指摘している。また曽畑式土器の出自については，「轟B式から曽畑式土器への単純な変遷は到底考えられない」として轟B式系土器の中で中間土器群の類型を整理し，曽畑式土器への発展段階を示している。さて本遺跡における土器の組成は，轟B式を主体とする一群と曽畑式・阿高式を中心とする一群に分けられる。轟B式は貼り付け隆帯や連続刺突文を組み合わせた屈曲型の器形が多く見られ前期前半に位置づけられよう。五島列島において，この時期まで遡る遺跡は新魚目町所在の西ノ股遺跡[註6]があげられる程度である。この遺跡も潮間帯に位置しており，類似性が見られる。

曽畑式土器については外海部出土の遺物よりも，南側砂丘出土の方が，まとまりを見せている。ここから出土の土器は文様も整然と区画されたII式の特徴をもつものも見られるが，文様帯が乱れIII式の段階に入るものもある。曽畑式土器を単純に出土する遺跡は江湖貝塚[註7]が知られる。この貝塚は福江市内を狭んで南方に位置しており，現在は礫ばかりの海岸である。しかしここも昔は白砂青松の海岸であったと言われており，地形的には本遺跡と同様である。この遺跡は昭和44年に発掘調査が実施され曽畑単純の資料が得られている。特に人骨や大型の碇石と

考えられる石器などが出土した。曽畑式土器は整然とした幾何学文様を配したもので初期の段階に位置付けられる。江湖貝塚の放射性炭素の測定による曽畑式土器の年代は5310±40ｙ・ＢＰ（ＧＡＫ－4055マガキ）であり，本遺跡のピークもこのあたりに求められよう。阿高式土器の出土は外海部にはほとんど認められず，南側砂丘およびＦ－Ｏとした内海部に面した地点からである。地表面には礫が堆積しており砂丘が浸食されているのかも知れない。この礫を除いていくと，マガキが多く，次いで下層にはアワビ貝が目立つ。中期にアワビが好んで食されたものと思われるが，本遺跡の最初の発見はこの内海部で採集された礫器であり，これら貝類の捕獲および調理用貝として利用されたものであろう。

石器は礫器，石斧，石鋸，石鏃と多種にわたるが，黒曜石，サヌカイト製の石器が多い。轟Ｂ式に供伴する礫器は従来から言われているような貝類の捕獲などの礫器とは違った，前期の礫器として特徴的な自然を多く残した粗い打撃を加えたものである。石鋸や石銛に類似した石器の出土は，やはり対馬暖流型文化の中で捉えられるものである。

自然遺物は貝層中より獣骨や魚骨が出土しているが，詳細な分析をしていない。しかし獣骨の中で多いのがイノシシとシカである。シカは五島列島に野性で生息しており数多く見ることが出来るが，イノシシは見ることが出来ない。出土獣骨ではイノシシの個体数が優位を占めている。他にはウミガメやイルカ，鯨骨も含まれている。[註8]

貝類は83種類が確認されているが江湖貝塚の場合は84種類にのぼりほぼ同数である。共通している点はサザエ，クマノコガイ，スガイなどが多い。

人骨は外海部から部分的に出土し埋葬状態は不明である。成人骨で男女２体分が推測されている。一応層的には轟Ｂ式土器を含む層であり，現在のところ江湖貝塚出土人骨よりも古く，五島列島最古の人骨である。

以上のように堂崎遺跡は縄文時代前期前半まで遡ることが確認できたが，不明な点はまだ多く残されている。遺跡がわずかずつ浸食されるのは海中遺跡の宿命でもあるが，今後は残された部分をどのように保護し，活用して行くかが課題である。

文献

註１．安楽勉　『福江・堂崎遺跡』福江市文化財調査報告書第４集　1991

２．松本雅明・富樫卯三郎「轟式土器の編年」『考古学雑誌』47－３　1961

３．宮本一夫「近畿・中国地方における縄文前期初頭の土器細分」『京都大学埋蔵文化財センター紀要Ｖ』　1987

４．山口義信「隆帯文（轟Ｂ式）土器研究ノート『財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室研究紀要』１　1987

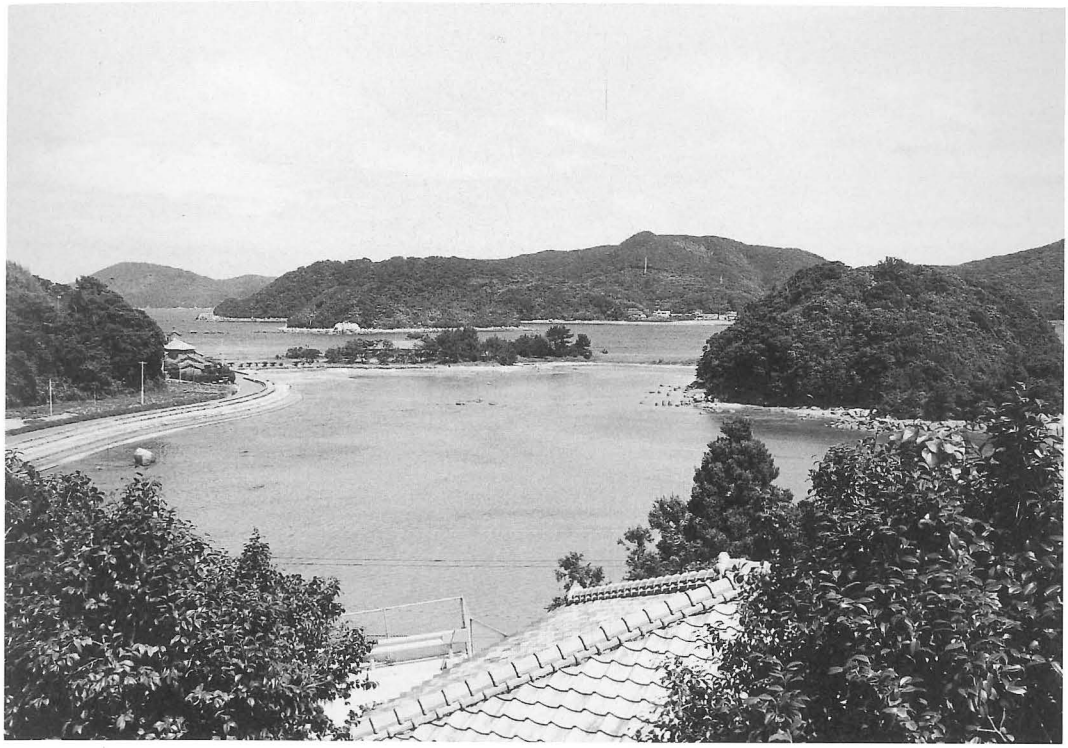
５．水ノ江和同「曽畑式土器の出現―東アジアにおける先史時代の交流―」『考古学研究』第117号

６．藤田和裕・久原巻二『西ノ股遺跡』新魚目町文化財調査報告書第２集　1988

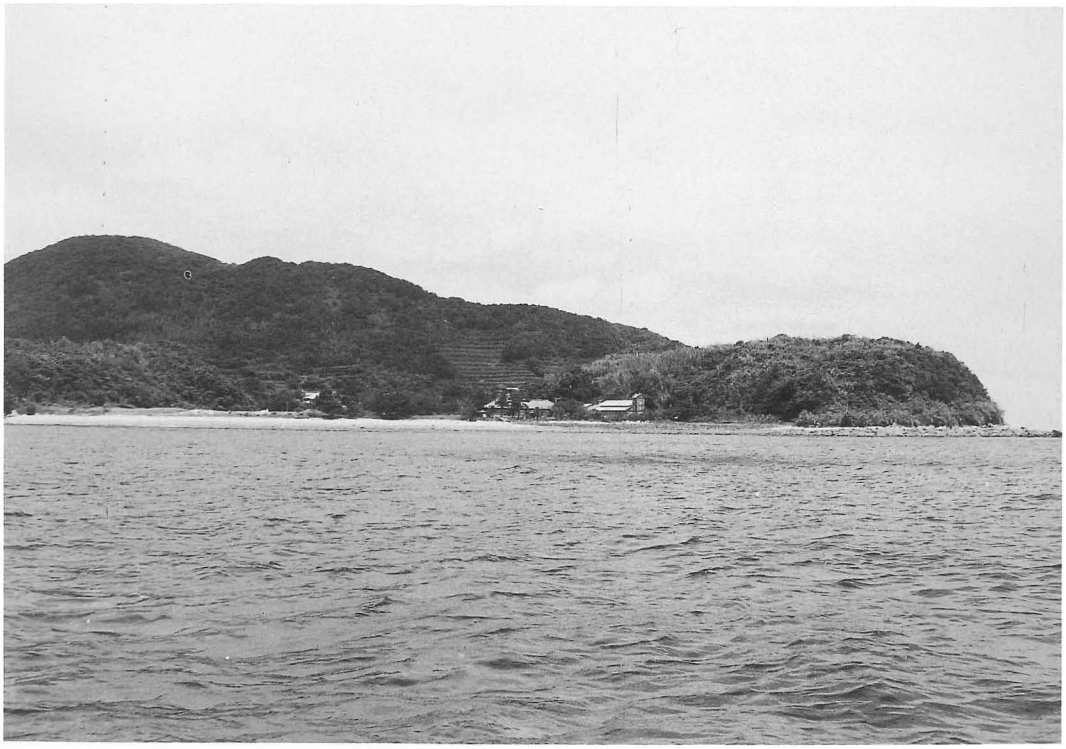
７．坂田邦洋『曽畑式土器に関する研究』江湖貝塚　縄文文化研究会　1973

８．大分市歴史資料館館長木村幾太郎氏の所見による。

図　　版



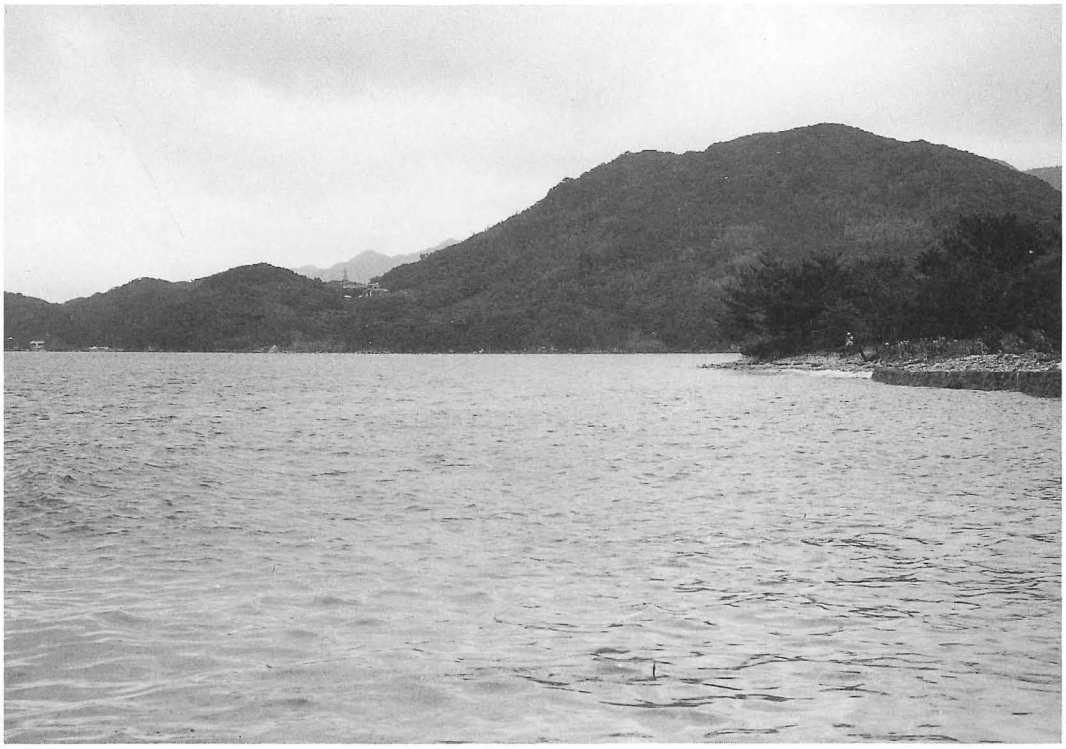
西側から



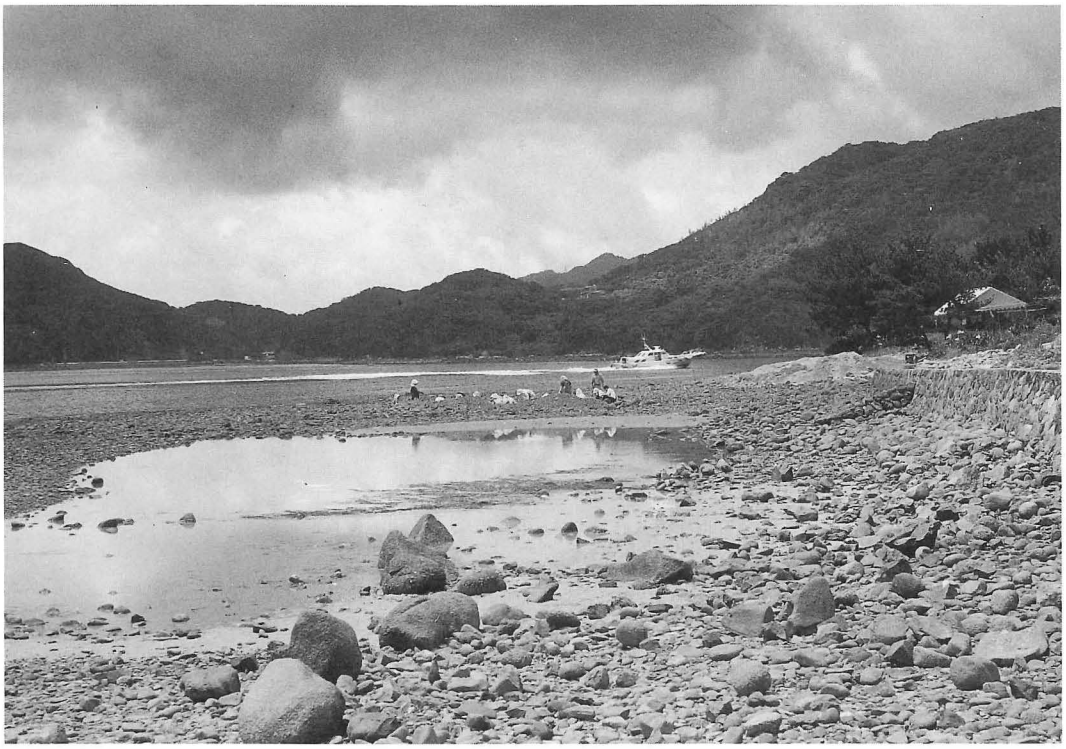
東から

遺跡遠景

図版 2



満潮時北から



干潮時北から

遺 跡 近 景

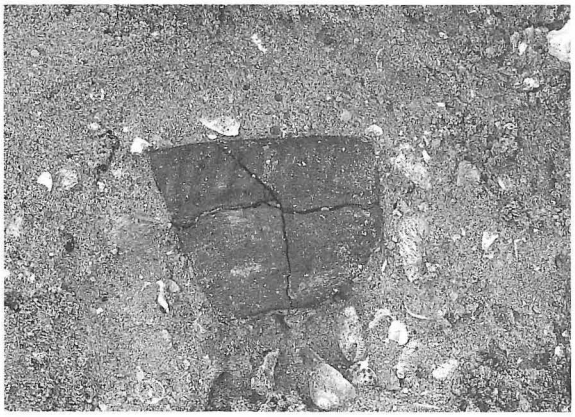
2 B — 4 北側

2 A — 2 西側

土　　層

人骨出土状況

石器出土状況

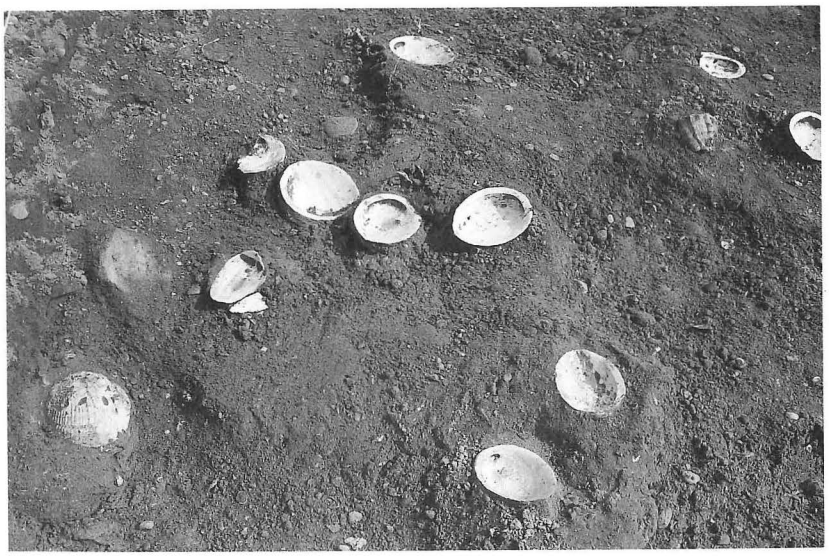


土器出土状況

貝輪出土状況

遺物出土状況

鹿角と下顎骨出土状況



F－0アワビ貝出土状況

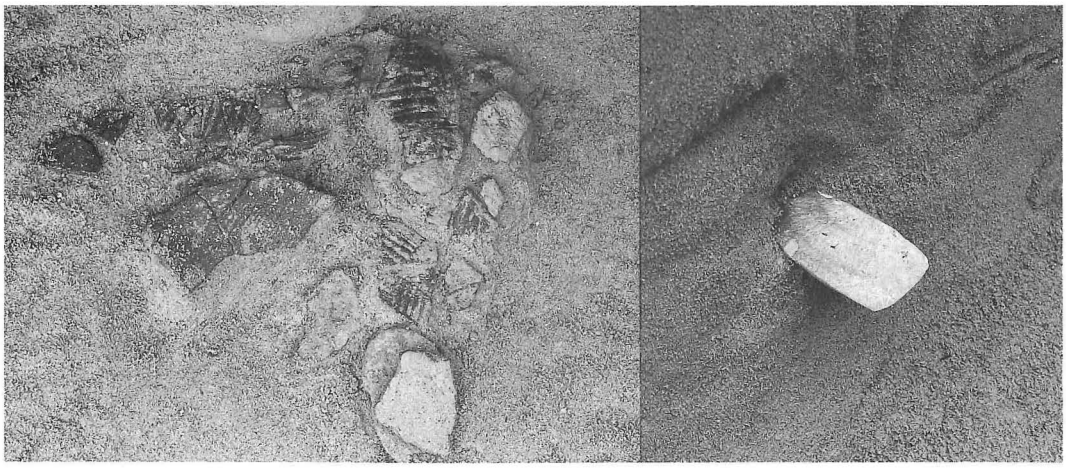
遺物出土状況

図版 6

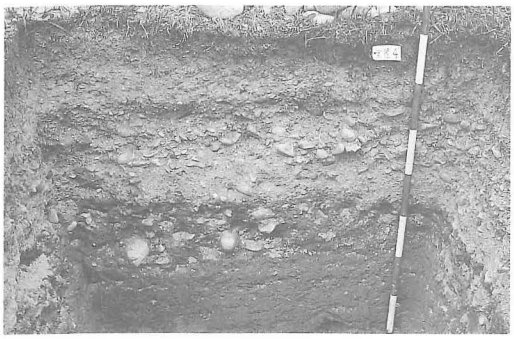
Ⅰ—13区土層

Ⅰ—13区遺物出土状況

Ⅰ—13区遺物出土状況



Ⅰ—13区遺物出土状況



M－2北壁

2F－0北壁

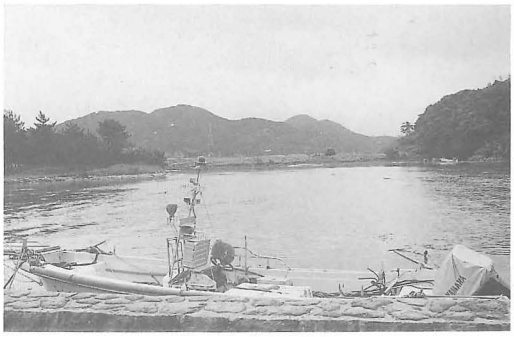
調査風景

調査風景

小学生の体験学習

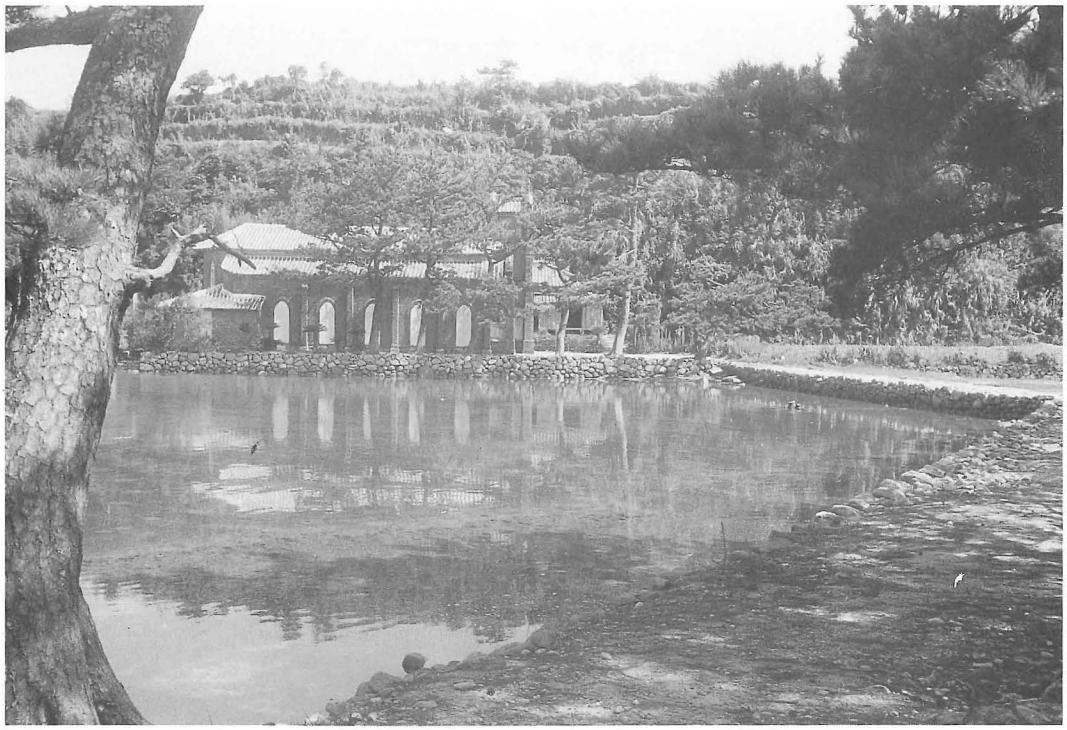
教会東側広場の調査風景

土層および調査風景

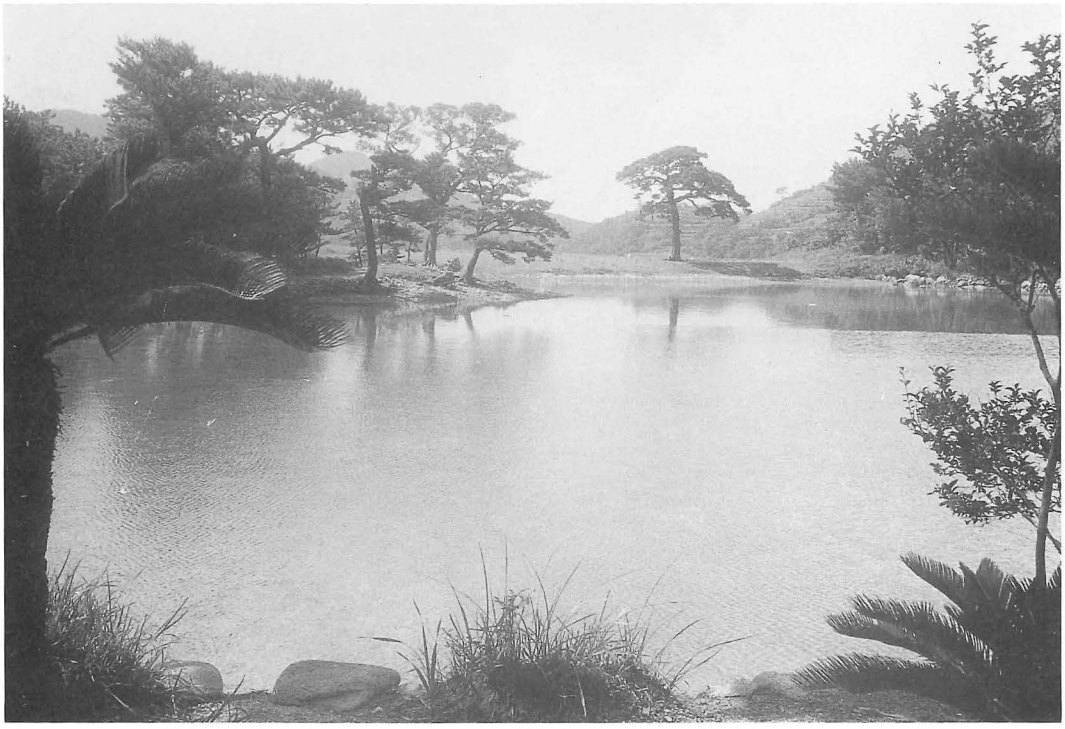


堂崎教会から南側砂丘を望む

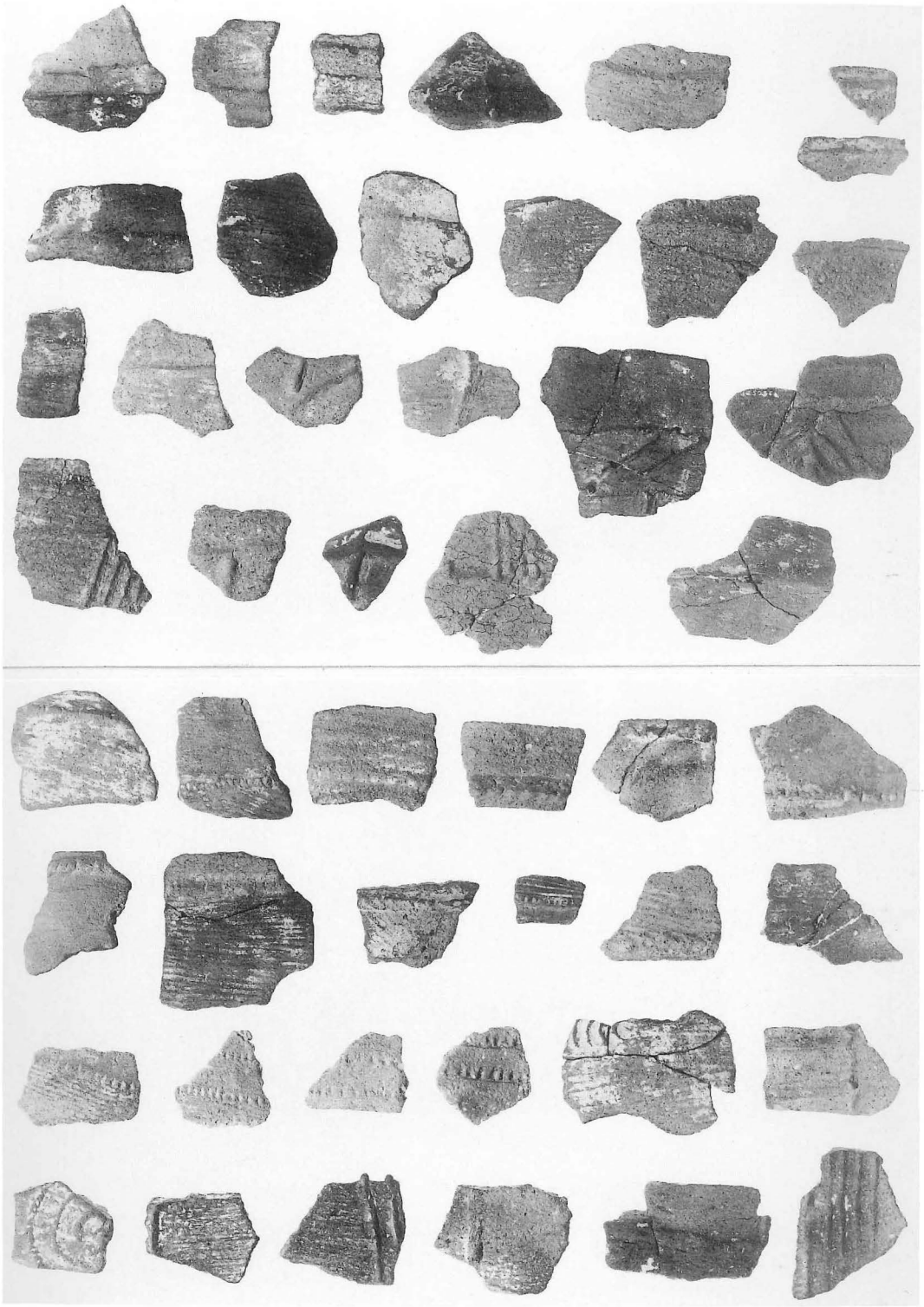
図版 8



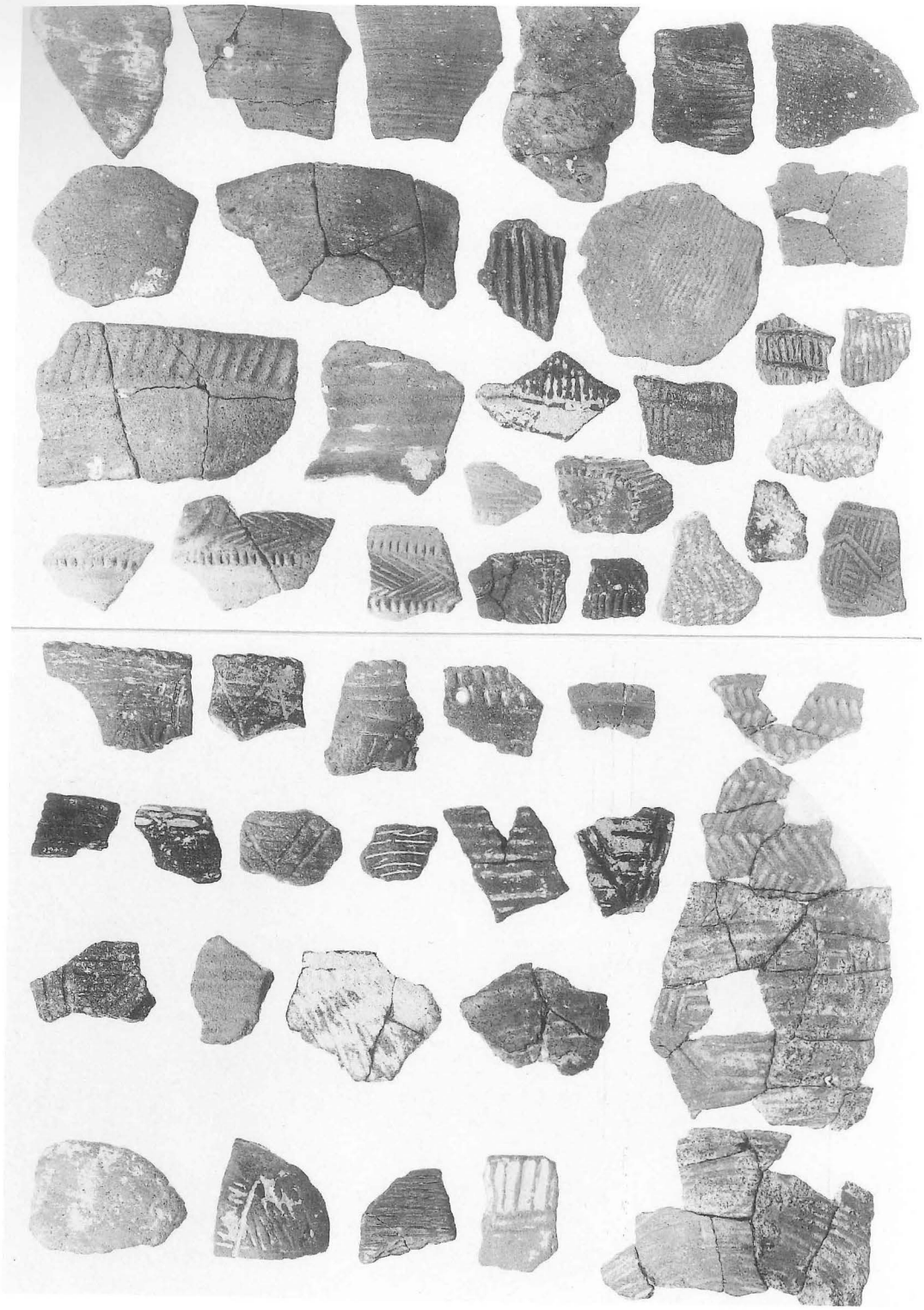
南側から教会を望む



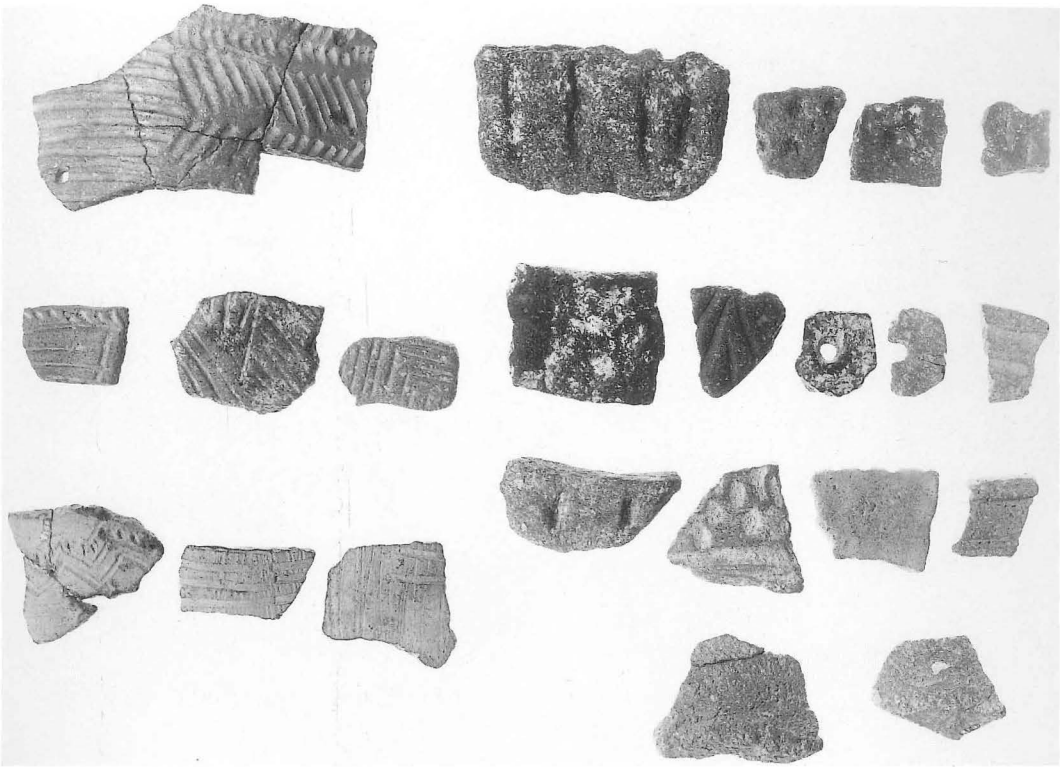
昭和36年撮影の堂崎教会・教会から南側砂丘を望む(的野圭志氏撮影)

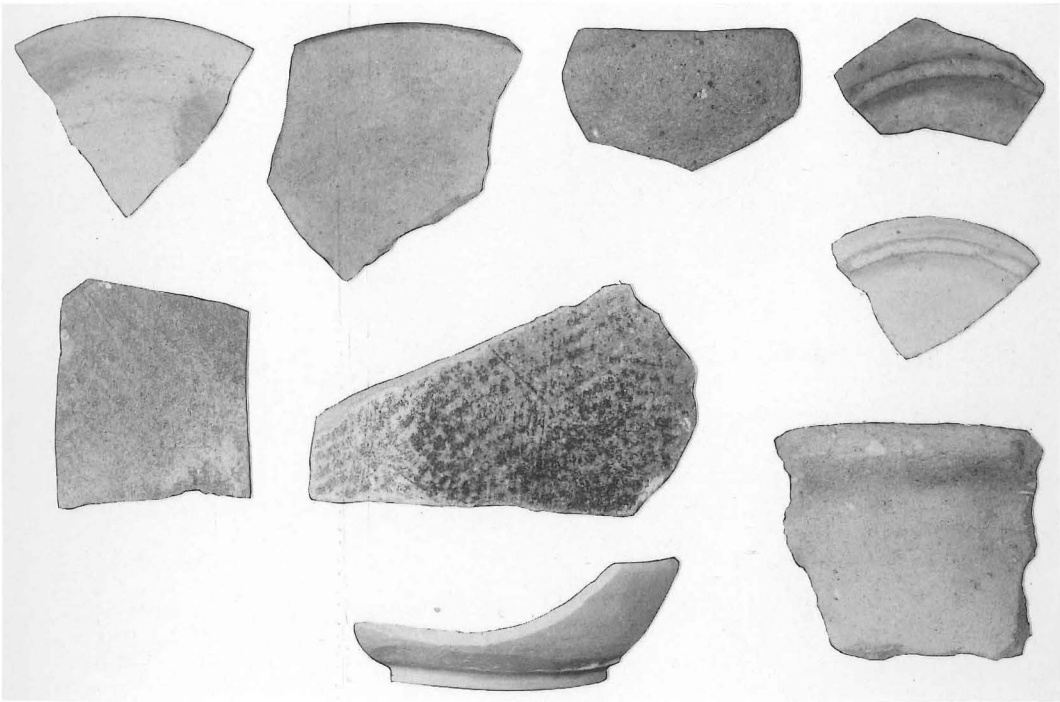


出土土器①

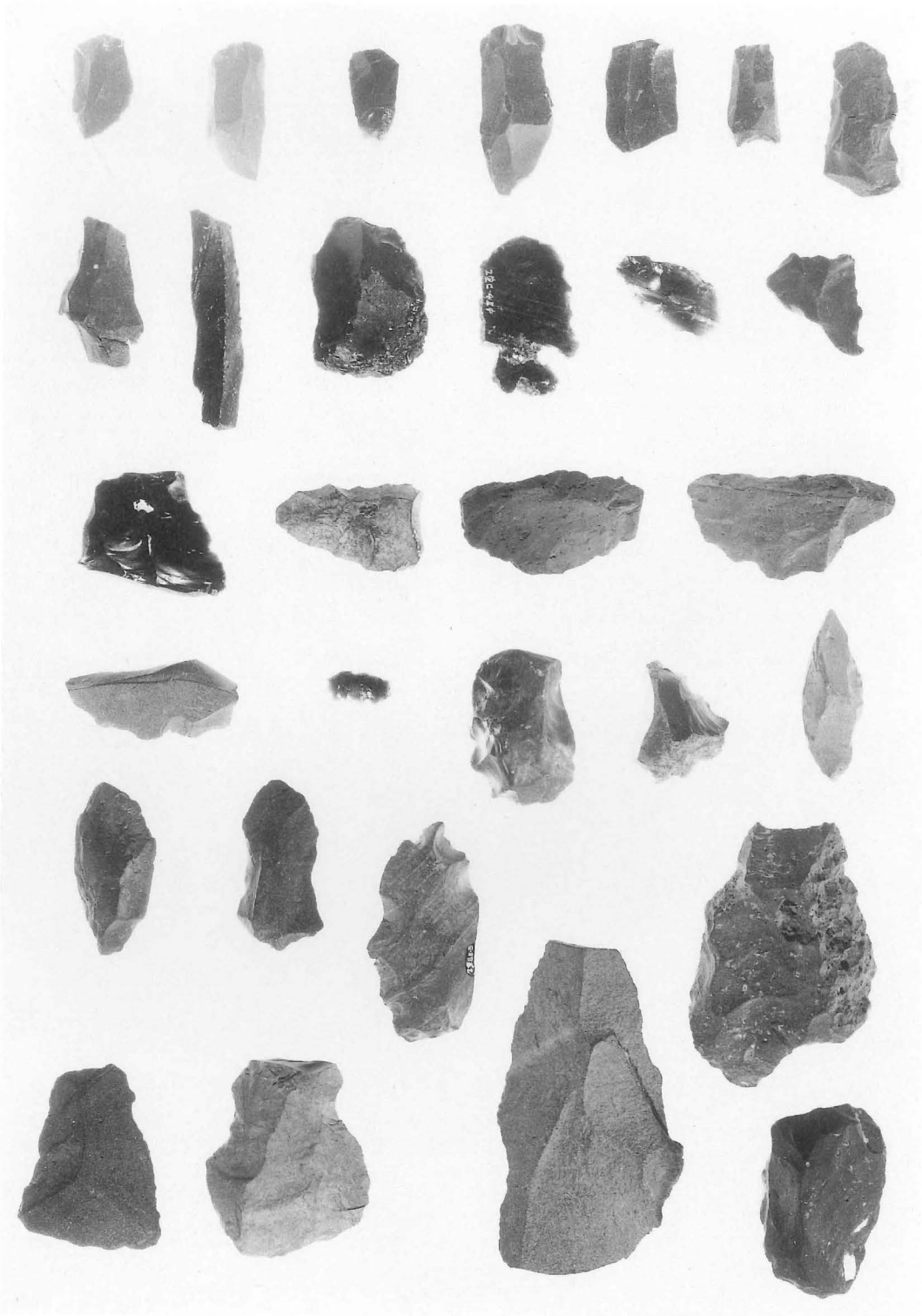


出土土器②

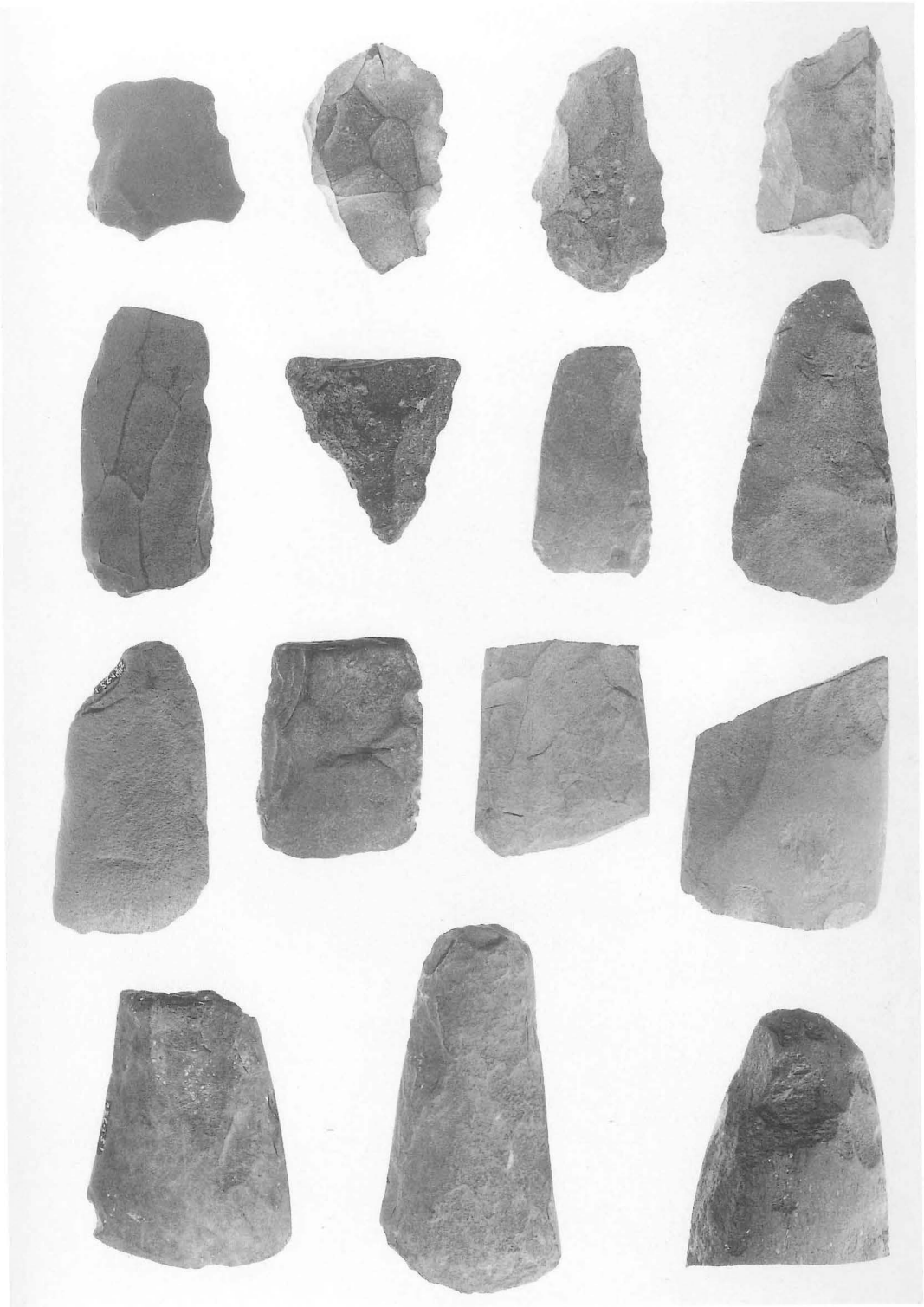




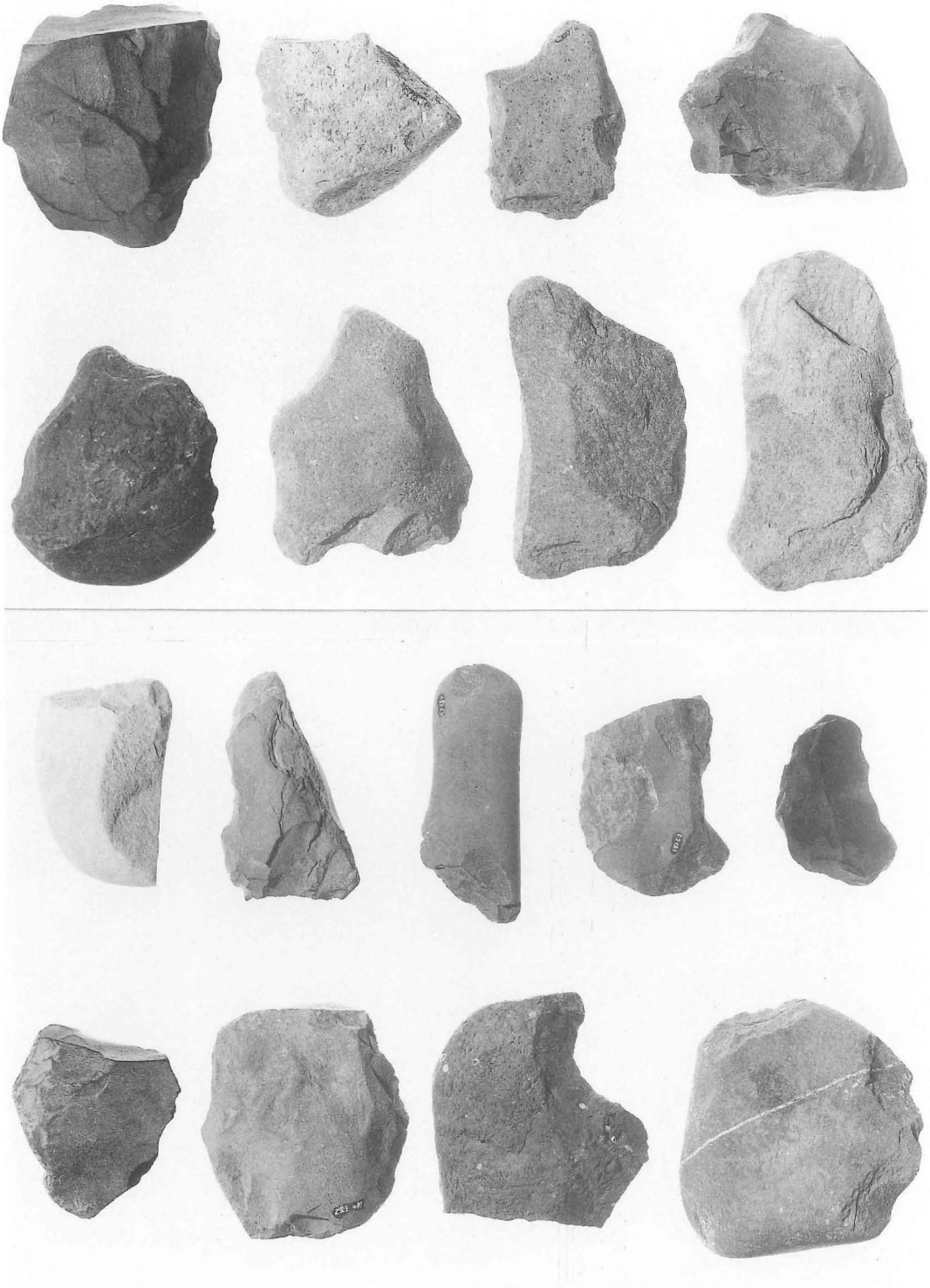
出土土器③



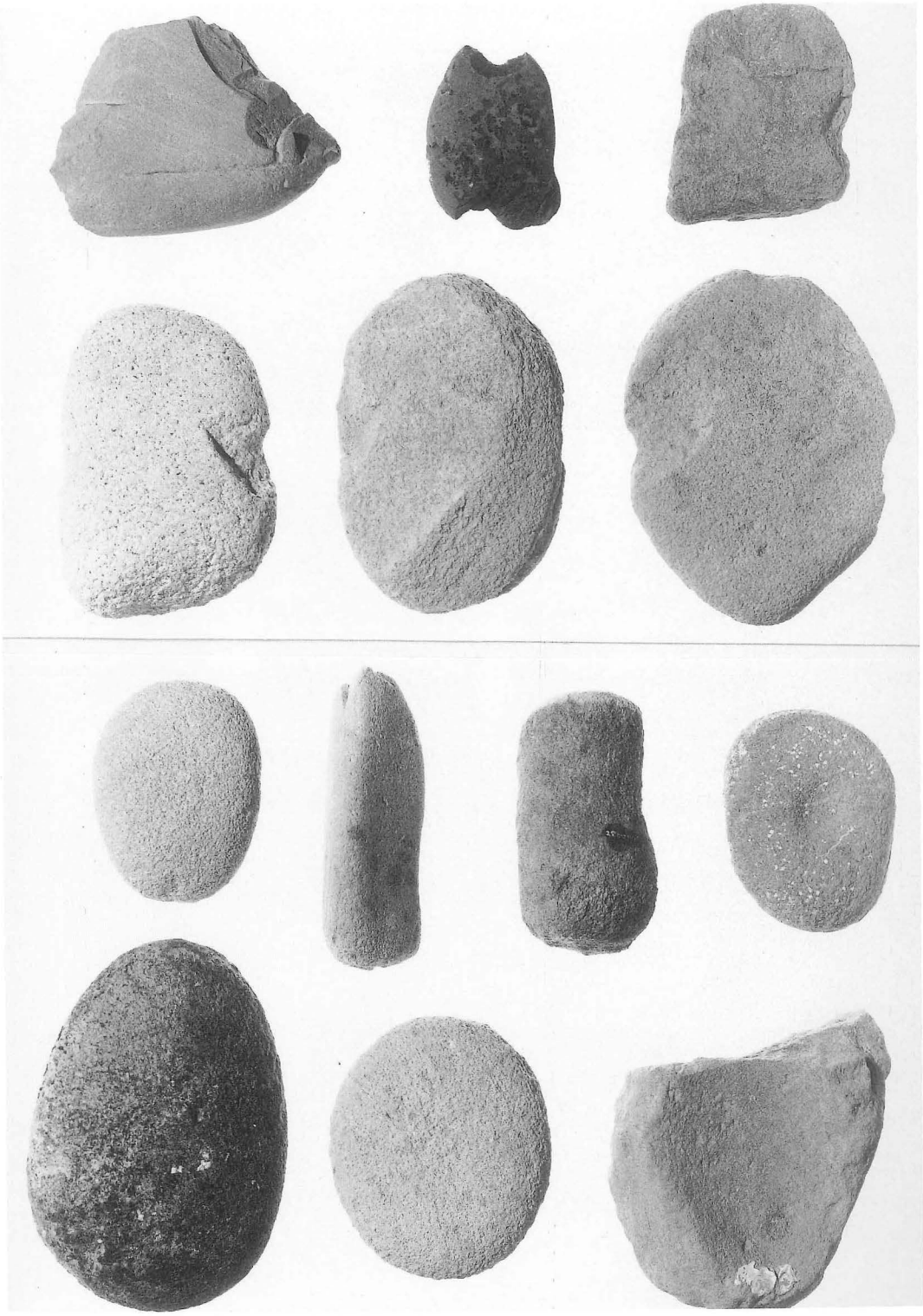
出土石器①



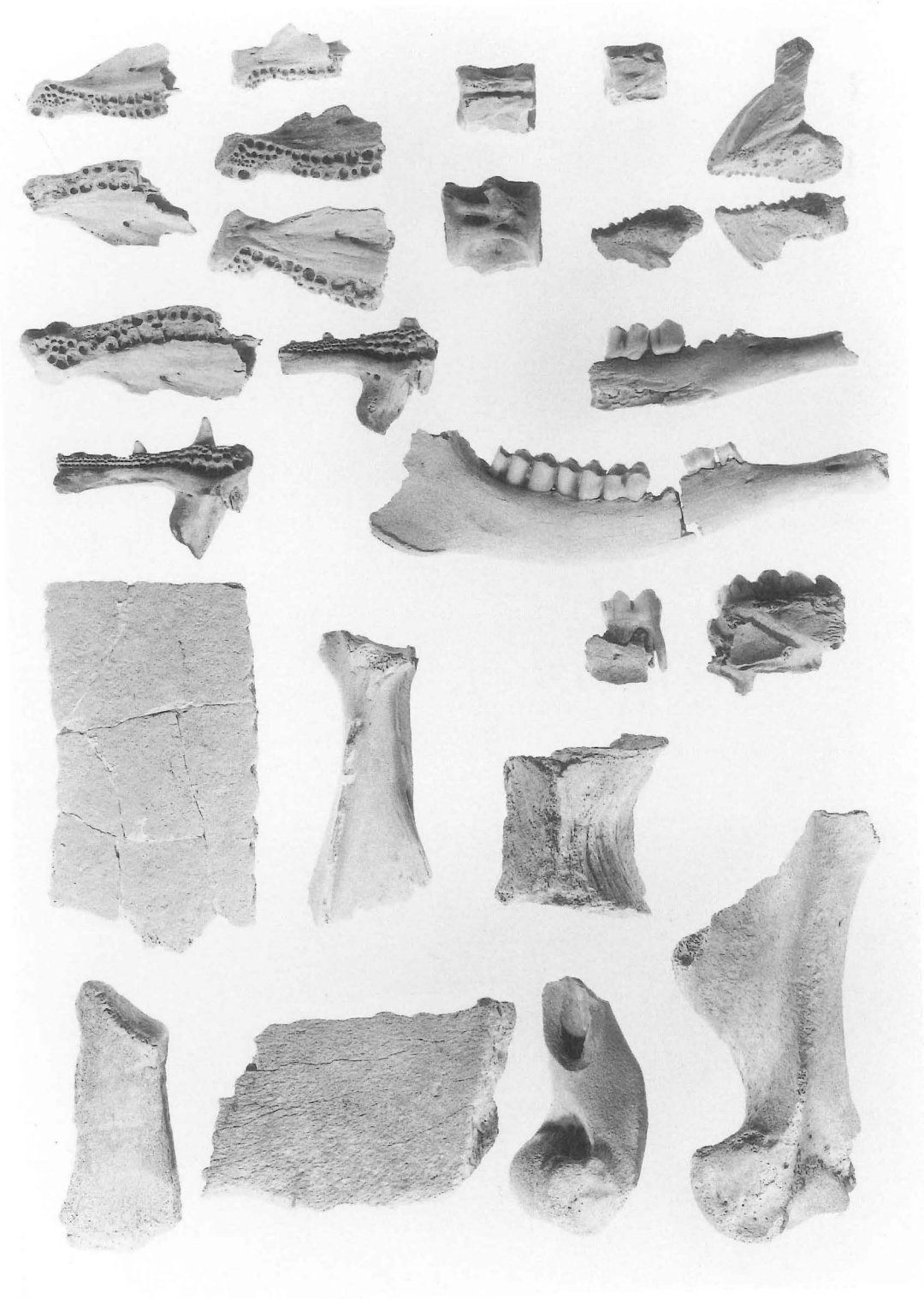
出土石器②



出土石器③



出土石器④



自然遺物

長崎県福江市堂崎遺跡出土の縄文時代人骨

松下　孝幸・佐伯　和信・分部　哲秋

長崎県福江市堂崎遺跡出土の縄文時代人骨

松下　孝幸・佐伯　和信・分部　哲秋

【キーワード】：長崎県，縄文時代人骨，頭頂骨，上腕骨，大腿骨

はじめに

堂崎遺跡は長崎県福江市（五島）奥浦町堂崎に所在する。本遺跡は周知された遺跡であるが，1987年（昭和62年）の台風12号のため海岸線が侵食され，遺物が散乱する状態になり，遺跡の保護対策を行う必要が生じた。そのため福江市教育委員会は本遺跡の範囲確認調査を1990年と翌91年に行った。今回調査が行われたのは地先公有水面で，満潮時には海面下に没する部分である。

なお，本遺跡は，1908年（明治41年）に建てられ，県文化財に指定されているゴシック風様式赤煉瓦作りとして有名な堂崎教会の南側にある砂丘上に形成された遺跡である。

五島列島からは富江町の宮下遺跡（未報告）と福江市の白浜貝塚（松下・他，1980）から縄文時代人骨が出土しているだけで，その出土量は少ない。弥生時代人骨は福江市の大浜遺跡と有川町の浜郷遺跡から出土しており，後者からの量は多く，西北九州地域の弥生人の例として研究され，活用されている（内藤，1971）。

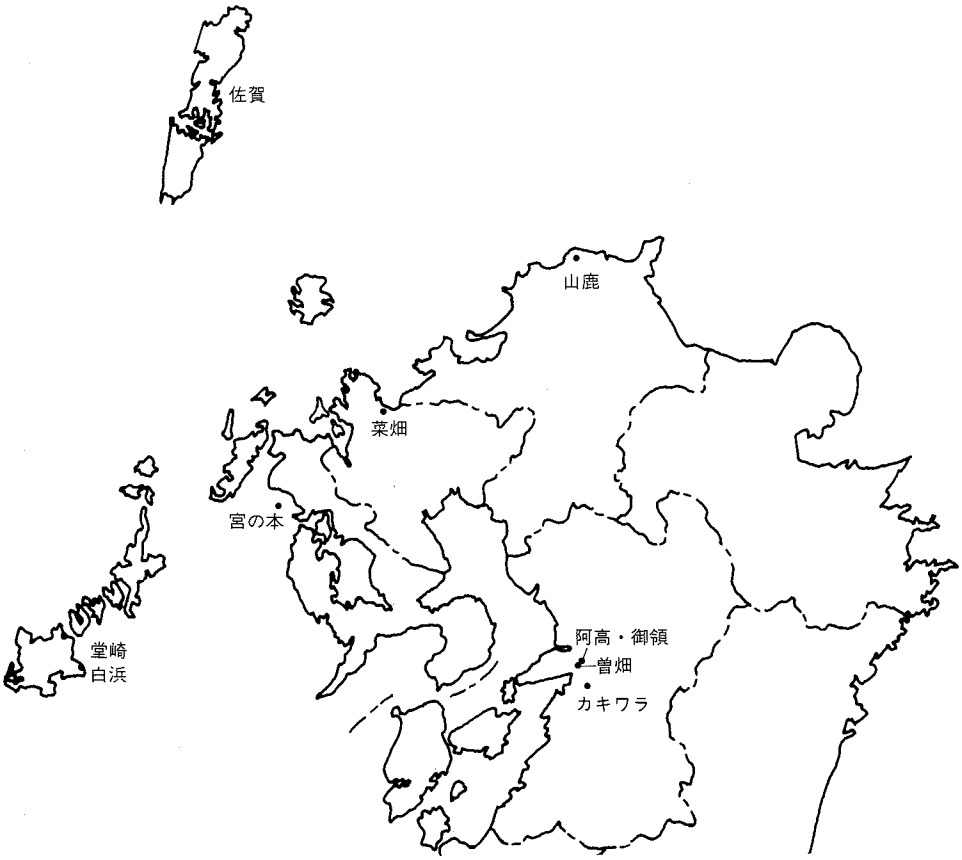
人骨は1991年の調査で検出された。その量は少ないが，縄文時代前期に所属する人骨であり，本県では初めて出土例であり，資料としてはきわめて貴重である。

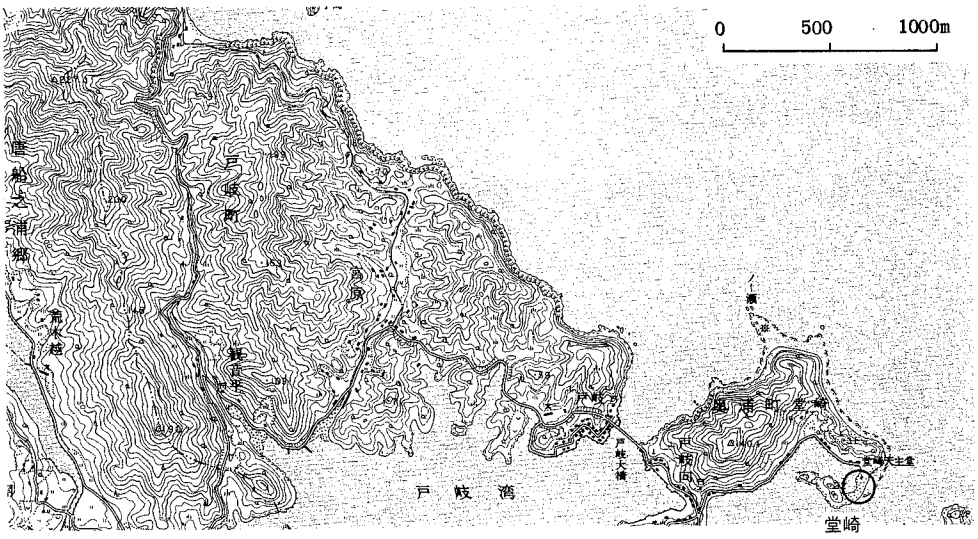
人骨の残存部位や性別・年齢などを推測したので，その結果を報告したい。

資　　料

本遺跡の1991年の調査で出土した人骨は図２に示すとおりで，頭蓋の一部，右側上腕骨２本，大腿骨１本および四肢長骨片が２片である。

＊ Takayuki MATSUSHITA, Kazunobu SAIKI, Tetsuaki WAKEBE
Department of Anatomy, Nagasaki University School of Medicine
〔長崎大学医学部解剖第二教室〕





図Ⅰ．遺跡の位置
(Fig.I. Location of the Dozaki site, the Goto Islands, Hukue city, Nagasaki Prefecture)

人骨はすべて成人骨で，骨質は堅牢であり，磨滅もなく，保存状態はきわめて良好である。頭蓋はやや大きな4片に分かれていたが，これらはすべて接合可能であったので，復元した結果，この骨はほぼ完全な右側頭頂骨になった。上腕骨は2本とも右側で，1本は遠位半が，残り1本は骨体中央部が残存していた。大腿骨は後面を欠損した骨体中央部が残存しており，これは左右いずれか判別できない。

出土人骨には上腕骨が重複しているので，これらには少なくとも2体分の人骨が存在すると推測される。また，人骨の出土位置から推測して，頭蓋，上腕骨1および大腿骨は同一個体の可能性もある。

なお，各骨から推測した性別・年令は表1のとおりである。

表1　資料　(Table1. List of skeletons)

部位	性別	年令
頭蓋（右側頭頂骨）	不明	壮年
上腕骨1	男性	不明
2	女性	不明
大腿骨	男性	不明

これらの人骨は，別稿で述べられているように，考古学的所見より，縄文時代前期（轟B式，約6,000年前）に属する人骨群である。

計測方法は，Martin－Saller(1957)によった。

なお，比較資料としては菜畑縄文人（松下・他，1983），阿高縄文人（大森，1960），佐賀縄文人（松下・他，1989），カキワラ縄文人（松下・他，1986），山鹿縄文人（九州大学，1988），津雲縄文人（清野・他，1928），白浜縄文人（松下・他，1980），宮の本縄文人（松下，1981），御領縄文人（金関・他，1955），出水縄文人（大森・他，1960）を用いた。

所　　見

1．頭　蓋

右側頭頂骨である。骨質は堅く堅牢で，骨壁の厚さは前頭角部で7㎜，後頭角部で10㎜ある。三主縫合が観察できたが，これらはいずれも開離していたものと考えられる。

性別は正確には不明であるが，骨壁が厚いことから男性の可能性が考えられる。

2．上腕骨1（男性）

右側の骨体中央部が残存していた。大きさは大きく，三角筋粗面の発達も良好である。

計測値は，中央最大径が23㎜（右），中央最小径は18㎜（右）で，骨体断面示数は78.26（右）

となり，骨体の扁平性はあまり強くない。骨体最小周は62mm（右），中央周は67mm（右）で，骨体はやや大きい。

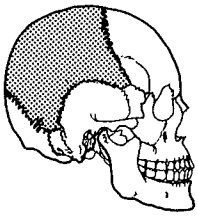
骨体の径が大きいことから，男性上腕骨と推定した。

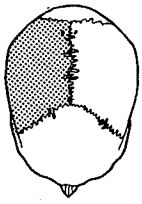
3．上腕骨2（女性）

右側の遠位半が残存していた。上腕骨滑車がやや欠損している。骨体の径はやや小さい。

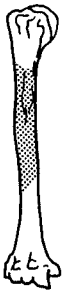
計測値は，骨体最小周が57mm（右）で，骨体は細い。

骨体の径が小さいことから，女性上腕骨と推定した。

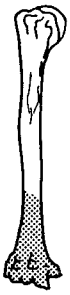




右側頭頂骨（性別不明・壮年）
(Right parietal bone, sex is unknown)



上腕骨1（男性）
(Humerus 1, male)



上腕骨2（女性）
(Humerun 2, female)

図2．人骨の残存部，アミかけ部分
(Fig.2. Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)

4．大腿骨（男性）

骨体中央部が残存しているにすぎない。粗線の発達はあまり良くないが，骨体中央部では両側面が後方へ発達している。後面を欠損しているので左右を特定できないが，中央部の計測は可能である。

計測値は，骨体中央矢状径が28mm，横径は25mmで，骨体中央断面示数は112.00となり，骨体両側面の後方への発達は良好である。骨体中央周は85mmで，骨体はやや太い。骨体上部の様態は不明である。

骨体の径が大きいことから，男性大腿骨と推定した。

考　　察

出土人骨のうち，男性の上腕骨と大腿骨に関して若干の考察を行なっておきたい。

1．上腕骨

表2は縄文人男性上腕骨の主要計測値の比較表である。左から縄文前期人，中期人，後期人の順に並べている。まず，骨体の大きさを骨体最小周と中央周で検討してみると，前者は62㎜で，菜畑縄文人とカキワラ縄文人よりも大きいが，御領縄文人，山鹿縄文人，阿高縄文人，津雲縄文人よりは小さく，佐賀縄文人，白浜縄文人および宮の本縄文人の値に近い。後者は67㎜で，やはり菜畑縄文人，宮の本縄文人よりも大きく，山鹿縄文人，白浜縄文人および御領縄文人よりも小さく，比較的佐賀縄文人，カキワラ縄文人の値に近い。また，骨体断面示数は78.26で，この示数値は菜畑縄文人よりは小さいが，その他の比較資料よりは大きく，扁平性はきわめて弱い。

すなわち，堂崎縄文人の男性上腕骨は縄文人男性としては骨体が細く，扁平性がきわめて弱い上腕骨である。

表2　上腕骨計測値（男性，右，㎜）
(Table 2. Comparison of measurements and indices of male right humeri)

		堂崎 縄文前期人 (松下・他)		菜畑 縄文前期人 (松下・他)		阿高 縄文中期人 (大森)		佐賀 縄文後期人 (松下・他)		カキワラ 縄文後期人 (松下・他)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
5.	中央最大径	1	23	1	19	14	24.86	3	24.67(左)	2	23.00
6.	中央最小径	1	18	1	16	14	18.43	3	17.00(左)	2	16.00
7.	骨体最小周	1	62	1	56	15	67.87	4	61.25(左)	2	60.00
7(a).	中央周	1	67	1	60		—	3	68.33(左)	2	66.50
6/5	骨体断面示数	1	78.26	1	84.21	14	74.23	3	69.23(左)	2	69.89

表2　続き（Table 2. Continued）

山鹿 縄文後期人 (九州大学)		津雲 縄文後期人 (清野・他)		白浜 縄文晩期人 (松下・他)		宮の本 縄文晩期人 (松下)		御領 縄文晩期人 (金関・他)	
n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
5	25.2(左)	20	23.9	1	27	1	22	3	25.50(左)
5	18.0(左)	20	17.5	1	17	1	16	3	19.00(左)
5	68.0(左)	20	65.2	1	63	1	61	3	73.33(左)
5	71.4(左)		—	1	73	1	64	3	72.33(左)
5	71.6(左)	20	72.7	1	62.96	1	72.73	3	74.50(左)

2．大腿骨

男性の骨体の計測値を上腕骨と同じように比較してみた(表3)。大腿骨の場合は縄文人ばかりではなく，参考までに大友弥生人（松下，1981）とも比較してみた。まず，骨体の大きさを骨体中央周で検討してみると，堂崎縄文人は85mmで，菜畑縄文人，出水縄文人および白浜縄文人よりは大きいが，阿高縄文人，山鹿縄文人，宮の本縄文人よりも小さく，カキワラ縄文人，津雲縄文人，御領縄文人の値に近い。また大友弥生人よりもわずかに小さい。骨体中央断面示数は112.00で，出水縄文人，佐賀縄文人，カキワラ縄文人，白浜縄文人，宮の本縄文人，御領縄文人よりも大きく，菜畑縄文人，阿高縄文人，山鹿縄文人，津雲縄文人よりも小さく，大友弥生人の平均値と大差ない。すなわち，大腿骨体の大きさは縄文人としてはやや小さい方で，骨体中央断面示数もどちらかといえば小さい方に属し，柱状性の程度は大友弥生人程度である。

表3　大腿骨計測値（男性，右，mm）
(Table 3. Comparison of measurements and indices of male right femora)

		堂崎 縄文前期人 (松下・他)		菜畑 縄文前期人 (松下・他)		阿高 縄文中期人 (大森)		出水 縄文中期人 (大森・他)		佐賀 縄文後期人 (松下・他)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
6.	骨体中央矢状径	1	28	1	28	15	30.07	1	25	4	29.25
7.	骨体中央横径	1	25	1	22	15	25.60	1	24	4	26.75
8.	骨体中央周	1	85	1	80	15	88.73	1	79	4	88.00
6/7	骨体中央断面示数	1	112.00	1	127.27	15	117.58	1	104.17	4	109.51

＊堂崎は左右不明

表3　続き（Table 3. Continued）

カキワラ 縄文後期人 (松下・他)		山鹿 縄文後期人 (九州大学)		津雲 縄文後期人 (清野・他)		白浜 縄文晩期人 (松下・他)		宮の本 縄文晩期人 (松下)		御領 縄文晩期人 (金関・他)		大友 弥生人 (松下)	
n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
2	27.00(左)	6	30.7	19	29.3	1	26	1	29	2	27.50	41	28.85
2	25.50(左)	6	26.5	19	25.5	1	24	1	28	2	27.25	41	26.07
2	85.00(左)	6	90.3	19	86.8	1	80	1	90	2	86.00	41	87.22
2	105.93(左)	6	115.7	19	114.6	1	108.33	1	103.57	2	100.9	41	111.72

要　　約

長崎県福江市（五島）奥浦町堂崎の地先公有水面に所在する堂崎遺跡は1990年と翌91年に範囲確認調査が行われ，1991年の調査で縄文時代前期に属する人骨が出土した。発掘された人骨の量は少ないが，骨質は堅牢であり，縄文人前期人骨が出土したのは長崎県では今回が初めて

であり，資料としては貴重である。人類学的観察や計測を行い，次の結果を得た。

1．今回の調査で発掘された人骨は，右側頭頂骨１個，右側上腕骨２本，左側大腿骨１本で，体数は上腕骨から少なくとも２体分である。

2．これらの人骨は，縄文時代前期（轟Ｂ式，約6,000年前）に属する人骨群である。

3．右側頭頂骨は，堅く堅牢で，骨壁は厚い。

4．男性上腕骨は骨体が縄文人としてはやや小さく，扁平性がきわめて弱いが，三角筋粗面の発達は良好である。

5．女性上腕骨も骨体が細い。

6．男性の大腿骨体は大きさも骨体中央断面示数も縄文人としてはやや小さい方ではあるが，骨体中央断面示数は112.00を示し，柱状性が認められる。

7．本縄文時代前期人の四肢骨は，縄文人としては径がやや小さいが，一般的に縄文人は前期人の方が後・晩期人に比して四肢骨がきゃしゃだといわれているので，本例もこうした傾向を示しているものと考えられる。

謝　　辞

擱筆するにあたり，本研究と発表の機会を与えていただいた長崎県教育庁文化課の諸先生方に感謝致します。

参考文献

1．金関丈夫，原田忠昭，浅川清隆，1955；熊本県下益城郡豊田村御領貝塚発掘の人骨について。人類学研究，２：93－163.

2．清野謙次，平井　隆，1928：津雲貝塚人人骨の人類学的研究　第三部　上肢骨の研究。人類学雑誌，43，第３付録：179－301.

3．清野謙次，平井　隆，1928：津雲貝塚人人骨の人類学的研究　第四部　下肢骨の研究。其一　人類学雑誌，43，第４付録：303－390.

4．九州大学医学部解剖学第二講座，1988：日本民族・文化の生成，２，九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成，六興出版，東京。

5．Martin-Saller,1957：Lehrbuch der Anthropologie.Bd.l.Gustav Fisher Verlag,Stuttugart：429－597.

6．松下孝幸，分部哲秋，1980：串島遺跡出土の人骨。串島遺跡（長崎県文化財調査報告書51）：133－135.

7．松下孝幸，分部哲秋，1980：五島・白浜貝塚出土の縄文晩期人骨。白浜貝塚（福江市文化財調査報告書２）：120－133.

8．松下孝幸，1981：宮の本遺跡出土の人骨。宮の本遺跡（佐世保市埋蔵文化財調査報告書）：93－109,114－118,145－146.

9．松下孝幸,1981：大友遺跡出土の弥生時代人骨。大友遺跡(佐賀県呼子町文化財調査報告書１)：223－253.

10．松下孝幸，分部哲秋，石田肇，佐熊正史，1983：佐賀県唐津市菜畑遺跡出土の人骨。菜畑遺跡（唐津市文化財調査報告５）：388－398.

11．松下孝幸，分部哲秋，中谷昭二，1986：熊本県小川町七ツ江カキワラ貝塚出土の縄文時代人骨。七ツ江カキワラ貝塚・竹の下貝塚（熊本県文化財調査報告第79集）：39－70.

12．松下孝幸，分部哲秋，1988：熊本県曽畑貝塚低湿地遺跡出土の縄文時代人骨。曽畑－熊本県宇土市花園町曽畑貝塚低湿地の調査－（熊本県文化財調査報告第100集）：242－249.

13．松下孝幸，佐伯和信，折原義行，小山田常一，1989：長崎県峰町（対馬）佐賀貝塚出土の縄文時代人骨。佐賀貝塚（峰町文化財調査報告書第９集）：193－228.

14．松下孝幸，分部哲秋，佐伯和信，小山田常一，1989：沖縄県北谷町伊礼原Ｂ遺跡出土の人骨。北谷町文化財発掘調査報告第８集：39－48.

15．内藤芳篤，1971：西北九州出土の弥生時代人骨。人類学雑誌，79：236－248.

16．内藤芳篤，1973：沖の原遺跡の人骨。長崎大学解剖学第二教室

17．岡本辰之輔，1929：肥後国下益城郡阿高村西阿高貝塚人人骨の人類学的研究（其の二，四肢骨について)。人類学雑誌，44（第三附録）：77－105.

18．大森浅吉，1960：故南山大学教授中山英司博士により測定された阿高貝塚人骨の測定値。人類学研究，７（附録）：211－230.

19．大森浅吉，松野茂，大森勲，甲原筑磨，竹之下克己，林治茂，1960：薩摩国出水貝塚出土（昭和二十九年）の人骨。鹿児島医会誌，33：269－282.

表 4　上腕骨計測値（mm）（Humerus）

		堂　崎 上腕骨 1 男　性 右	堂　崎 上腕骨 2 女　性 右
4.	下　端　幅	—	50
5.	中央最大径	23	—
6.	中央最小径	18	—
7.	骨体最小周	62	57
7(a).	中　央　周	67	—
13.	滑　車　深	—	22
14.	尺骨頭窩幅	—	22
15.	尺骨頭窩深	—	11
6/5	骨体断面示数	78.26	—

表 5　大腿骨計測値（mm）（Femur）

		堂　崎 男　性 左右不明
6.	骨体中央矢状径	28
7.	骨体中央横径	25
8.	骨体中央周	85
6/7	骨体中央断面示数	112.00

Human Skeletal Remains Excavated from the Dozaki Site, Fukue City, Nagasaki Prefecture.

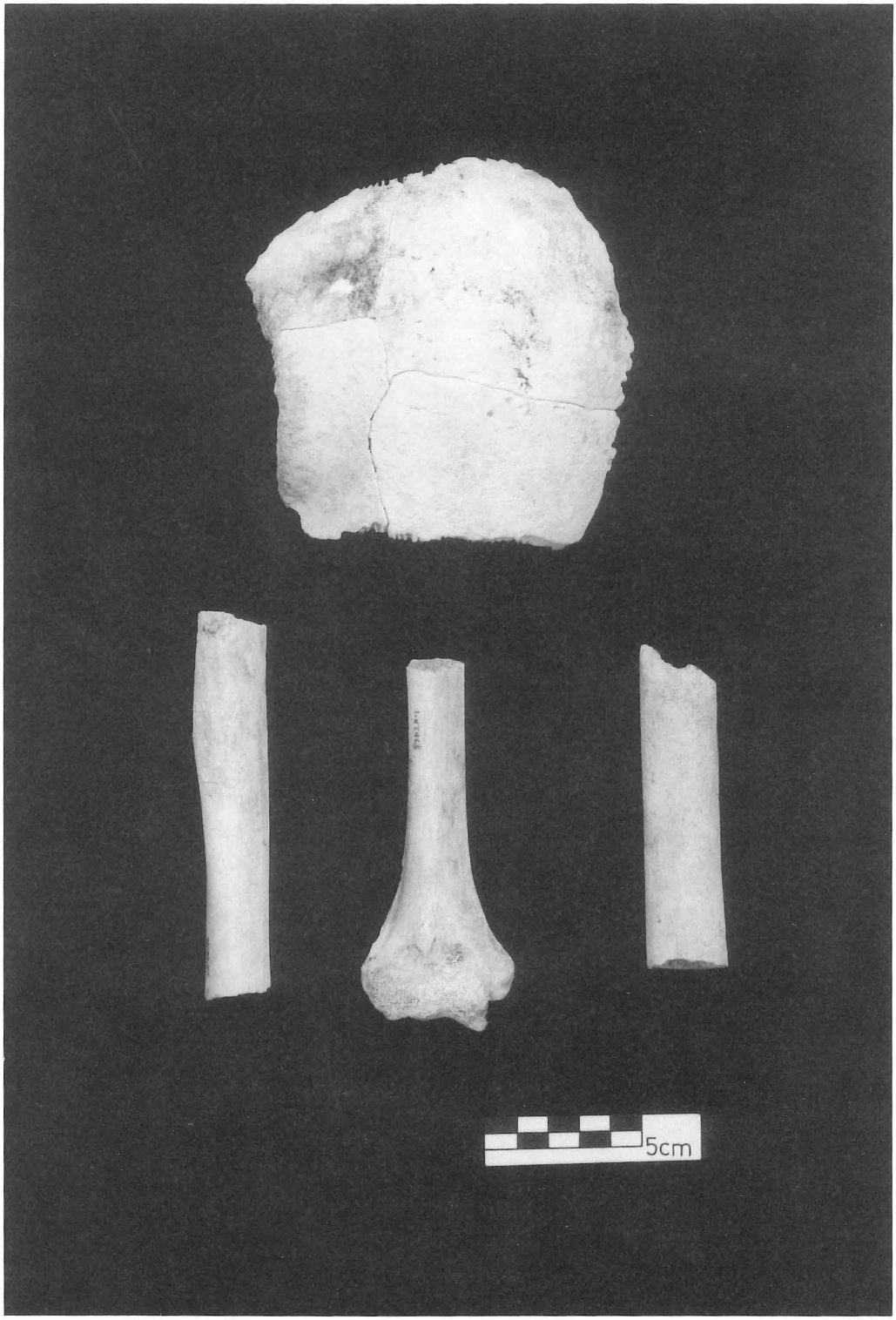
Takayuki MATSUSHITA, Kazunobu SAIKI, Tetsuaki WAKEBE
〔Department of Anatomy, Nagasaki University School of Medicine〕

Keywords: Nagasaki Pref., Jomon skeletons, Parietal bone, Humerus, Femur

Human skeletal remains dating the early phase of the Jomon Period (6,000B.P.) were excavated from the Dozaki site, Fukue city, Nagasaki Prefecture, in 1991.

An anthropological study of the human skeletal remains was conducted.

There are a right parietal bone, two right humeri and a left femur. The size of a male humerus is small and not flat. A female humerus is small too. A male femur is small and pilasteric.



堂崎遺跡出土人骨（頭蓋，上腕骨，大腿骨）
(Dozaki, skull. humerus, femur)

長崎県福江市堂崎遺跡の貝類より見た考察

長崎県福江市堂崎遺跡の貝類より見た考察

山　本　愛　三

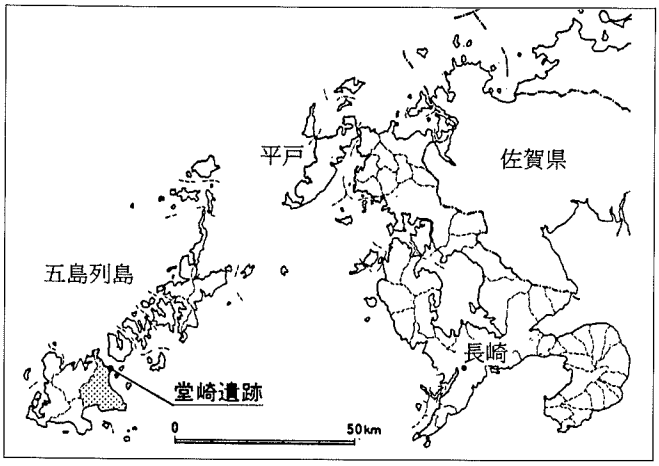
1．序

平成2年6月25日から7月8日の間，本遺跡の発掘が行われ，その折りの貝類資料の分析の依頼を受けた。この機会を与えて下さった長崎県教育庁文化課主任文化財保護主事安楽勉先生を始め直接発掘調査に参加された方々，関係諸氏に深甚の謝意を表すものである。

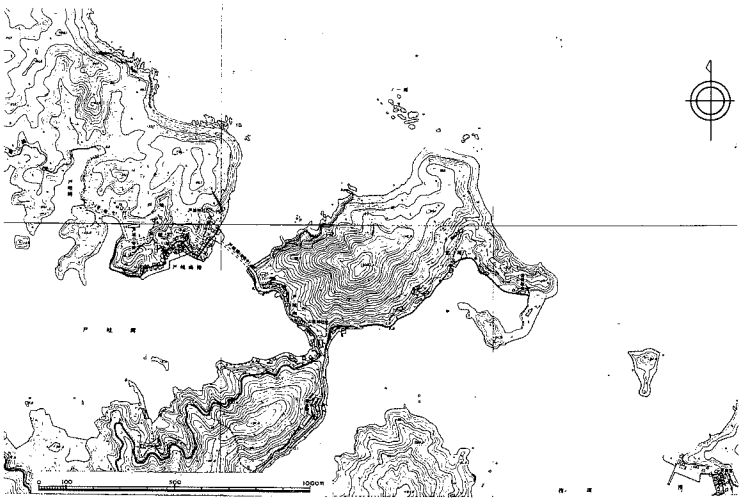
2．本遺跡の立地と概況

本遺跡は第1図，第2図に示す様に，長崎県福江市奥浦2010番地(堂崎)にあり遺跡は陸繋島として発達した砂嘴状地形の首部に位置し小砂丘をのせる。遺物はシカ，イノシシなどの獣骨や魚骨，貝類が多数出土し土器は轟式，曽畑式が出土し縄文前期と考えられる。上層からは縄文中期の阿高式土器や条痕文を主体とする後期の土器が出土する。

調査対象面積
14000m²
調査面積137m²
である。



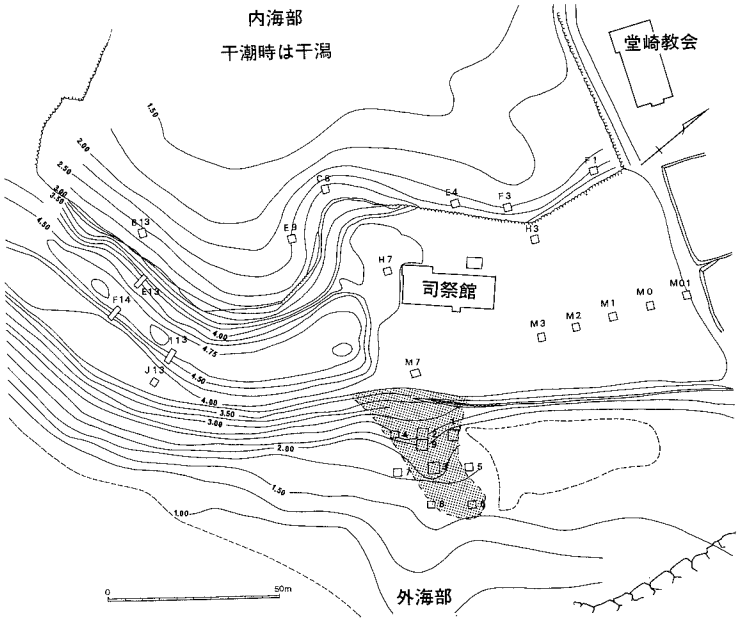
第1図　堂崎遺跡位置図



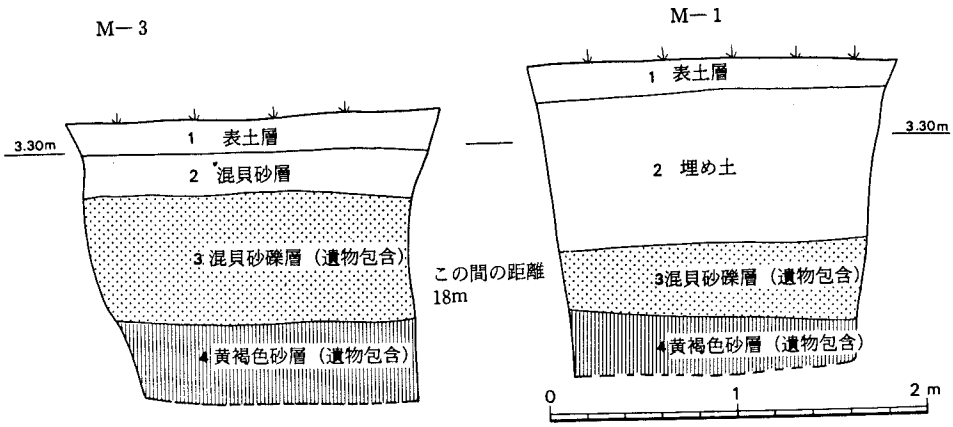
第2図　堂崎遺跡周辺図

3．貝類資料の分析

貝類資料として抽出されたものは第３図M１及びM３第４層で示されたものでパンボックスで12箱に土ごと移動し分析をおこなった。その結果は第１表に個体数，％，群集型として示した。時期的には土器や石器の出土から縄文前期相当と考えられる。



第３図　堂崎遺跡調査区配置図



第４図　M－１・M－３東側土層実測図

4．貝類より見た遺跡形成時の自然環境の復元

第2表に生態群集別構成表を示した様に，本遺跡出土の貝類は，岩礁性貝類が60.7%をしめると共に，内湾性が37.5%，砂泥性その他が残り4.26%をしめている。縄文前期の海進と気温上昇雨量の増加は陸地に掃流作用をもたらし大きい岩石は海岸に，比重の軽い細粒は泥となって深海へ，やや重いものは砂となって浅海に堆積したが，以後の海退や海流や風の作用を受け遺跡形成時既に陸繋島を形成し内懐に内湾を抱えていたと考えられ，内湾性貝類が37.5%をしめる事からも類推される。その後，縄文後期にかけ更に海退が進行し現海面より1～2mラインまで平均海面は低下したと考えている。(少なくとも長崎ではこれを証明する多くの海岸遺跡を示すことが出来る）こうして露出した砂浜は風や海進，海流の作用を受け徐々に遺跡を被い，小砂丘形成にまで至ったと思われる。

第2表　堂崎遺跡貝類生態群集別構成表

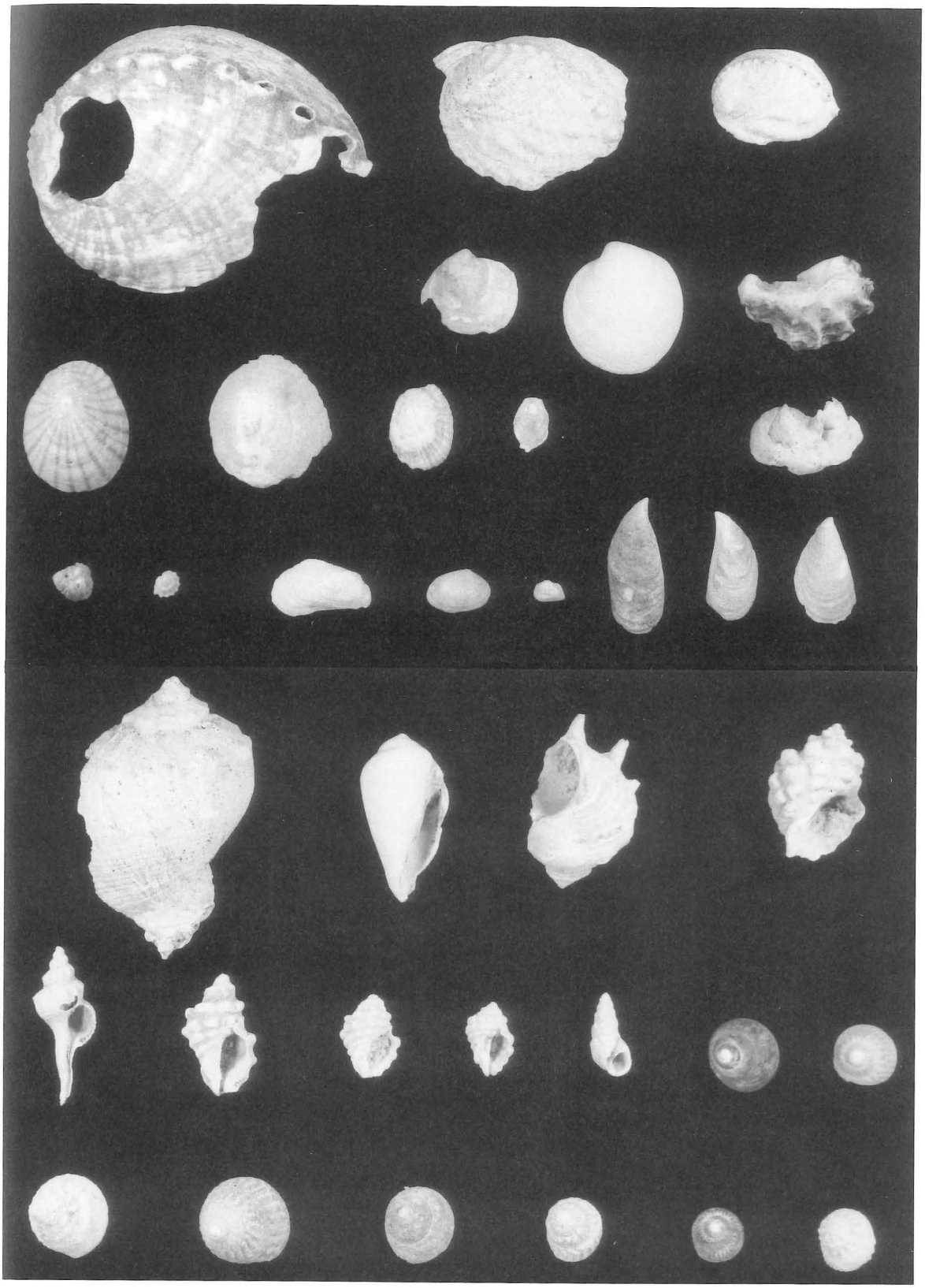
生　態　群　集		個体数(%)
I型	潮間帯岩礁　群集	3899(60.7%)
II型	潮間帯内湾砂泥底汽水　群集	2409(37.5%)
III型	潮間帯～30m細砂～砂泥底群集	15(0.2%)
IV型	亜潮間帯上部（～30m）　群集	79(1.2%)
V型	同　上　（5～10m）群集	3(0.05%)
VI型	同　上　（5～30m）群集	18(2.8%)
VII型	他物着生　群集	2(0.03%)

第1表 長崎県・福江堂崎遺跡出土貝類組成表（一部蔓脚類を含む）

種数	種　　名	体　数	%	群集型
1.	*Turbo coronata coreensis* (Recluz, 1853) スガイ	623	25.3	
2.	*Chlorostoma nigricolor* (Dunker, 1860) クマノコガイ	774	12.0	
3.	*Omphalius pfeifferi* (Gmelin, 1791) オオコシダカガンガラ	386	6.0	
4.	*Batillus cornutas* (Lightfoot, 1786) サザエ	256	4.0	
5.	*Septifer bilocularis* (Linne, 1758) クジャクガイ	106	1.6	I　型
6.	*Reishia bronni* (Dunker, 1860) レイシガイ	103	1.6	
7.	*Chlorostoma argyrostoma lischkei* (Tapparone-Canefri, 1874) クボガイ	101	1.6	
8.	*Manodonta labio confusa* (Tapparone-Canefri, 1874) イシダタミガイ	97	1.5	
9.	*Omphalius ruslicus* (Gmelin, 1791) コシダカガンガラガイ	80	1.2	
10.	*Omphalius nigerrima* (Gmelin, 1791) ヒメクボガイ	72	1.1	
11.	*Cellana nigrolineata* (Reeve, 1854) マツバガイ	53	0.8	
12.	*Nerdotis discus* (Reeve, 1846) クロアワビ	33	0.5	
13.	*Nerdotis siboldi* (Reeve, 1846) メカイアワビ	30	0.5	
14.	*Chlorostoma argyostoma turbinatum* (A. Adams, 1853) ヘソアキクボガイ	21	0.3	
15.	*Nerdotis giganta* (Gmelin,1791) マダカアワビ	16	0.2	
16.	*Tectus pyranin* (Born, 1780) ギンタカハマ	16	0.2	
17.	*Reishia luteostoma* (Holten, 1803) クリフレイシガイ	12	0.2	
18.	*Reishia clanigera* (Koster, 1860) イボニシ	9	0.1	
19.	*Serpulorbis imbricatus* (Dunker, 1860) オオヘビガイ	9	0.1	
20.	*Heminerita japonica* (Dunker, 1860) アマガイ	8	0.1	
21.	*Cellana grata stearusii* (Pilsbry, 1891) アミガサガイ	8	0.1	
22.	*Tenguella granulata* (Duclos, 1924) レイシガイダマシ	7	0.1	
23.	*Cardita leana* (Dunker, 1860) トマヤガイ	7	0.1	
24.	*Septifer virgatus* (Wicgamann, 1837) ムラサキインコガイ	6	0.1	
	Nerdotis sp. アワビ類の破片	6	0.1	
25.	*Sairgnyarca virescens* (Reeve, 1884) カリガネエガイ	5	0.08	
26.	*Littorina brevicula* (Philippi, 1844) タマキビガイ	5	0.08	
27.	*Cantharidus japonica* (A. Adams, 1853) チグサガイ	5	0.08	
28.	*Sulculus aquatilis* (Reeve, 1846) トコブシ	4	0.06	
29.	*Crassostrea belcheri* (Sowerby, 1878) イワガキ	4	0.06	
30.	*Balanus tintinnabulum volcano* (Pirsbry, 1890) オオアカフジツボ	4	0.06	

種数	種　　名	体　数	%	群集型
31.	*Trochus spengleri rata* (Dunker, 1860) ウズイチモンジガイ	3	0.05	
32.	*Balanus tintinnabulum rosa* (Pilsbry, 1890) アカフジツボ	2	0.03	
33.	*Theliostyle albicilla* (Linne, 1758) アマオブネガイ	2	0.03	
34.	*Saxostoma echinata* (Quoy et Galmard, 1836) ケガキガイ	2	0.03	
35.	*Japeuthria ferrea* (Reeve, 1850) イソニナ	2	0.03	
36.	*Collisella longfordi* (Habe, 1944) キクコザラガイ	2	0.03	
37.	*Chlamys farreri nipponensis* (Kuroda, 1932) アズマニシキガイ	1	0.02	
38.	*Clypeomorus humilis* (Dunker, 1861) カヤノミカニモリガイ	1	0.02	
39.	*Scelidotoma gigas* (Martens, 1881) サルアワビガイ	1	0.02	
40.	*Euplica versicolor* (Sowerby I, 1832) フトコロガイ	1	0.02	
41.	*Pleuroploca trapeziam paeteli* (Strebel, 1912) ヒメイトマキボラ	1	0.02	
42.	*Pinctada maxima* (Jameson, 1901) シロチョウガイ	1	0.02	
43.	*Notoacmea concinna* (Lischke, 1870) コウダカアオガイ	1	0.02	
44.	*Purpuradusta gracilis japonica* (Schilder, 1931) メダカラガイ	1	0.02	
45.	*Chema* (*Pseudochama*) *retroversa* (Lichke, 1870) サルノカシラガイ	1	0.02	
46.	*Ceratostoma roriflum* (Adams es Reeve, 1850) ハネナショウラクガイ	1	0.02	
47.	*Barbatia lima* (Reeve, 1844) エガイ	1	0.02	
48.	*Pinctada fucata martensis* (Dunker, 1872) アコヤガイ	1	0.02	
49.	*Barbatia stearnsi* (Pirsbry, 1895) ハナエガイ	1	0.02	
50.	*Cellana toreuma* (Reeve, 1855) ヨメガガサガイ	1	0.02	
51.	*Striarca* (*Galactella*) *symmetrica* (Reeve, 1844) ミミエガイ	1		
52.	*Notoacmea gloriosa* (Habe, 1944) サクラアオガイ	1	0.02	
53.	*Dendostrea folium* (Linne, 1758) ワニガキ	1	0.02	
54.	*Erosaria helvola* (Linne, 1758) カモンダカラガイ	1	0.02	
55.	*Spondylus cruentus* (Lischke, 1868) チリボタンガイ	1	0.02	
56.	*Spondylus balbtus* (Reeve, 1856) ウミギクガイ	1	0.02	
57.	*Crassostrea gigas* (Thunberg, 1793) マガキ	1750	27.2	
58.	*Batillaria zonalis* (Bruguiere, 1792) イボウミニナ	605	9.4	

種数	種　　名	体　数	%	群集型
59.	*Cyclina sinensis* (Gmelin, 1791) オキシジミガイ	37	0.6	
60.	*Coecella chinensis* (Deshayes, 1855) クチバガイ	15	0.2	II 型
61.	*Amygdala philippinarum* (Adams et Reeve, 1850) アサリガイ	1	0.02	
62.	*Tresus keenae* (Kuroda et Habe, 1952) ミルクイガイ	1	0.02	
63.	*Dosinorbis japonica* (Reeve, 1850) カガミガイ	5	0.08	
64.	*Meretrix lamarckii* (Deshayes, 1853) チョウセンハマグリガイ	3	0.05	
65.	*Amygdala variegata* (Sowerby, 1852) ヒメアサリガイ	3	0.05	
66.	*Glossaulax reiniana* (Dunker, 1877) ハナツメタガイ	1	0.02	III 型
67.	*Glossaulax didyma hosoyai* (Kuroda et Kira, 1959) ホソヤツメタガイ	1	0.02	
68.	*Conomurex luhuanus* (Linne, 1758) マガキガイ	1	0.02	
69.	*Glossaulax didyma* (Roding, 1798) ツメタガイ	1	0.02	
70.	*Mytilus corsuous* (Gould, 1861) イガイ	74	11.5	
71.	*Tarazeuxis nucronatus* (A. Adams, 1852) ヒメヨウバイ	1	0.02	IV 型
72.	*Fusinus perplexus* (A. Adams, 1854) ナガニシガイ	1	0.02	
73.	*Fusinus spectrum* (Reeve, 1847) カドバリナガニシ	1	0.02	
74.	*Fusinus nodosomliticatus* (Dunker, 1858) コゾナガニシ	1	0.02	
75.	*Glycymeris albolineata* (Lischke, 1872) ベンケイガイ	1	0.02	
76.	*Rapana bezoar* (Linne, 1767) アカニシガイ	2	0.03	
77.	*Chelyconus fulmen* (Reeve, 1843) ベッコウイモガイ	1	0.02	V 型
78.	*Callocardia quttata* (A. Adams, 1864) オフクハマグリ	14	0.2	
79.	*Pugilina ternatana* (Gmelin, 1791) テングニシガイ	2	0.03	
80.	*Glossaulax didyma ampla* (Philippi, 1849) フクロツメタ	1	0.02	VI 型
81.	*Babylonia japonica* (Reeve, 1843) バイガイ	1	0.02	
82.	*Teredo navalis japonica* (Clessin, 1893) フナクイムシガイ	1	0.02	
83.	*Anomia chinensis* (Phillipi, 1849) ナミマガシクガイ	1	0.02	VII 型
	総　　計	6425		



堂崎遺跡出土貝類

福江市文化財調査報告書第５集

福江・堂崎遺跡

平成４年(1992) ３月31日発行

発行所　福江市教育委員会
〒853 福江市福江町478番地
電話(0959)72-6111

印刷所　㈲昭和堂印刷
〒854-03 諫早市長野町1007-２